

長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

— 上伊那郡辰野町 その1 —

昭和47年度

日本道路公団名古屋支社
長野県教育委員会

信州大学附属図書館



3470342258

木忠書

鈴茂蔵

長野県中央道埋蔵文化財 包蔵地発掘調査報告書

— 上伊那郡辰野町その1 —

昭和47年度

日本道路公団名古屋支社
長野県教育委員会

序

昭和47年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の一環として行われた上伊那郡辰野町地内（その1）3遺跡の発掘調査は昭和47年10月12日より40日間に亘って実施された。

この3遺跡のうち、樋口五反田遺跡は樋口兼光にまつわる古代からの伝承がある樋口の地にあり、また越道、平出山の神2遺跡は伊那と諏訪を結ぶ有賀峠にかかる平出地籍にあって、辰野町の古代文化を究明するうえに欠く事のできない資料価値を有している。

発掘調査の結果、調査面積の大きい樋口五反田遺跡からは、弥生後期の集落址と2基の方形周溝墓の発見があり、更に縄文時代中期と後晩期の遺構も検出されて、学界に幾つかの新知見をもたらすことができた。これらはひとえに、日本道路公団名古屋支社、同伊那工事事務所、大沢団長を始めとする調査団各位、長野県伊那中央道事務所、上伊那郡辰野町当局、長野県伊那教育事務所ならびに関係各位の深い御理解と御尽力の賜であり、深甚なる謝意を表する次第である。

昭和48年2月28日

長野県教育委員会教育長 小松孝志

目 次

序	
I 経 過	1
1 調査に至るまで	1
2 発掘日誌	7
II 環 境	14
III 樋口五反田遺跡	17
1 地 形	17
2 遺構・遺物	19
1) 縄文中期住居址	20
(1) 第5号住居址	20
(2) 第6号住居址	20
(3) 第10号住居址	20
(4) 第14号住居址	21
(5) 第15号住居址	21
(6) 第17号住居址	22
(7) 第18号住居址	22
(8) 第19号住居址	22
(9) 単独出土土器	22
2) 縄文住居址等出土遺物	23
(1) 第5号住居址出土土器	23
(2) 第6号住居址出土土器	23
(3) 第10号住居址出土土器	23
(4) 第14号住居址出土土器	24
(5) 第15号住居址出土土器	27
(6) 第17号住居址出土土器	27
(7) 第18号住居址出土土器	27
(8) 第19号住居址出土土器	28
(9) 弥生時代遺構覆土内出土土器	28
(10) C区出土土器	32
(11) 石 器	32
(12) 土製品	35

3) 配石址	35
(1) 配石第1号址	38
(2) 配石第2号址	40
(3) 配石第3号址	40
(4) 配石第4号址	40
(5) 配石第5号址	41
(6) 配石第6号址	41
(7) 配石第7号址	41
(8) 配石第8号址	41
(9) 配石第9号址	42
(10) 配石第10号址	42
(11) 配石第11号址	42
(12) 配石第12号址	42
(13) 配石第13号址	42
(14) 配石第14号址	42
(15) 配石第15号址	42
(16) 配石第16号址	42
4) 配石址出土遺物	43
5) 弥生住居址	46
(1) 第1号住居址	47
(2) 第2号住居址	47
(3) 第3号住居址	48
(4) 第4号住居址	48
(5) 第7号住居址	49
(6) 第8号住居址	49
(7) 第9号住居址	50
(8) 第11号住居址	51
(9) 第12号住居址	51
(10) 第13号住居址	52
(11) 第16号住居址	52
6) 方形周溝墓	54
(1) 第1号方形周溝墓	54
(2) 第2号方形周溝墓	56
7) 弥生時代遺構出土遺物	57
(1) 第1号住居址出土土器	63
(2) 第2号住居址出土土器	63

(3) 第3号住居址出土土器	63
(4) 第4号住居址出土土器	63
(5) 第7号住居址出土土器	63
(6) 第8号住居址出土土器	64
(7) 第9号住居址出土土器	64
(8) 第11号住居址出土土器	64
(9) 第12号住居址出土土器	64
(10) 第13号住居址出土土器	64
(11) 第16号住居址出土土器	65
(12) 第1号方形周溝墓出土土器	65
(13) 第2号方形周溝墓出土土器	65
(14) A区出土土器	65
(15) 自然遺物	65
IV 越道・平出山の神遺跡	73
1 平出地籍遺跡の考古学的意義	73
2 越道遺跡	75
3 平出山の神遺跡	76
V 結 語	78

図 表 目 次

第1表 中央道遺跡調査の経過一覧表	1
第2表 辰野町竜東地区遺跡一覧表	16
第3表 樋口五反田遺跡縄文時代石器出土地点別一覧表	32
第4表 樋口五反田遺跡配石址一覧表	35
第5表 樋口五反田遺跡第16号住C ₁ ・C ₂ 地点出土稲実計測表	68

図 版 目 次

第 1 図	上伊那郡辰野町中央道通過地点遠景	81
	上. 北方より伊那谷を望む	
	下. 東方より樋口五反田遺跡を望む	
第 2 図	樋口五反田遺跡（北方より望む）	82
第 3 図	樋口五反田遺跡配石址（1）	83
	上. 全 景	
	下. 5 号址・6 号址	
第 4 図	樋口五反田遺跡配石址（2）	84
	上. 2 号址・11 号址	
	下. 16 号址	
第 5 図	樋口五反田遺跡弥生住居址	85
	上. 8 号址	
	下. 9 号址	
第 6 図	樋口五反田遺跡方形周溝墓	86
	上. 西方より 1 号址を望む	
	下. 2 号址（手前）・1 号址	
第 7 図	樋口五反田遺跡第 1 周溝墓内弥生住居址	87
	上. 16 号址	
	下. 9 号址	
第 8 図	樋口五反田遺跡第 16 号住居址出土炭化米	88

挿 図 目 次

第1図	天竜川景観	7
第2図	辰野町教育長の視察	8
第3図	平出山の神遺跡の発掘	9
第4図	第1号方形周溝墓土壌	9
第5図	辰野東小学校生徒諸君の見学	10
第6図	8号住の規模	10
第7図	12号住の測量	11
第8図	13号住の炉址	12
第9図	配石第6号址	13
第10図	辰野町竜東地区遺跡分布図	15
第11図	樋口五反田遺跡地形図	18
第12図	樋口五反田遺跡発掘区域	19
第13図	樋口五反田遺跡B区遺構配置図	19
第14図	樋口五反田遺跡第5号住居址実測図	20
第15図	樋口五反田遺跡第6号住居址炉址	20
第16図	樋口五反田遺跡第10・18・19号住居址実測図	21
第17図	樋口五反田遺跡第14・15号住居址実測図	21
第18図	樋口五反田遺跡第17号住居址実測図	22
第19図	樋口五反田遺跡単独出土縄文土器	22
第20図	樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その1(1)	23
第21図	樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その2(2~36)	24
第22図	樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その3(37~18)	25
第23図	樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その4(82~113)	26
第24図	樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その5(114~131)	27
第25図	樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その6(132~169)	28
第26図	樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その7(170~201)	29
第27図	樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その8(202)	31
第28図	樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その9(203~242)	30
第29図	樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その10(243~263)	32
第30図	樋口五反田遺跡出土縄文時代石器実測図その1(1~47)	33
第31図	樋口五反田遺跡出土縄文時代石器実測図その2(48~73)	34

第32図	樋口五反田遺跡出土土偶	31
第33図	樋口五反田遺跡配石址群実測図	36
第34図	樋口五反田遺跡配石址実測図その1 (1・2・3・11)	37
第35図	樋口五反田遺跡配石址実測図その2 (4・6・7)	38
第36図	樋口五反田遺跡配石址実測図その3 (5・9・13)	39
第37図	樋口五反田遺跡配石址実測図その4 (8・10・12)	40
第38図	樋口五反田遺跡配石址実測図その5 (14・15・16)	41
第39図	樋口五反田遺跡配石第16号址出土埋甕	42
第40図	樋口五反田遺跡配石址出土縄文土器拓影その1 (1~44)	44
第41図	樋口五反田遺跡配石址出土縄文土器拓影その2 (45~103)	45
第42図	樋口五反田遺跡配石址出土石鏃実測図 (1~17)	46
第43図	樋口五反田遺跡第1号住居址実測図	46
第44図	樋口五反田遺跡第2号住居址実測図	47
第45図	樋口五反田遺跡第3号住居址実測図	48
第46図	樋口五反田遺跡第4号住居址実測図	49
第47図	樋口五反田遺跡第7号住居址実測図	50
第48図	樋口五反田遺跡第8号住居址実測図	50
第49図	樋口五反田遺跡第9号住居址実測図	50
第50図	樋口五反田遺跡第11号住居址実測図	51
第51図	樋口五反田遺跡第12号住居址実測図	52
第52図	樋口五反田遺跡第13号住居址実測図	52
第53図	樋口五反田遺跡第16号住居址実測図	53
第54図	樋口五反田遺跡第16号住居址内遺物配置図	54
第55図	樋口五反田遺跡第16号住居址発見屋根材	54
第56図	樋口五反田遺跡第1号方形周溝墓実測図	55
第57図	樋口五反田遺跡第1号方形周溝墓北溝	56
第58図	樋口五反田遺跡第2号方形周溝墓実測図	57
第59図	樋口五反田遺跡第2号方形周溝墓西溝内土器出土状態	57
第60図	樋口五反田遺跡出土弥生式土器実測図その1 (1~14)	58
第61図	樋口五反田遺跡出土弥生式土器実測図その2 (15~31)	59
第62図	樋口五反田遺跡出土弥生式土器実測図その3 (32~44)	58
第63図	樋口五反田遺跡出土弥生式土器実測図その4 (45~54)	59
第64図	樋口五反田遺跡出土弥生式土器実測図その5 (55~83)	60
第65図	樋口五反田遺跡出土弥生式土器拓影その1 (84~119)	61
第66図	樋口五反田遺跡出土弥生式土器拓影その2 (120~169)	62
第67図	樋口五反田遺跡第16号住居址発見炭化米	66

第68図	樋口五反田遺跡第16号住居址発見炭化米長幅関係図	66
第69図	有賀峠及び周辺鞍部位置図	73
第70図	有賀峠頂上積石塚	73
第71図	有賀峠壘石	73
第72図	越道・平出山の神遺跡地形図	76
第73図	越道・平出山の神遺跡景観	76
第74図	越道遺跡出土遺物実測図	77
第75図	平出山の神遺跡出土遺物実測図	77

I 経 過

1 調査に至るまで

中央高速自動車道西宮線の建設工事に先立っての埋蔵文化財調査は、昭和42年より開始され、既に6年の才月を閲してきたが、(第1表)、上伊那郡辰野町地区に限っていうならば、この調査が長野県南端の下伊那郡阿智村から行われてきた事、昭和44年8月に至ってようやく辰野町内のルート発表があった事等から、その調査はおそらくは最終年度にまわされることと予想されていた。ちなみに昭和47年度当初の発掘計画に辰野町地区は入っていない。

しかるに、中央道工事は昭和47年度に入って急速な進捗があり、特に橋梁工事が急がれたことから、急拠辰野町にかかる3遺跡の発掘を行わざるを得なくなった。

このために8月15日、公団名古屋支社と現地協議し、そして10月12日より調査実施という運びとなった。調査計画は下記の通りである。

1 調査面積

番号	遺跡名	現況	用地内面積	調査面積
1	平出山の神	畑	450㎡	90㎡
2	越道	畑	200㎡	40㎡
3	樋口五反田	水田	10650㎡	2130㎡
計				2260㎡

2 委託契約期間

昭和47年10月12日～昭和48年3月20日

3 調査日程

発掘調査 40日間
整理執筆 20日間

4 調査団

団 長 大沢和夫
調査主任 桐原 健
調査員 5 名

第 1 表 中央道遺跡調査の経過一覧表

32・4・16	国土開発縦貫自動車道建設法の公布(施行同年7月31日)
32・7・25	中央自動車道予定路線を定める法律制定
39・6・16	国土開発縦貫自動車道建設法の一部改正により、中央自動車予定路線は諏訪回りに改正
41・7・25	五縦貫道整備計画決定、道路整備施行命令が日本道路公団に出る。
〃・8・12	長野県中央自動車道対策協議会開催
〃・8・12	恵那山トンネル立入測量開始
〃・9・22	中央自動車道長野県建設協力会開催
〃・9・30	下伊那郡阿智村の一部、飯田市、鼎町(14km)ルート発表

- 45・2・24 下伊那郡阿智村殿島地区において、県下最初の平地地区本線工事開始
- 〃・2・27 長野県中央道遺跡調査会結成（飯田市上飯田地区の調査に限る）
- 〃・3・2 公団名古屋支社と長野県中央道遺跡調査会との間で、上飯田地区2遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 80万円）
- 〃・3・5 飯田市上飯田地区さつみ・古屋垣外遺跡の発掘調査開始（～3・21）（団長 大沢和夫）
- 〃・3・31 飯田市上飯田さつみ・古屋垣外遺跡発掘調査報告書刊行
- 〃・4・22 公団名古屋支社と協議（45年度の発掘調査について）
- 〃・4・23 上・下伊那地区中央道用地内遺跡視察（県教育委員会担当者）
- 〃・5・8 下伊那郡阿智村～松川町間（57遺跡）埋蔵文化財包蔵地についての意見聴取（県教育委員会回答 5・26）
- 〃・5・14 中央自動車道西の宮線起工式（於多治見市）
- 〃・6・1 公団名古屋支社と協議（発掘調査上の問題について）
- 〃・6・9 下伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（飯田市）
- 〃・6・11 下伊那郡阿智村7遺跡・飯田市（上飯田・座光寺）7遺跡・鼎町2遺跡・上郷町1遺跡について、公団名古屋支社と現地協議
- 〃・6 昭和45年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査予算案を6月県会に提出
- 〃・6・29 上伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（伊那市）
- 〃・6・30 諏訪地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（諏訪市）
- 〃・7・8 上伊那郡宮田村地内7遺跡について、公団名古屋支社と現地協議（～10日）
- 〃・7・22 長野県中央道遺跡調査会結成準備会・第1回理事会開催（飯田市）
- 〃・8・17 下伊那郡阿智村地内7遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 179万円）
- 〃・9・1 飯田地区その1地内10遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 1590万円）
- 〃・9・2 中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査献入式挙行（下伊那郡阿智村小野川川畑遺跡）
- 〃・9・3 下伊那郡阿智村地内7遺跡（川畑・北垣外・橋場・矢平II・杉ヶ洞・宮の脇・坊塚）発掘調査開始（終了9・22）
- 〃・9・3 岡谷市内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～5日）
- 〃・9・5 伊沢県教育長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察
- 〃・9・7 諏訪郡富士見町内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～10日）
- 〃・9・8 田中県教育次長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察
- 〃・9・22 飯田地区その1地内10遺跡（山岸・天伯B・権現堂前・さつみ・赤坂・宮崎A・宮崎B・大門原B・大門原D・大久保）の発掘調査開始（終了46・1・18）
- 〃・10・19 上伊那郡宮田村地内6遺跡（高河原・釈迦堂・宮の沢・元宮神社東・天伯古墳・円通寺）の発掘調査開始（終了45・12・18）
- 〃・10・28 公団名古屋支社総務部長・田中県教育次長、権現堂前・大門原B遺跡視察
- 〃・10・29 公団名古屋支社副支社長、大門原B・大門原D遺跡視察
- 〃・11・16 長野県中央道遺跡調査会第2回理事会開催（飯田市座光寺大門原B・宮崎A、上伊那郡宮田

村天伯古墳視察、理事会富田村福祉センター)

- 45・11・17 公団名古屋支社との協議 (昭和46年度発掘調査地区の選定について)
- 〃 11・28 下伊那郡阿智村地内発掘調査報告会開催 (下伊那郡阿智村智里東小学校)
- 〃 12・5 上伊那郡宮田村地内発掘調査報告会開催 (上伊那郡宮田村福祉センター)
- 〃 12・25 茅野市・原村・諏訪市の一部(12.4km)ルート発表、これをもって県内やく122kmのルート発表完了

- 46・1・12 伊沢県教育長、下伊那郡鼎町山岸遺跡視察
- 〃 2・1 公団名古屋支社と協議 (昭和46年度の発掘調査地区について、飯田市山本・伊賀良地区用地内遺跡視察)
- 〃 2・2 下伊那郡高森町・松川町・上伊那郡飯島町地内遺跡について、公団名古屋支社と現地協議(昭和46年度発掘調査地区決定)
- 〃 2・28 上伊那郡宮田村地内中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃 3・11 飯田地区その1発掘調査報告会催(公団・各事務所・市町村教委に対して)
- 〃 3・15 飯田地区その1発掘調査報告会開催(一般公開)
- 〃 3・20 飯田地区その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃 4・1 飯島町地内その1地区(七久保)7遺跡の発掘調査委託契約成立(委託金額 1224万円)
- 〃 4・12 飯島町地内その1地区(七久保)発掘調査団結団式挙行(飯島町役場)
- 〃 4・13 飯島町地内その1、7遺跡(鋳物師原・鳴尾天白・鳴尾・尾越・道満・北原東・小段遺跡)の発掘調査開始(終了46・7・3)
- 〃 4・26 長野県中央道遺跡調査会第3回理事会開催(伊那市上伊那郷土館)
- 〃 5・24 恵那山トンネル斜坑口および土捨場問題協議会、長野県庁企画部長室で開催(公団名古屋支社、恵那山トンネル東工事事務所、阿智村教育委員会、同建設課、長野県中央道課、飯田中央道事務所、下伊那地方事務所商工建築課、飯田教育事務所、長野県教育委員会)
- 〃 6・7 下伊那郡阿智村園原杉の木平・児の宮遺跡緊急分布調査(～8)
- 〃 6・16 公団本社・同名古屋支社と協議(下伊那郡阿智村園原恵那山トンネル斜坑口と土捨場予定地の保護措置について)
- 〃 7・1 公団名古屋支社から恵那山トンネル飯田方斜坑広場(杉の木平遺跡)埋蔵文化財について意見聴取
- 〃 7・15 飯島町地内その1発掘調査報告会開催(飯島町役場七久保支所)
- 〃 7・20 公団名古屋支社総務部長と県教育長の協議(恵那山トンネル斜坑土捨場問題について)
- 〃 8・1 下伊那郡高森町地内その1(10遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額 3120万円)
- 〃 8・6 下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査団結式と打合せ会(高森町役場)
- 〃 8・10 下伊那郡高森町地内その1地区、10遺跡(弓矢・無縁堂・神堂垣外・鐘鑄原A・瑠璃寺前・大鳥山東部・赤羽根・出原西部・出早神社附近・正木原I)発掘調査開始(9・14中断、10・23再開、終了47・1・14)
- 〃 8・18 恵那山トンネル飯田方斜坑広場埋蔵文化財保護措置について県教委回答

- 46・8・30 公団名古屋支社と恵那山トンネル斜坑広場（杉の木平遺跡）の現地協議
- 〃・8・31 公団名古屋支社と上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）の現地協議
- 〃・9・4 伊沢長野県教育長、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡・高森町鐘鑄原遺跡視察
- 〃・9・10 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査打合せ会（阿智村駒場公民館）
- 〃・9・13 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額730万円）
- 〃・9・14 赤尾長野県教育次長、下伊那郡高森町鐘鑄原遺跡視察
- 〃・9・16 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査開始（終了11・1）
- 〃・9・17 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）委託契約成立（委託金額123万円）
- 〃・9・20 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）発掘調査開始（終了10・13）
- 〃・11・18 長野県議会社会文教委員会一行下伊那郡高森町瑠璃寺前遺跡視察
- 〃・11・19 長野県中央道遺跡調査会第4回理事会開催（高森町畜産センター）
- 47・1・25 飯田市山本・伊賀良12遺跡、下伊那郡鼎町1遺跡について公団名古屋支社と現地協議
- 〃・1・26 下伊那郡高森町地内4遺跡、松川町地内10遺跡、上伊那郡飯島町地内8遺跡、宮田村地内1遺跡、駒ヶ根市地内8遺跡について公団名古屋支社と現地協議
- 〃・1・27 伊那市西春近地内18遺跡について公団名古屋支社と現地協議
- 〃・2・29 上伊那郡飯島町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃・2・29 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃・3・20 下伊那郡高森町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃・3・20 下伊那郡阿智村斜坑広場その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃・3・25 下伊那郡阿智村園原斜坑広場（杉の木平遺跡）発掘調査報告会開催（智里西診療所）
- 〃・3・26 下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（高森中学校）
- 〃・3・27 園原斜坑広場（杉の木平遺跡）、高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（一般公開）
- 〃・4・1 飯田市内その2地区（17遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額2367.5万円）
- 〃・4・1 飯島町内その3地区（8遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額677.1万円）
- 〃・4・1 伊那市西春近地区（18遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額3361.6万円）
- 〃・4・3 飯田市内その2地区発掘調査打合せ会（飯田合同庁舎）
- 〃・4・10 飯田市内その2地区ほか下伊那地区発掘調査団結団式挙行（飯田合同庁舎）
- 〃・4・10 飯田市内その2地区、17遺跡（かぶき畑・柳田・山田・石子原・石子原古墳・ようじ原・上の平東部・寺山・六反田・滝沢井尻・小垣外・三壺淵・上の金谷・辻垣外・大東・酒屋前・大門原B）の発掘調査開始（終了48・2・7）
- 〃・4・24 上伊那地区発掘調査団結団式と発掘調査打合せ会（上伊那地方事務所会議室）
- 47・4・25 飯島町内その3地区、8遺跡（うどん坂南・うどん坂II・うどん坂I・山溝・八幡林・石上神社前・庚申平・太田沢春日平）の発掘調査開始（終了47・6・28）
- 〃・4・25 伊那市西春近地区・18遺跡（和手・富士山下・富士塚・瀧蒲沢・南丘A・南丘B・名廻南・名廻東古墳・名廻・白沢原・山寺垣外・細ヶ谷B・百駄刈・北丘B・大境・山の根・城平・

- 城平上)の発掘調査開始(終了47・12・15)
- 47・4・26 長野県中央道遺跡調査会第5回理事会開催(伊那市上伊那図書館)
- 47・6・20 公団名古屋支社と協議(上伊那地区橋梁工事に伴う調査遺跡追加と石子原遺跡第2次調査について、於県庁教育次長室)
- 〃・6・22 公団名古屋支社と石子原遺跡第2次調査について現地協議
- 〃・7・4 下伊那郡高森町内その2地区(5遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額2002万円)
- 〃・7・7 下伊那郡松川町内(12遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額1864.3万円)
- 〃・7・7 駒ヶ根市内(8遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額563.5万円)
- 〃・7・7 駒ヶ根市内の発掘調査打合せ会(駒ヶ根市教育委員会)
- 〃・7・7 駒ヶ根市内、8遺跡(大徳原南B・大徳原南A・大徳原北・横前南・中山原・新田原・女体北・切石墓地)の発掘調査開始(終了47・9・1)
- 〃・7・14 下伊那郡松川町内の発掘調査打合せ会(松川町福祉センター)
- 〃・7・24 下伊那郡高森町内その2地区、5遺跡(神田裏・新田西裏・増野新切・増野川子石・鐘鑄原A)の発掘調査開始(終了48・2・7)
- 〃・7・24 下伊那郡松川町内、12遺跡(里見II・里見V・境の沢・中原I・庚申原I・庚申原II・平林・やし原・片桐神社東・水上・丈源田III・丈源田IV)の発掘調査開始(終了48・2・7)
- 〃・7・31 飯田市内その3(石子原遺跡第2次調査)の発掘調査委託契約成立(委託金額410万円)
- 〃・8・1 飯田市内その3(石子原遺跡)発掘調査団結団式
- 〃・8・15 公団名古屋支社と上伊那郡南箕輪村内9遺跡と辰野町内その1地区3遺跡について現地協議
- 〃・8・17 飯田市内その3(石子原遺跡)の発掘調査開始(終了47・9・20)
- 〃・8・21 上伊那郡南箕輪村内その1(5遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額1051.5万円)
- 〃・9・1 上伊那郡南箕輪村内の発掘調査打合せ会(南箕輪村公民館)
- 〃・9・4 上伊那郡南箕輪村内その1、その2地区9遺跡(南原・三本木原・曾利目・在家・大芝原・大芝東・南高根・北高根A・北高根B)の発掘調査開始(終了47・12・25)
- 〃・10・11 上伊那郡辰野町内その1地区の発掘調査団結団式と発掘調査打合せ会(辰野町公民館)
- 〃・10・12 上伊那郡辰野町内その1地区3遺跡(五反田・越道・平出山の神)の発掘調査開始(終了47・11・30)
- 〃・10・16 上伊那郡南箕輪村内その2(4遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額514.4万円)
- 〃・11・11 上伊那郡辰野町内その1(3遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額497.2万円)
- 〃・11・15 長野県中央道遺跡調査会第6回理事会開催(伊那市上伊那図書館)

2 発掘日誌

10月11日（水）辰野町その1地区発掘調査前日、伊那教育事務所、中央道伊那工事事務所、辰野町町会議長、辰野町教育委員会、そして調査団一同が、午後1時より上伊那郡辰野町中央公民館に会して打合せ会を持つ。

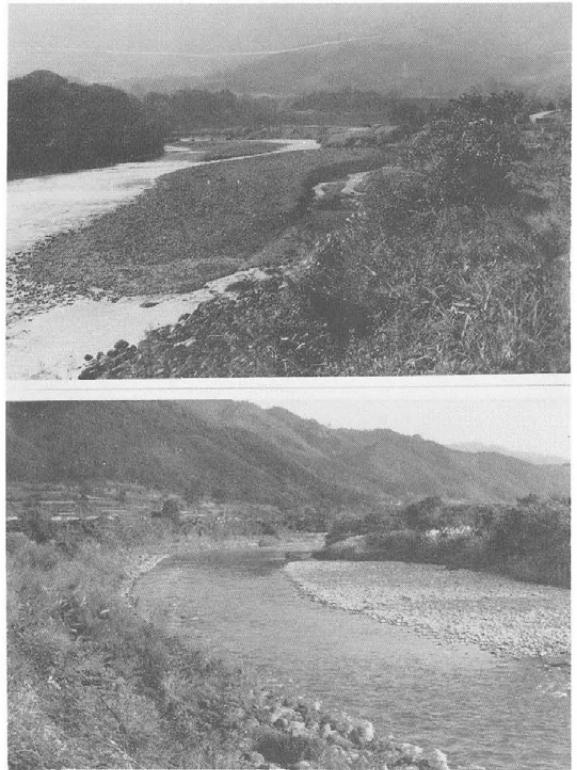
辰野町地区における3遺跡の発掘は、天竜川と上野川の架橋工事のための全くの緊急調査なのだが、辰野町当局の協力厚く、準備万端は既に整っていた。五反田遺跡のある水田からはハゼが撤収され、山の神、越道遺跡では住宅が移転し、きれいに整地されて、すぐに調査できる体制になっている。我々の作業所（宿舎）については、赤羽地区の富士荘アパート3号室が用意されていた。

10月12日（木）五反田遺跡に天幕の張られたのは11月9日、友愛の精神に富む、上伊那地区調査団の手によってである。この幕舎に午前8時半、調査員、作業員が集合し、熊谷辰野町教育委員会教育長の挨拶、主任からの諸注意、諸連絡があって9時よりグリットの杭打ちにとりかゝる。発掘予定は五反田遺跡にその大部分を費し、その間に数日、越道と山の神遺跡を調査する。

なお遺跡名について、五反田と山の神はありふれた地名なので、この2遺跡に限っては大字名を頭にかぶせ樋口五反田遺跡、平出山の神遺跡と呼ぶことにする。

五反田遺跡には休耕田が数枚あり、ものすごく蝗が跳躍している。今村主任が連絡に来て、一日かかって2升ほどとって行った。

10月13日（金）遺跡の南端からグリットを掘り始める。この遺跡は天竜川の氾濫原に臨んだ低位段丘上にあるので、ここに立っと、南に伊那谷が一ぱいに開けて見える（第1図）。木曾義仲四天王の1人樋口兼光がここに居館していたという伝承が抵抗なく受けとられる。



第1図 天竜川景観



第2図 辰野町教育長の視察

と土地の古老が親切に説明してくれる。だが出てくるものは縄文晩期の土器片のみ、中世、近世の陶器片など一点も見当らない(整理の結果、山茶碗の破片が1片あった)。午後になって竪穴1ヶを発見、時期は判らないが、まずは第1号住居址と命名する。

10月17日(火)1号住居址の発掘にかかる。上面をかいて見るのだが、うまく壁の輪廓は把めない。仕方なく床面を出し、それを追って行くこととする。床面はしっかりしているが、その直上から出る遺物は縄文中期土器片、晩期土器片そして弥生後期土器片である。

10月18日(水)本日も1号住の発掘続行。今までの例で一辺5m程度の竪穴だろうと思って掘るのだが、それにしても壁が見つからない。これが壁だろうと思って床面はその下に延びて行ってしまふ。

なお本日は、辰野町教育委員会、同消防団の方々が見学に来られた(第2図)。

10月19日(木)午前中、青山学院大学の田村晃一氏が学生をつれて見学に来られた。遺跡の方は、1号住の輪廓がほぼ把めた。長軸を南北に置く長方形プランで、まづは弥生後期の住居ということになった。ところで、南壁がどうも不明瞭なので思いきって拡張してみる。その結果9.2×6.8mという馬鹿でかい竪穴になってしまった。それと共に、南に接して配石址らしい遺構のあることもわかった。今までに出ていた石塊は、この配石址に関係あるものらしい。明日から、今まで掘り残してきたグリットを全部あけることにする。

10月20日(金)1号住の床面清掃と、1号住の西方に見つかった2号住の発掘を行う。2号住は規模が小さく、輪廓もはっきりしている。中央道の中心杭が住居址の南西隅すれすれに立っている。

午後、1号住では炉址発見、弥生後期の甕が炉壺に用いられていた。

この日、辰野町町長が視察に来られた。ゴム長靴をはいて熱心に説明を聴かれ遺構をみ、作業員の方々と話をされている。

10月21日(土)1号住、2号住の北に、2ヶの竪穴を見出す。3号、4号住とする。すべての住居址の覆土中には石塊がある。縄文中期、晩期の土器片が出る。どうも縄文中期の包含層を弥生時代の住居址が掘りきっているらしい。また縄文晩期と推定される配石址は、1号住の南だけにとどまらず、北方にもひろがっていたらしい。

10月23日(月)2号住の床面清掃と、3・4号住の発掘。4号住は1号住同様の規模をもつ。頂度真中辺に東西に1列、石塊群が並んでいて、その両側の壁の部分が不明瞭になっている。

午後、4号住の東に1竪穴を発見。南壁と北壁はわかったが、東西壁はつかめない。また、南壁、北壁

10月14日(土)グリッド内の層序について、ここは水田なので耕土下の床土が実に堅い。床土の下は砂礫層で、シャベルでは歯が立たず、数少ない鶴嘴が奪い合いで使われる。3列目あたりから赤褐色土となり、石塊が頭を出し始める。縄文晩期の土器片が意外に多い。

10月16日(月)グリットを千鳥に掘っていく。床土下に大きな平石が頭をのぞかせている。「ここには昔、真金寺があって、これはその礎石だよ」など

間の距離は住居址としては狭すぎる。壁高も意外と深く、遺物も出てこない。「変だ」、「変だ」という訳だが、とも角東西壁確認のため拡張に次ぐ拡張。結局は溝になってしまった。溝といえはすぐに方形周溝墓が連想される。明日は更に大拡張しなければならない。

10月24日（火）1日中表土除去。皆黙々として一輪車をひいている。夕刻になって一列となり、ジョレン、草搔でかいてみる。溝はついに折れ曲り北へのび、更に西へ折れて方形周溝墓になることが確認された。この南西隅は4号住を切っている。同住居址上にあった石の列はこの溝の痕跡を示すものだった。

本日、中央道伊那工事事務所より依頼あり、山の神・越道遺跡を今月中に調査してほしいとの事、こちらも一段落したので、明日とりかかるとする。

10月25日（水）山の神・越道の2遺跡は有賀峠へかかる平出地籍にあり、その真中を上野川が流れている。発掘面積は両遺跡とも狭く1日で発掘は完了した。遺構の発見はなかったが、山の神遺跡からは、格子目状の押型文土器が出土した（第3図）。

この日、日本道路公団名古屋支社の佐治武尚氏が、岐阜県瑞浪町教育委員会の方々を案内され見学に来られた。

10月26日（木）再び五反田遺跡へもどる。周溝で圍繞された内部を清掃する。14×11mの規模で、その中央から相当に片寄ったところに土壌があった（第4図）。ところで、この周溝墓は4号住を切っていたが、この内面にも幾つかの住居址を持っている。最底、弥生住居址2、縄文住居址2はあろう。土壌の下にも弥生の住居址がある。

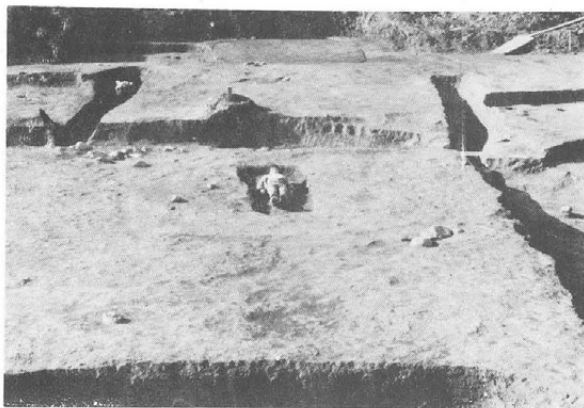
10月27日（金）第1周溝墓の清掃続行。縄文の5号住より中期中葉の蓑がつぶれて出土、早速土器洗いして継ぎだしたが半分足りない。

10月28日（土）3号住の測量と写真撮映のため周囲の土を除く。すると小さな石組炉が出てしまった。縄文中期の住居址が存在していたのである。6号住と命名。床面は不明瞭、柱穴もわからない。弥生時代に毀され、更に水田が造られた時に完全に鋤平されてしまったのであろう。更に北方に2つの竪穴を発見、7号住、8号住とする。

本日、辰野東小学校3年生が先生に引卒されて見学に来た。よく的を射た質問をし、メモをしている。3年生とは思えない熱心さだ（第5図）。



第3図 平出山の神遺跡の発掘



第4図 第1号方形周溝墓土壌



第5図 辰野東小学校生徒諸君の見学

7号住・8号住の床面清掃。午後は測量、8号址は規模が小さい。実際に床に座って気分を出す。そのうち「寝てみなければわからん」ということになる。大人2人で一ぱい、「こりゃ、新婚さんの家だ」(第6図)。

11月1日(水)周溝墓の北溝を掘っていた時からわかっていた11号住居址を調査する。溝に切られて半分しかない。遺物は炉壺に用いられた甕があっただけ。

11月2日(木)周溝墓内に発見された弥生時代の住居址の1つ(9号住居址)を掘り始める。すぐに焼土、木炭が出てきて、火災による廃滅であることが一目瞭然である。そうになると支柱か、桁か梁の炭化材が残っている可能性が強い。しかし、これは無理だった。土器は復元可能なものが幾つも出てくる。現金なもので作業の意気込みが違ってくる。夕刻までにあらかた床面の検出を終えてしまった。

11月6日(月)9号住の床面清掃をする。床面と壁がすごく焼けて真赤だ。火災で廃滅した竪穴なので床が焼けているのは当然の事なのだが、西壁が真赤なのはどういう事なのだろう。土壁を保護する腰板の様なものがあったのだろうか。それとも東からの風が吹いて屋根が西側に倒れ落ちたものなのだろうか。

11月7日(火)第1周溝墓を掘りあげ、全

10月30日(月)7号住・8号住をあわせて掘る。壁は浅く規模は小さい。共に1日にして九分通りを掘りあげた。

これと併せて、遺跡の北限に近く4本のトレンチを東西に平行して入れた。縄文後期の遺物が比較的多く出土したが、住居址等の遺構は見られない。どうも、この遺跡の中心は周溝墓を中心とした40~60m前後ということになりそうだ。

10月31日(火)昨夜は雨、朝雷鳴あり晴天となる。西駒ヶ岳に初雪が見られた。



第6図 8号住(新婚さんの家)

景写真を撮ろうというので、はみ出した北側の溝西端を清掃する。だが、この西端部分、ここが終りではなくて西へ西へといくらでも掘れる。3号住調査の折、北壁が明瞭ではなかった事を考え合せて第1周溝墓発見の時よりも早く気がついた。「これも周溝墓だ」溝幅は1号よりも狭く浅い。規模も小さい。

11月8日(水)第2周溝墓の発掘を本格的に進める。1号のように石塊は入っておらず、規模も小さいので進捗してよいのだが、今度は溝内から、遺物が出土しはじめた。弥生後期の甕ではほぼ復元できる。住居址出土の土器と比較する楽しみが増してきた。

11月9日(木)第2周溝墓の西溝を掘り始める。まず上面を慎重に搔いてみた。溝は半分までは綺麗に出るのだがあとは判らない。ピットを穿てみると住居址(12住)の床面に当たってしまう。「住居址が周溝墓を埋めたてている！」事は重大である。また西方を拡張しなければならなくなった(第7図)。

11月10日(金)雨。一応幕舎まで行ってはみたが、作業員は集合していない。宿舎に帰って9号住出土の土器復元をはじめた。午後、伊那教育事務所長と総務課長が慰問に来られる。

11月11日(土)第2周溝墓の西溝が盛り土の下にくることとなり、1日中除土作業である。「愚公、山を動かす」ではないが、一輪車15台をフル運転したら大山が15m西方へ移った。

11月13日(月)12号住の南に接してもう一つ堅穴があらわれた(13号住)。この方はぎりぎりのところで溝の西方に作られている。まず、この方から掘ることにした。覆土の中から縄文中期土器片が相当に出る。掘り進んで行ったら、その西に縄文中期堅穴の床面が顔をみせた。これが15号住となる(第8図)。

夜、10時過ぎ、思いたって遺跡へ出かけてみた。案外と暖かい。月明の下に周溝墓の溝が黒々と横たわっている。これを踏み越えて内へ入るには何かためらうものがあった。

11月14日(火)いよいよ、問題の12号住を掘る。住居址を切つての周溝墓なら意味が判るが、その逆となると大変だ。しかも12号住は弥生後期のものだから、周溝墓は弥生後期を下らない事になってしまう。だが、床面を清掃したところ、この危惧は氷解した。ここでは溝は住居址の床面を毀すほど深くはなかった。また、壁には周溝できられた痕跡が明瞭に残っていた。第2周溝墓は12号住よりも新しい。

夜、周溝墓溝内の土量を計算した。第1周溝墓では55.65 m^3 、第2周溝墓は19.14 m^3 、これを内に盛りあげると第1号は36cm第2号は32cmの高さとなる。また、この上に表土を考えれば、50cmを越す高さとなり、盛り方を土鏡頭形にすると優に1mは越えてしまう。おそらくマウンドはあったのだろう。さすればマウンドを持つ周溝墓を毀し、埋めたてて住居址をつくることは、実際問題として不可である。

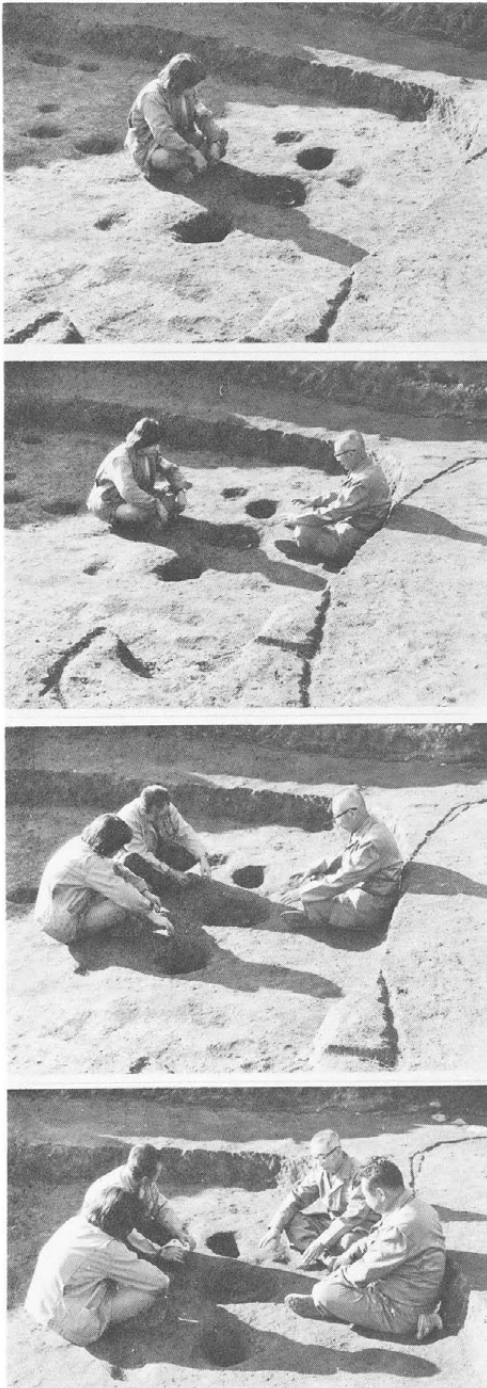
11月15日(水)朝より雨。だが天幕の中には作業員が待機している。天幕内で土器洗い。調査員は拓本取りと実測を行なう。プロバンコンロに薬罐をかけて暖をとったが、結構に暖かい。

本日は中央道遺跡調査会の理事会があり、桐原主任は、午前10時より伊那図書館へ出かけて行く。

11月16日(木)北からの寒風が強い。15号住のほぼ中心とおぼしいところに直立埋襲らしいものがあら



第7図 12号住の測量



第8図 13号住の炉址
 (その回りに座れるのは3人まで、4人になると苦しい)

われる。縄文中期中葉で、いわゆる埋甕の範疇に入らない代物なので、敬遠し後でゆっくりと調べようと考え。そこへ中央道遺跡調査団の下伊那班の猛者連が見学に着、遂にかくしておいたこの埋甕を見つけてしまう。掘り出してみると、これが立派な中期中葉の深鉢、完形だが底が抜けている。

11月17日(金)第1周溝墓内にある住居址のうち、弥生の16号住の発掘にかかる。この住居址は隣りの9号住と同様炭化物、焼土が多く、火災による廃滅であることは明瞭である。一体、どちらが火元なのだろう。「数軒を焼いているのだから村八分にされたのだろう」などの話が出る。

火災による廃滅だけに遺物は多い。土器では1セットが復元できそう。骨片もしきりが出る。屋根材などの炭化物も忽論多い。

11月18日(土)住居址と周溝墓の発掘はほぼ一段落した。16号住もほぼ完掘。全景写真撮影のため清掃を始める。ところが第2周溝墓西溝の側壁に縄文の埋甕が出てきた。縄文地文の上に、肩部のところだけ沈線で曲線文が描かれている。手頃な土器だが土質は悪く、復元には相当時間がかかろう。

11月20日(月)衆議院議員選挙告示の日。「最初に遺跡へ来た候補者の演説は皆で聴こう」と待ったが、10時になっても正午になっても遂に一日待ったが来なかった。

午後になり16号住床面で検出した炭化物を水洗いしてみた。みな炭化米。今月の25・26日に開かれる日本考古学協会の会場が、早稲田大学なので直良信夫博士の御教示をいただこうと考える。

11月21日(火)午前中雨。作業員一同雨ガッパを着用で参集するが、遺跡には入れない。土器洗いをしながら雨の止むのを待つ。午後雨が上がり第1周溝墓内にある住居址の清掃と、配石址の発掘を行なう。

11月22日(水)配石址の発掘に全員かゝる。石の上にならずくまの作業だからひどく冷える。座布団を



第9図 配石第6号址（仰臥屈葬だとちょうどよい大きさだ）

精製土器、いささか昂奮をおぼえる。

午後、発掘も終了に近ずき、作業員の方々と慰労の宴を持つ。

11月24日（金）朝方まで雨。清掃しておいた遺跡は雨をふくんでしつとりとしている。約2時間、写真撮映、つづいて一昨日埋葬が発見された、16号配石址を発掘。この間、併行して器材の整備を進める。この数日、ヘルメットに安全靴の風態の人々の動きが活発になって来た。電柱のつけかえ工事、天竜川架橋のための取り付け道路測量の人たち。

午後、全体測量開始。南からの伊那風に吹かれて、メジャーが大きいたわむ。後は調査員だけで仕事ができる。約40日間御苦労をいただいた作業員の方々に厚く謝意を表し、解散していただく。燃え残った焚火の上に土がかかった。

用意して座り込んでいるおばさんが数人はいる。どの配石址からも骨片が出る。掘り終えた配石址の中に若い調査員を入れて胸と腹の上に大石をのせる。仰臥屈葬だと丁度よい（第9図）。第1号住北方の配石址からは径40cmほどの大形埋葬のリングがあらわれた。逆位で胎土は良い。掘り出してみると口縁に4条の沈線を走らせた大洞C₁式的な半

II 環 境

昭和47年度調査の上伊那郡辰野町その1地区3遺跡は、旧朝日村にある。明治8年の町村合併で赤羽・沢底・平出・樋口4ヶ村の頭文字を合せての命名からわかる様に、天竜川以東地区（竜東地区）であって、辰野町を南から見ると、真正面の辰野駅北側に大城山山塊が聳え、その左右に深い谷合をのぞかせている。左方には小野及び善知鳥峠を越えて、松本平へ通ずる国道153号線が横川川に沿って通じ、天竜川の流れてくる右方には、国鉄中央東線があって、諏訪盆地の岡谷・諏訪とを結んでいる。

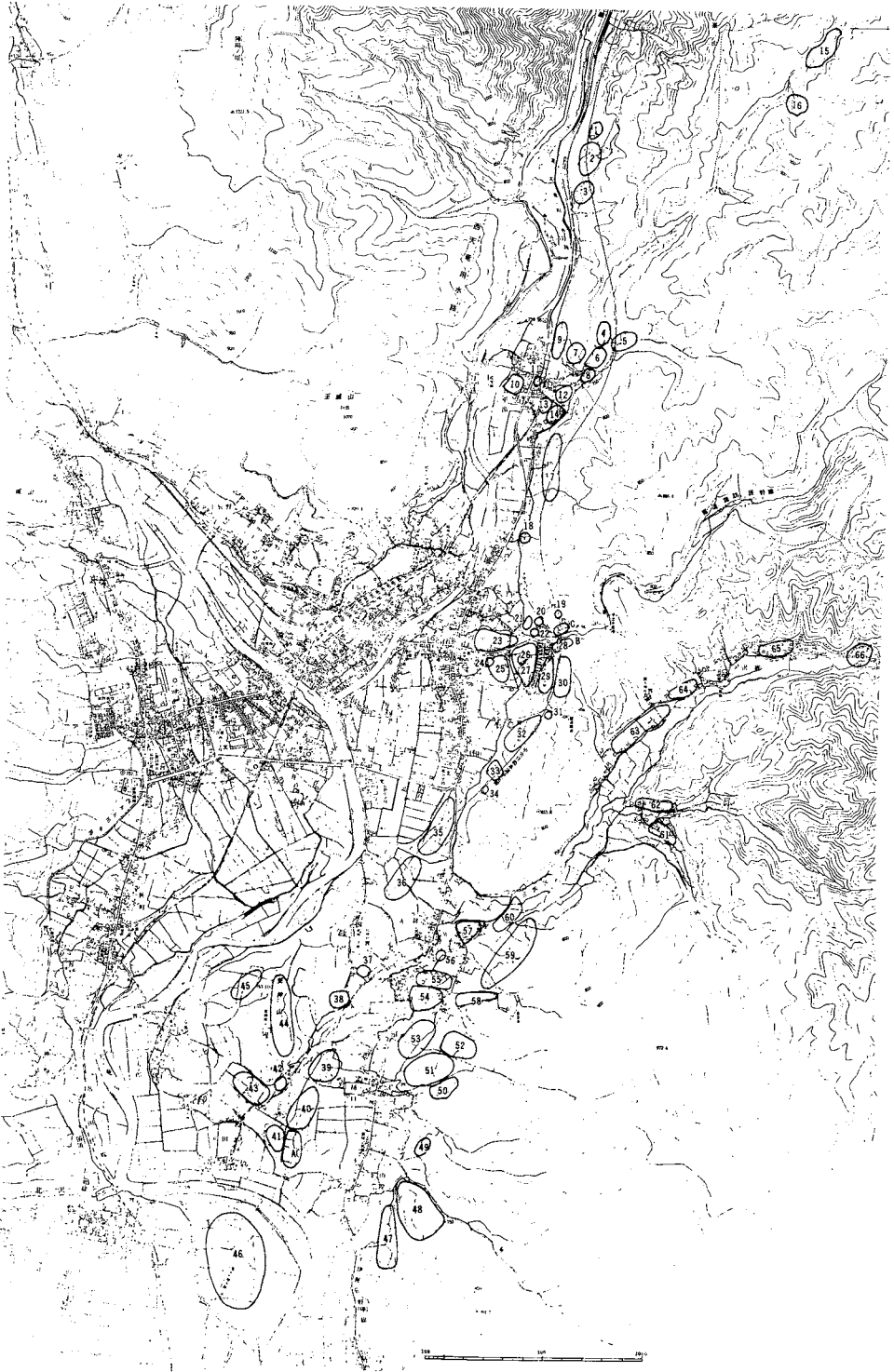
即ち辰野町竜東地区は、この右方の谷の東縁で諏訪盆地との境界をなす伊那山脈（守屋山、1650.3m）を東縁とし、荒神山の西側へまわり、同丘陵が終わってから再び水路を東方山麓下へ戻して南流して行く天竜川を西縁とする地域で、伊那谷北口として諏訪及び松本との接点である位置に加えて東縁麓は緩やかな山谷で上野川、野底川などの沢水によって開析され古い村落地帯があるなど、政治・経済・交通上重要な地域と目されて来た。古代にあって、古東山道の通過地帯であり、信濃16牧の1つ平井手牧がここに擬せられ、木曾義仲四天王の1人樋口兼光が居住地との伝承を生じさせた事等がそれである。

遺跡に限っていうならば、「上伊那の考古学調査」では37ヶ処、昭和30年の長野県遺跡地名表では41遺跡、古墳2基、そして現在、三村兼清氏の調査によれば中世、近世時までの遺構を含めて70近い遺跡が知られている。（第10図、第2表）

今回調査をした山の神と越道遺跡は、平出地籍にある。発掘結果では、山の神より縄文早期から中期にかけての土器片と、時期が下って四耳壺と思われる陶片が検出されたが、この地は、有賀峠によって諏訪と結ばれる交通の要地であって、古代東山道が走り、また諏訪神社大御立産神事における神使巡行の路筋でもあった。詳細については後章で触れるため省略するが、考古学的に見た場合、数少ない竜東地区の古墳がこの地籍にのみ築かれていることなど注意すべきである。

樋口地区について、荒神山は、中世末期天文13年武田信玄と藤沢頼親との攻防地点である荒神山城が築かれて著名であるが、この他に荒神山丘陵と伊那山脈の小式部城山（1120.3m）、東山（972.6m）との間にある2つの段丘もまた重要である。このうち上位段丘には、樋口内城館の地名があり、木曾義仲四天王の1人樋口兼光にかかわる伝承が今に生きている。「蕨原拾葉」には「樋口家譜」が収録され「二郎兼光領上伊那之内樋口邸、依之以樋口為家号」とある。その拠ところは不明であるが、朝日村史（昭和43年）によると、「現在、樋口には『狐城』の遺跡があり、また血の坂の上の国道西沿いには内城の遺跡も残っている」として江戸末期にこの地を訪れた、高遠藩葛上源五兵衛の「木の下蔭」を掲載している。

「上伊那樋口村は往昔木曾義仲の臣、樋口次郎兼光の在所にて世々子孫此里に住みけるとぞ、（中略）本村道の西を七間屋敷という是古しへ家中屋敷なるよし、六七十年已前まで門の石礎等もありたる由云伝ふ。今に於て稀には矢の根或は焼物類を掘出すとぞ。天より左右に坂あり、右を矢の坂といい左を血の坂といふ。この坂を登りて屋敷跡あり、広さ三・四丁ありて四方堀なり、又少し東の方西寄りて堀あり是も広さ三・四丁、両方ばかり塹なり、今この地を内城といふ。今碑三つあり、二つは五輪塔にして高さ二尺



第10図 辰野町竜東地区遺跡分布図

四方に梵字一字ずつあり、一本は四方塔にて高さ三尺ばかり前の方樋口筑前守末葉とあり下に、三字ばかりありといえども苔むして見えず、裏にも二行に彫刻あれども一向にあからず」

この内城が上位段丘で、この南に接する下位段丘が五反田遺跡なのである。

第 2 表 辰野町竜東地区遺跡一覧表

図番号	遺跡名	所在地						図番号	遺跡名	所在地					
			先土	縄文	弥生	古墳	土師				先土	縄文	弥生	古墳	土師
A	樋口五反田	樋口		○	○			33	大 棚	平 出					○
B	越 道	平 出		○				34	公 家 塚	〃					○
C	平出山の神	〃		○		○		35	半 平 蔵	〃					
1	平沢(建久保)	上平出		○			○	36	神 送	赤 羽					
2	由 良 久 保	〃		○				37	赤 羽 窯 址	〃					○
3	上 の 原	〃		○				38	大 久 保 尻	〃					○
4	沢 入 口	〃		○			○	39	樋 口 内 城	樋 口		○			○
5	丸 節	〃		○			○	40	矢 沢	〃					○
6	山 の 神	〃		○			○	41	五反口樋前之城	〃		○			
7	一 の 平	〃		○				42	荒 神 社	〃		○			
8	藤 の 森	〃		○			○	43	荒神山おんまわし	下 田		○			
9	北 垣 外	〃		○				44	荒 神 山	赤 羽		○			
10	松 尾 峽	〃		○				45	荒 神 山 西 側	〃		○			○
11	桜垣外(農協支所前)	〃		○	○			46	若 宮	伊那富		○			○
12	小城(小条)	〃		○				47	ネ ズ ミ 田	樋 口		○			
13	大 河 原	〃		○				48	狐 ケ 城 址	〃		○			○
14	井 出 の 清 水	〃		○			○	49	樋 口 上 の 原	〃		○			
15	駒 沢 開 拓 地	〃		○				50	宮 ノ 窪	〃		○			
16	江 ノ 沢	〃		○				51	姫 御 前 口	〃		○			○
17	堂ヶ入・仏石	上平出		○				52	富 士 浅 間	〃		○			○
18	天 竜 界	〃		○			○	53	矢 沢 原	〃		○			○
19	山 の 神 上	平 出		○				54	板 橋 プドゥ園	赤 羽		○			○
20	原 田	〃		○				55	経 塚	〃		○			○
21	日 向	〃			○		○	56	南久保(赤羽焼窯址)	〃					○
22	丸 山	〃		○			○	57	源 平 治	〃		○			○
23	中 村 裏 C	〃		○				58	真 金 寺 入 口	〃		○			○
24	御 射 宮 司 古 墳	〃					○	59	上 の 原	〃		○			
25	中 村 裏 A	〃		○				60	池 の 久 保	〃		○			
26	御 陵 ヶ 塚 古 墳	〃					○	61	河 子 沢 入 口	沢 底		○			○
27	中 村 裏 B	〃		○				62	山 寺	〃		○			○
28	越 道 塚	〃					○	63	神 主 谷	〃		○			
29	越 道 団 地	〃					○	64	和 合	〃		○			○
30	横 山 城 址	〃					○	65	日 向	〃		○			○
31	見 宗 寺 裏	〃		○				66	若 宮	〃		○			○
32	宮 の 上 田	〃		○			○								

(三村兼清氏作成)

III 樋口五反田遺跡

1 地 形

本遺跡は旧朝日村樋口にあり、南方 200 m には天竜川が蛇行しつゝ南流している。その氾濫原は水田地帯となっており、俗称腰巻の地名を残している。五反田遺跡はその氾濫原に臨んだ岬状の台地で、氾濫原との比高差 10 m を算える。その岬の西端下には下田の部落が横たわり、東端には遠く樋口内城から流れ来ている「渋の沢」が深く開析谷を作っている。遺跡の現状は水田でその地名はすでに江戸時代の検地帳に記されている(第11図)。

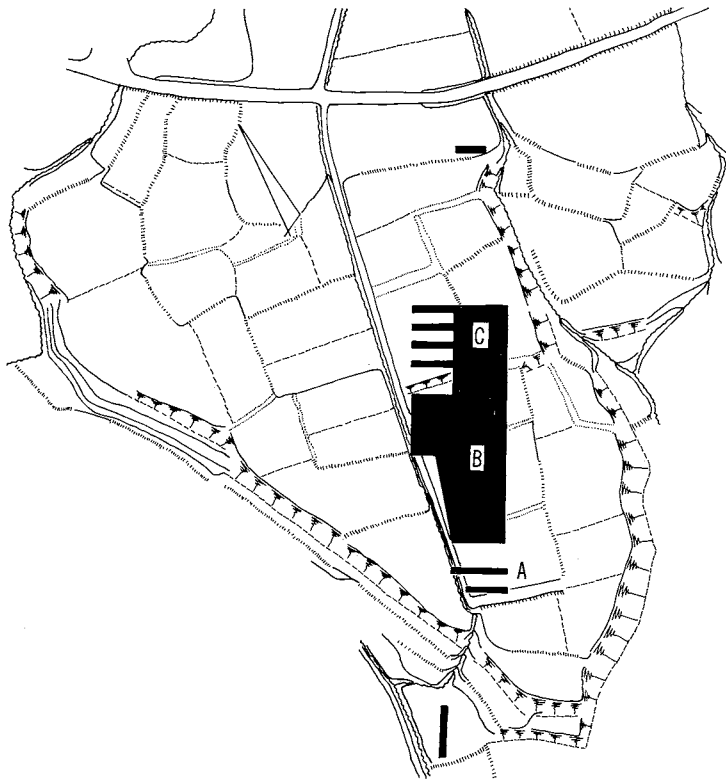
この地に対する伝承は、樋口次郎兼光にかかわるもので、遺跡の北方にある内城館と関係のある遺構が存在したといわれ、また樋口光平の帰依した真金寺の址とも言われている。すなわち、伝承は館とか寺など、特別な建物でかつてそこに、集落の営なまれたことを示す記録はみられていない。

この地域の気象について、秋から冬にかけ風は南から強く吹き、これを「伊那風」(駒ヶ岳おろし)と呼ぶが、これを真正面に受けるのが五反田の水田であった。「唐箕の口」とよばれ稲が一番早く倒伏する所であった。またこの地域の水便は、渋を含み飲料には不適でその証拠として水道がいちはやく引かれたのは、旧朝日村内の樋口であった。かような訳で五反田地籍に古代集落址の存在は考えられていなかった。しかしながら、水田造営時に遺物の出土がみられ、鳥居龍蔵博士の「先史時代の上伊那」には、土器の出土が記され、昭和30年の「信濃史料」にも同様の記載がある。さらに昭和43年の「旧朝日村遺物採集記」(三村兼清氏)によれば、「全部水田に造成され、一部西の土手が果樹園、畑になっている。ここは兼光が移封される時、土地の人に分け与えた土地だと伝えられている。樋口の公民館の南にあたる板橋川の作った舌状の残丘台地で、ここから兼光の館址が300 m 北に高く見え、南を見れば羽場の手長神社址が一直線の位置に見える。昭和37年頃ここを水田に造成した時、溝口近雄さん管理の字村前 740 地籍には、鉄平石が多く敷き詰めてあったという。その時の様子では寺社址ではないかと居合わせた人達がいったと伝えられる。標高 720 m、ロームの深さ 50 cm である。またこの造成の時、縄文中期の土器多数が、字村横 740 の溝口近雄さん、同 699、同 730・同 731 番地の大森長治さんの水田・同字 728 番地の大森玉一さんの水田に出土し、同じ時代の石組の炉に使用された石が土手を造成する時に利用されあまったのは、用水を溜めて田に水を引くために利用されている現状である」とあって大河川の流域にしばしばみられる縄文中期末から後期にかけての敷石住居址の存在が予想された。

中央道はこの台地を南から北へ開掘して行く。発掘も同様に幅 40 m の範囲で進んで行った。台地端より 10 m に 2 本のトレンチを入れここを A 区とし、続いて北方 100 m 間を全面発掘しここを B 区とした。さらに北方 60 m については、中心杭より東方を全面発掘、西方には 4 本の平行するトレンチを入れここを C 区とした。発掘前の水田の姿は、南に向って段を成し C 区標高 709 m・B 区標高 709 m・A 区標高 708 m である(12図)。



第11図 樋口五反田遺跡地形図 (1 : 2500)

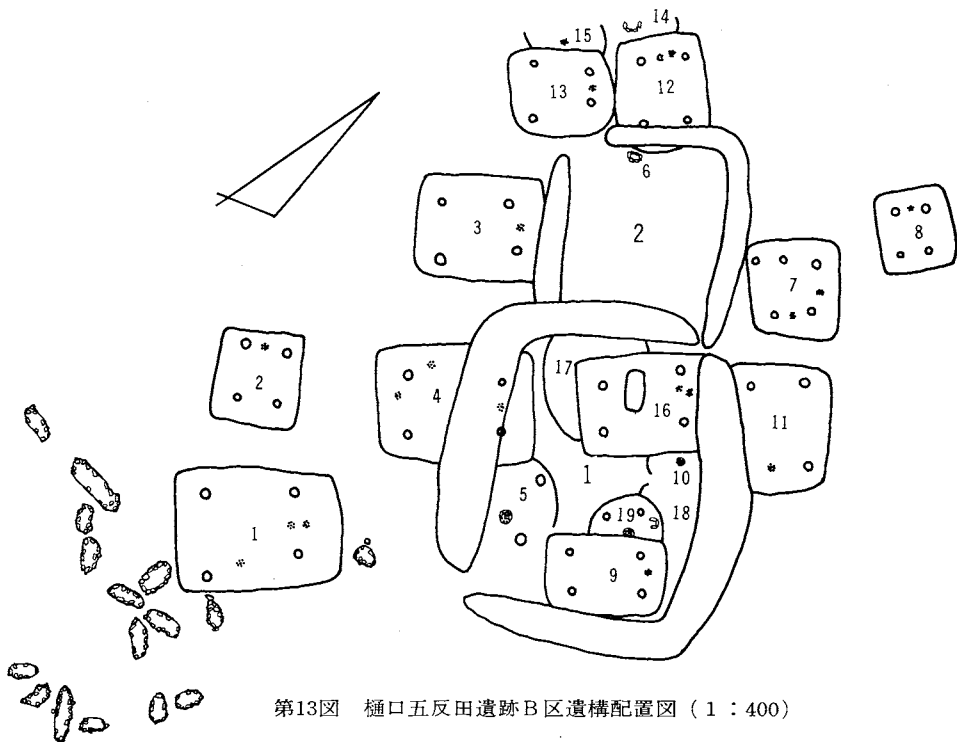


層序について、地表下25~30cmまで耕土、そして約10cmが床土（酸化鉄を含む沈澱層）、以下が遺物包含層である。

2 遺構・遺物

遺構はA区にはみられず、C区も同様であった。縄文中期、晩期の遺物は相当量検出され、一部には柱穴状のピットも見られたが、住居址等の遺構確認には至らなかった。おそらく水田造成時に破壊されたものと思われる。ただB区においては、縄文晩期の配石址と縄文中期の包含層を掘り抜いての、弥生後期集落址、さらに同上に築かれた方形同溝墓が

第12図 樋口五反田遺跡発掘区域（1：5000）



第13図 樋口五反田遺跡B区遺構配置図（1：400）

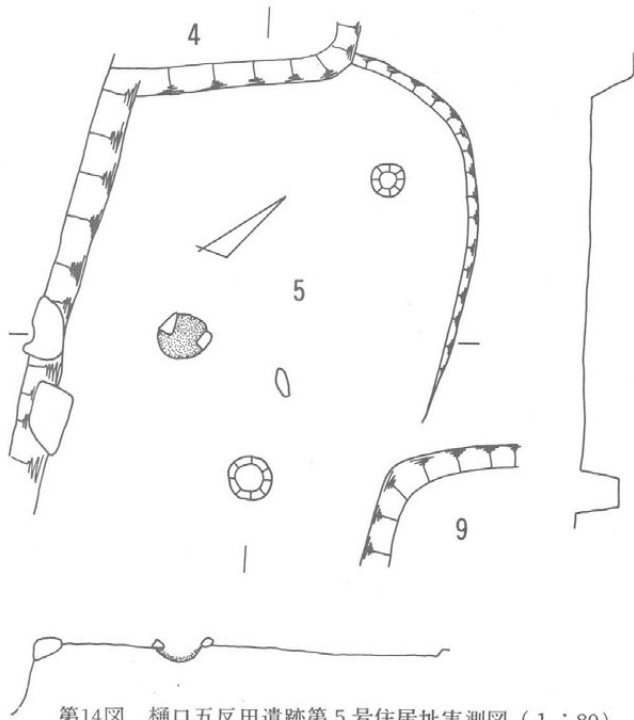
存在した。その数は縄文中期住居址8・
縄文晩期配石址16・弥生後期住居址11
・方形周溝墓2基である（第13図）。

以下縄文中期住居址より記述してい
く。

1) 縄文中期住居址

(1) 第5号住居址（第14図）

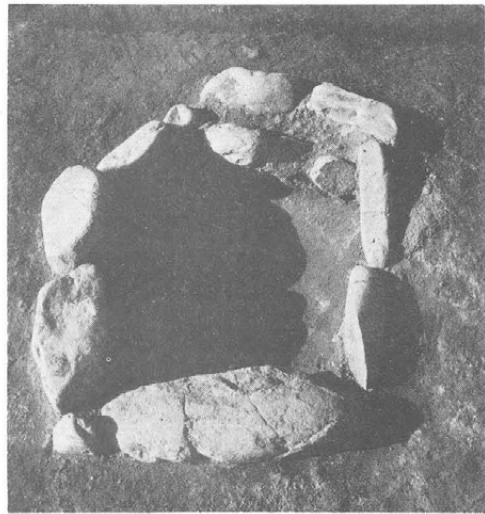
1号周溝墓の溝内テラスに発見され
た住居址で西端を4号址、南端を1号
周溝墓南溝、東辺を9号住に切られて
いる。壁は北辺部だけがわずかに残り、
黄色粘土層を10cm切り込んでいるが、
プランが復元できるほどの規模ではな
い。床面は軟弱で検出には困難を極め
た。焼土・張床などの痕跡はない。柱
穴は2個発見されたが、上部構造を復
元する資料にはなり得ない。炉は、北東壁より3.5m
の所に発見された。径50cmの地床炉で小さな礫が2個
残っている。深さは15cmで、5cmにわたり焼土が堆積
していた。出土遺物は炉の北側に接して縄文中期前半
の土器がつぶれていた。



第14図 樋口五反田遺跡第5号住居址実測図（1：80）

(2) 第6号住居址（第15図）

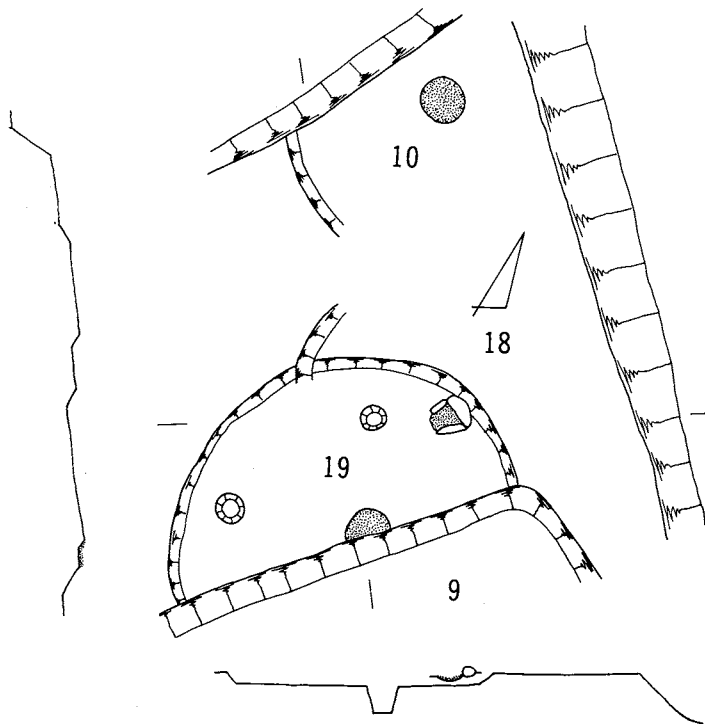
2号周溝西溝内側に接して発見された住居址で、プ
ラン・規模については不明である。黄色粘土層上に床
は構築されているが、何ら敲打された痕跡はない。柱
穴、壁はわからず炉址だけが残存していた。炉址は、
径15cm程の小礫（河原石）10数個を用いた石組炉で、
規模内径30×35cm、深さ9cmで焼土は僅かにあり炭も
あった。遺物には、完形品はなく土器破片だけであった。



第15図 樋口五反田遺跡第6号住居址炉址

(3) 第10号住居址（第16図）

1号周溝墓内にあり、西方を16号住、北方を周溝墓北溝に切られ、東方は18号住と重複し合っている。
壁は南方1.2mにわたって見られ、そのカーブから円形のプランであることが想定されるが、規模について



第16図 樋口五反田遺跡第10・18・19号住居址実測図(1:80)

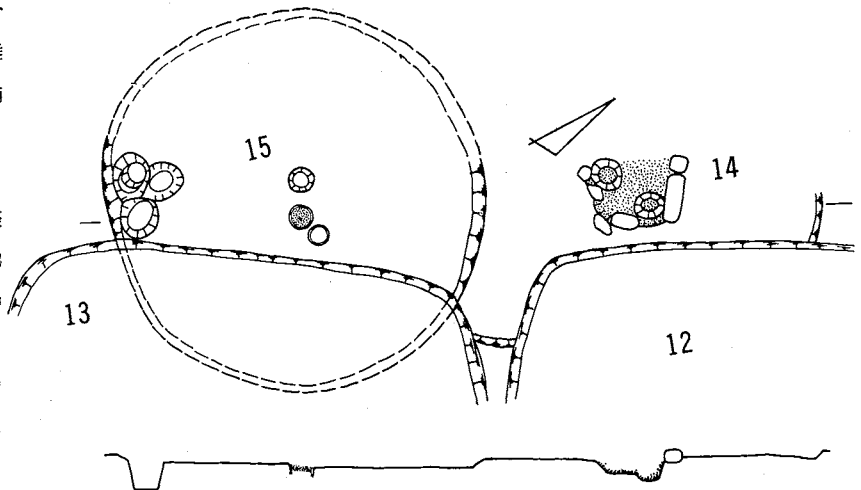
は不明である。同所における壁高は15cmである。床面は軟弱で炉址以外の遺構はみられなかった。炉址は、径50cmの円形の地床炉で、深さは7~8cmで焼土は中に充満していた。ただし、同内からの有機物の検出はなかった。遺物は炉址脇より縄文中期前半の完形品の出土をみた。

(4) 第14号住居址(第17図)

12号住の西方にある竪穴で、東辺は12号住に切られ床面の一部と炉址のみが検出されている。壁は、東辺及び北辺各50cmが検出されていて、その高さは10cmである。炉址は、1辺70cmの方形石組炉であるが、石塊数個が抜かれ現状のまゝではない。深さは15cmで内部に2個のピットがみられた。焼土はあまり見られなかつたが、焼けた骨片数片を見いだした。なお炉址の位置は、推定東壁より1.3mの位置にある。

(5) 第15号住居址(第17図)

14号住の南方にある。14号住の床面が軟弱で確認困難ではあったが、炉址との関係からみて同住を切り込んでの造営と考えられる。もっとも、東半分は13号住に切られてしまっているが、残存している北壁、南壁のカーブにより径4m内外の円形プランと推定される。壁高は7~9cmを計る。床面は一部敲打されて良好であるが大部分は軟弱で、検出は困難であった。床面上の施設として、南壁に接して3個の柱穴がかたまっている。径はいずれも40cmで深30cmである。住居址の中央に近く埋嚢炉がみられた。深さ10cm程度で焼土と炭がわずかにみられた。炉址の西辺に

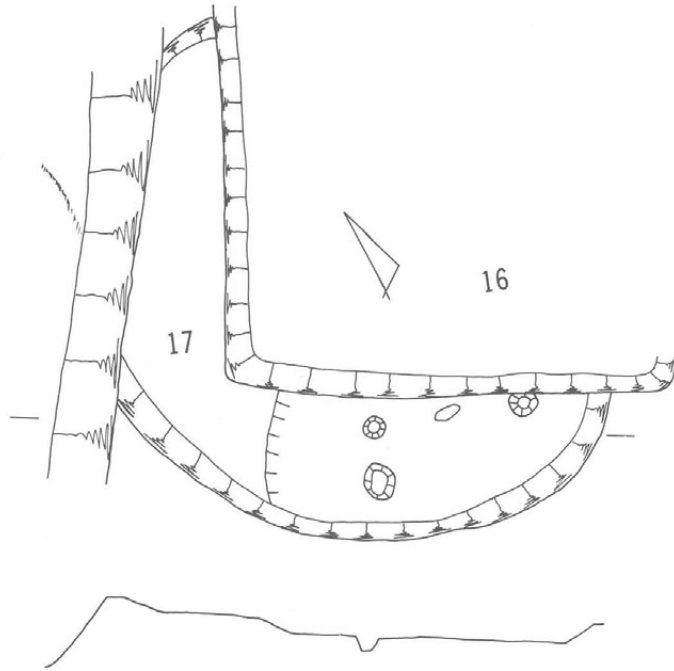


第17図 樋口五反田遺跡第14・15号住居址実測図(1:80)

接して柱穴1個、更に接しては埋
 葬1点があった。埋葬は、波状口
 縁を持つ深鉢形土器で直立の状態
 に埋められ、底部は欠失していた。
 内部からは何も検出されなかった。
 遺物は土器だけで床より10cm上か
 ら多く出土している。

(6) 第17号住居址 (第18図)

1号周溝墓北方と16号住によっ
 て大部分が破壊されている住居址
 で、残存している壁高は25cmで、
 若干傾斜している。床面は軟弱で
 南壁よりに3個ピットが検出され
 ている。



第18図 樋口五反田遺跡第17号住居址実測図(1:80)

(7) 第18号住居址 (第16図)

西部においては10号住と、南辺
 においては、19号住と重複し合っており、さらに9号住によって切られた住居址である。19号住との関係
 については、18号住の炉址は19号住床面より、10cm浮いた状態で営まれていた。炉は3個の石塊を「コ」
 字形に配した小規模なもので内径は20×30cm、深さ10cmである。

(8) 第19号住居址 (第16図)

東半分を9号住に切られた円形プランの竪穴で、直径3.8mを計る。壁高15cmで床は水平軟弱である。
 竪穴の中央には径50cmの円形地床炉が作られていた。よく焼け、木炭塊の出土が見られたが、土器片等の
 遺物の出土はみられなかった。

(9) 単独出土土器 (第19図・27図)

2号周溝墓北西隅内側に径1mほどのピットがあり、その中に深
 鉢形土器が倒立していた(202)。底部には穿孔がみられた。ピット
 内からはこの土器の他に遺物は検出されず、又倒立土器の中からも
 ならぬ遺物の検出はなかった。深鉢形土器は口縁部を欠いてはい
 るが、残存部径21.5cm、高さ29cmを計り、一面に粗い縄文が施され
 上胴部には1条の太形沈線による曲線がめぐっている。



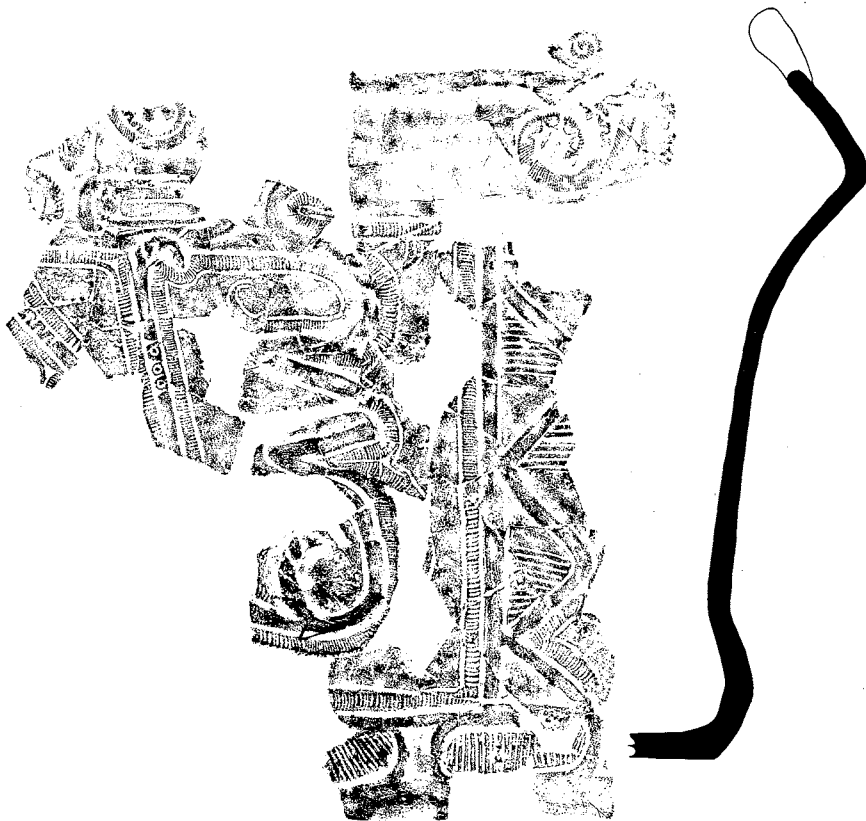
第19図 樋口五反田遺跡単独出土縄文土器

2) 出土遺物

B区発見の9住居址及びC区の包含層より出土した縄文時代遺物は、土器、石器及び1点の土偶である。以下土器より9住居址別にその概略を記していきたい。(第20～29図)

(1) 第5号住居址出土遺物(第20・21図)

復元可能な大形深鉢土器(1)、と破片20数点(2～24)で1は器高60cmを計る大形なもので「く」の字に張る屈折底部が特長である。キャリパー形の口縁には、蛇を思わせる渦巻文が部分的に施され、同部は竹管工具による三角形状区面文でうずめられている。8もまた口縁の外彎したキャリパー形をとる大形甕で、口縁外側には粗い爪形文を施した渦巻把手が附せられている。9～19は1と同様の区面文を施した胴部破片だが、2・3・5～7は頸部下破片で縦走る沈線が主文様となっており、若干型式の湖上が考えられる。20～24はおそらく混入と思われるもので23・24は後期に位置するものである。



第20図 樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その1 1、5号住出土(1:6)

(2) 第6号住居址出土遺物(第21図)

25～36までの破片が土器の全てである。口縁部には半截竹管工具による格子目文を施したもの25・27、浮隆線文によって曲線文の描かれたもの28がある。胴部破片は、平行線文を縦走させた30を除いては隆帯文及び太形沈線によっての区面文が描かれていて、この住居址のおおよその時期が推察される。なお下胴部の破片である35は、その胎土から八ヶ岳山麓地方の土器を思わせる。

(3) 第10号住居址出土遺物(第22図)

37～55までで単一な様相を示している。いずれも半截竹管工具による横走及び縦走る文様で飾られていて、甕の口縁は多く「く」字状に屈折し、同部には波状文ないし格子目文などやや複雑な文様構成がと

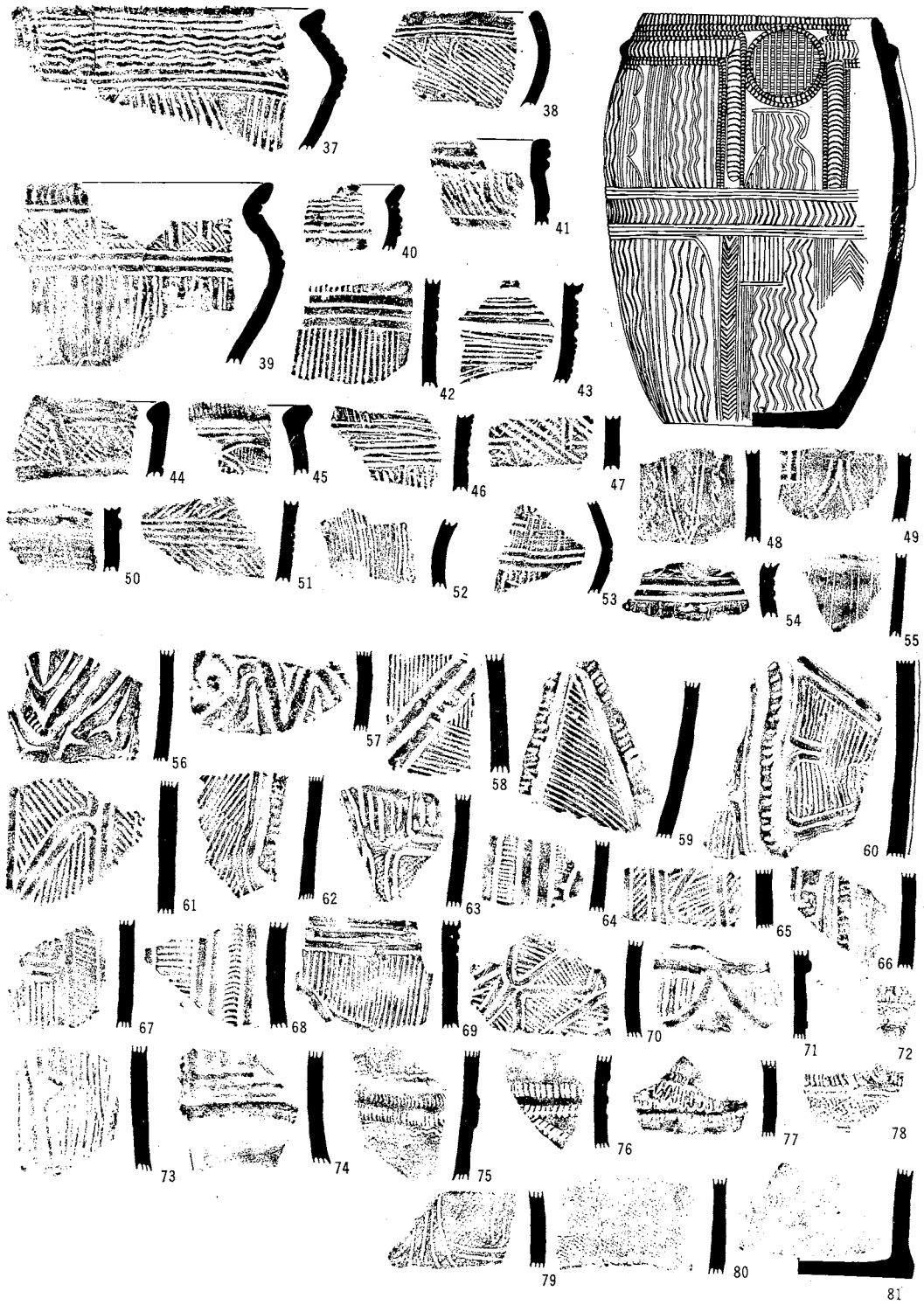


第21図 樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その2
 2~24 5号住・25~36 6号住出土(1:4)

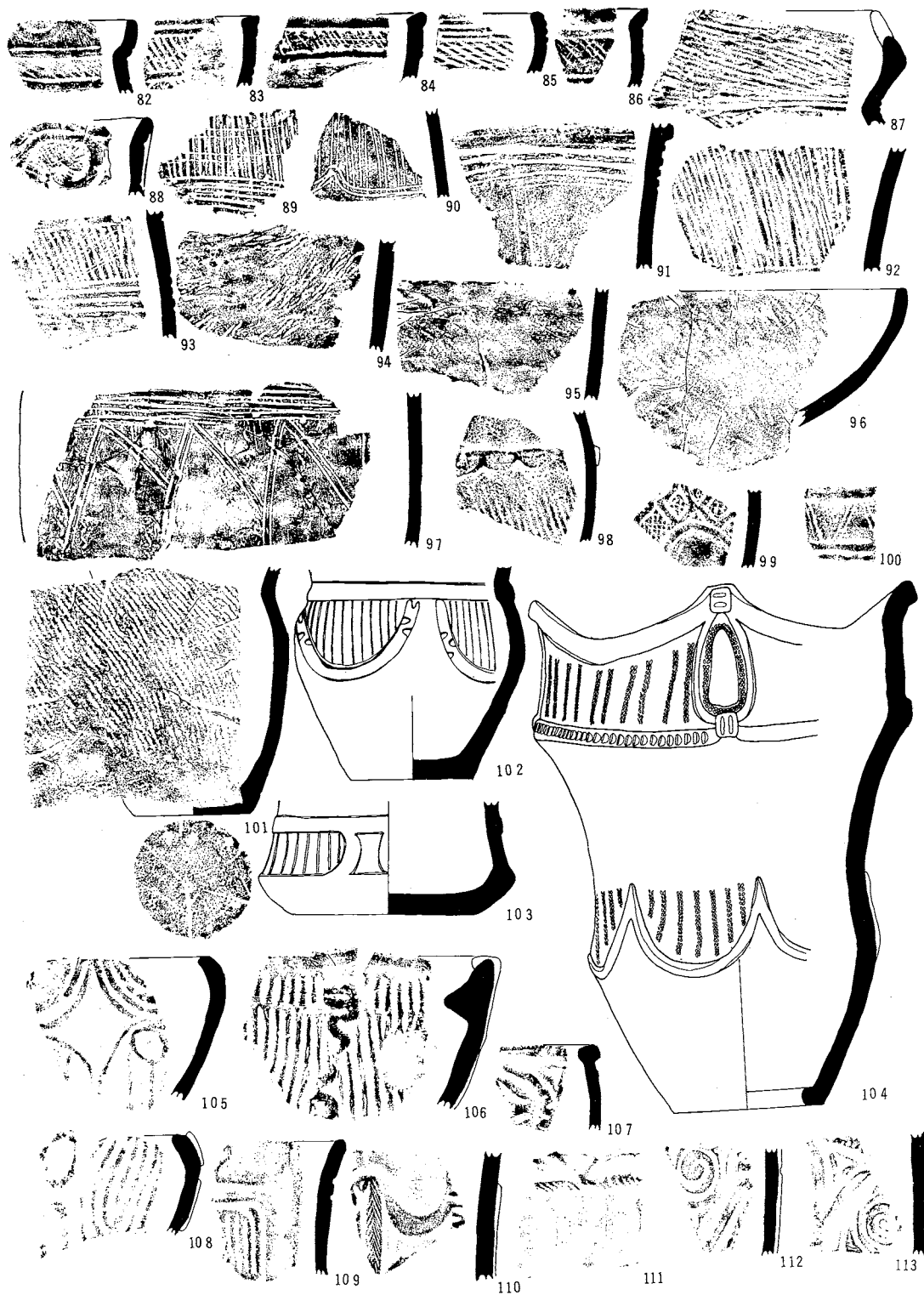
られている。この他に1点、口径14cm、高さ24.5cmの樽形壺をなす完形土器がある。同様に半截竹管工具を駆使しての複雑な文様構成がみられるが、特にも口縁近くにはられた径5cmの円盤は印象的である。

(4) 第14号住居址出土遺物(第22図)

51~81までの破片で、主体を占めるものは太形沈線による区面文である。この他に半截竹管工具による格子目文78や爪形文による三角形文様75~77、及び縄文地文の上に沈線文、絡条帯圧痕を縦走させたものがある。(79~81)



第22図 樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その3 37~55 10号住・56~81 14号住出土 (1:4)



第23図 樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その4 82~113 15号住出土(1:4)

(5) 第15号住居址出土遺物 (第23図)

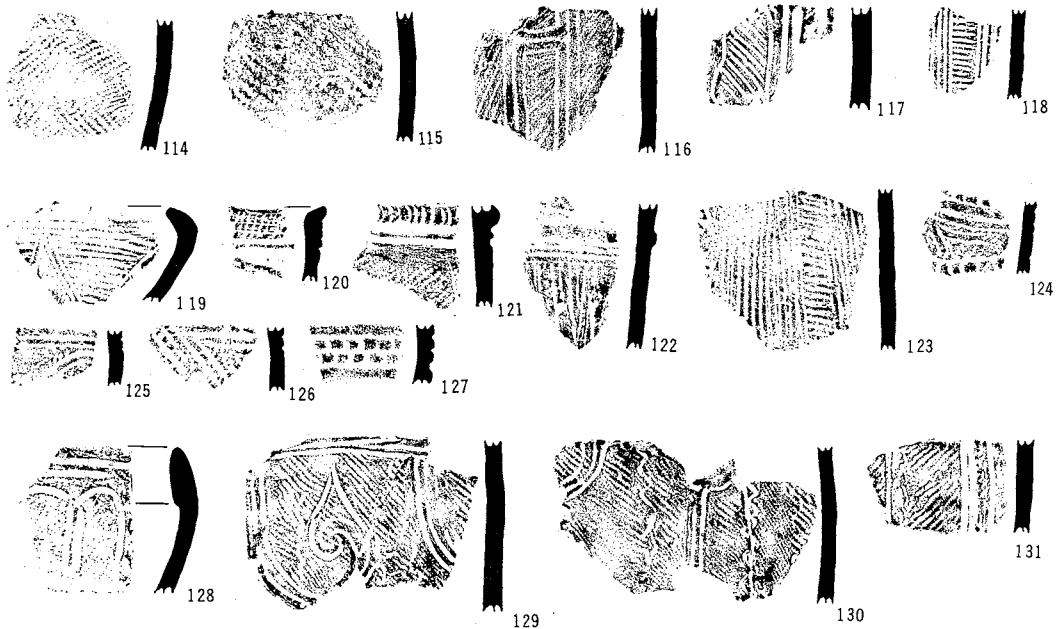
82～113までが本址の出土土器で大きく3類に分けられる。ひとつは半截竹管工具による文様が施されるもの82～93・97～100で、口縁部は外彎ぎみで同所に格子目状文様をめぐらしている。ただ87・92に限っては、平行線文を粗く斜めにかきおろしている。上胴部は間隔を置いた平行線を垂下させているが、97は剣様状の文様を横に連続させている。なお97は本址の埋甕炉として用いられたものである。95～96・101は縄文のみ施こしたもので、96は椀形となり101の底部には木葉痕が附されている。102～113は太形沈線及び浮隆線文で曲線文を描いており、器形は下胴部がふくらみ、あるいは屈折底部をもつキャリパー形の器形となる。102は下胴部に所謂楕形文をめぐらすもので、弧をなす隆帯には蛇様の意匠が加えられている。104の下胴部にも同様な文様が施されているが、その中を垂下する線は舌尖による沈線ではなく、撚糸様の圧痕線が用いられている。

(6) 第17号住居址出土遺物 (第24図)

出土した土器片は僅少である(114～118)。2片は縄文で、114のそれは羽状縄文をなしている。他の3片は縦走る区画文の小片である。

(7) 第18号住居址出土遺物 (第24図)

18号住の覆土から発見された土器は119～127までで、平行沈線による三角形文、格子目文119・120、爪形による三角形文126、爪形文と縄文とが並用されるもの121及び太形沈線による区面文123等がそれである。



第24図 樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その5

114～118 17号住・119～127 18号住・128～131 19号住出土(1:4)

(8) 第19号住居址出土遺物 (第25図)

末面から発見されたものは、縄文地文の上に沈線による懸垂文や剣葉文を描いた胴部破片など4片 128～131である。

(9) 弥生時代遺構覆土内出土土器 (第25・26図)

縄文土器片は、弥生後期の住居址及び方形周溝裏の溝内より多く検出されている。



第25図 樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その6

132～150 2号住・151 3号住・152～156 4号住・157～160 7号住・161～162 8号住
163～165 9号住・166～167 11号住・168 16号住各覆土内出土・169山茶碗(1:4)

132~150までは、2号住の南西隅壁外よりまとめて出土したもので、同所に縄文期住居址の存在が推察できた。土器は、ほぼ単一な型式をとるもので、沈線及び沈線による山形縦列文（八の字文）を地文とするものが大部分である。

151は、3号住覆土内出土にかかる所謂有孔罅付土器の縁部破片で、胎土、焼成は極めて良好である。

152~156は4号住覆土内出土土器である。爪形文を多く用いている。152・155を除いては沈線による斜行文の上に、渦巻文より発する弱い懸垂文が附されている。

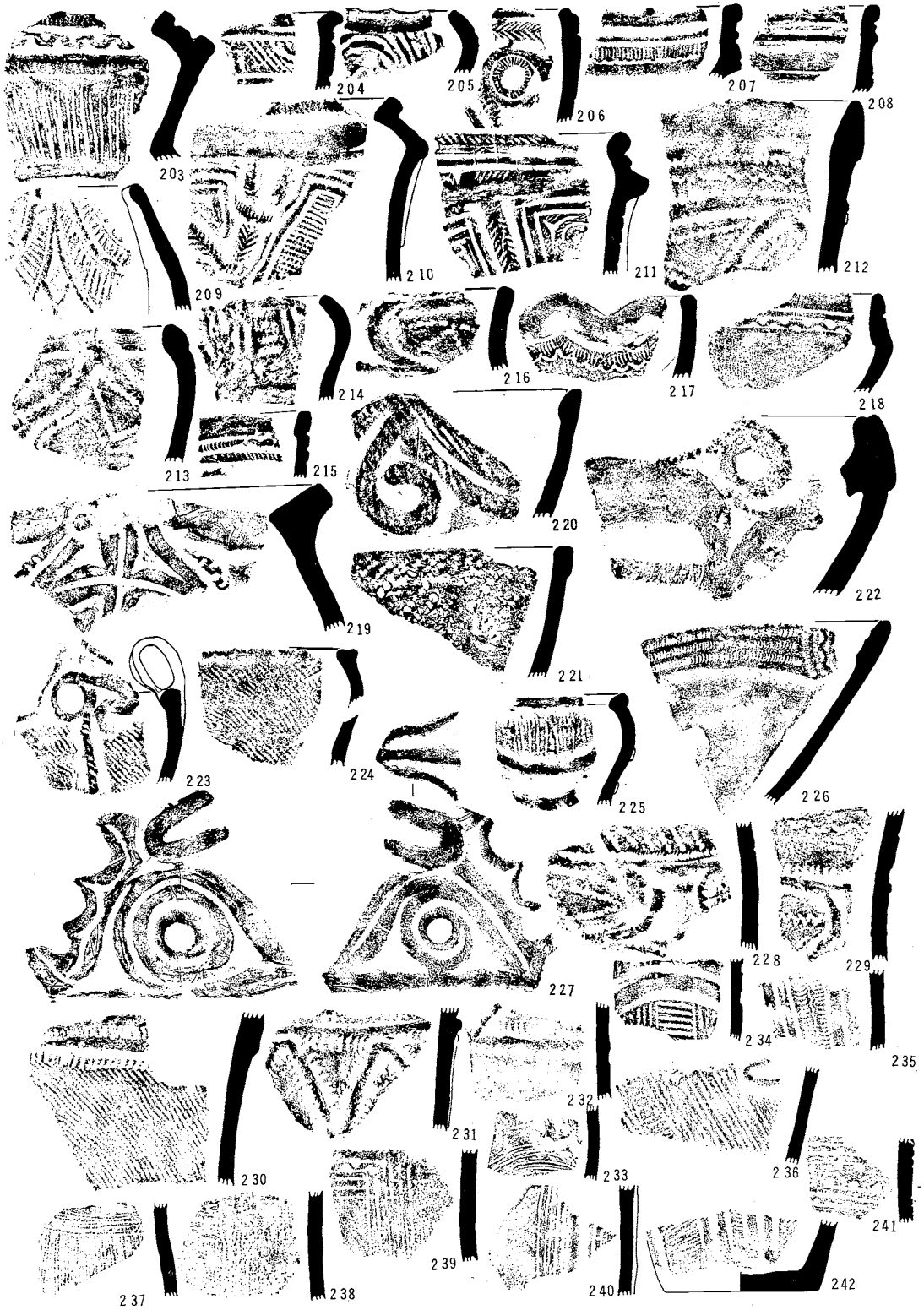
このように、2号住から4号住にかけては縄文中期土器片の出土が目立ったのに対し、7~9号住・11~16号住の覆土からは、縄文晩期の土器片の発見が注意を引く。

157~160までは7号住覆土の出土で、いずれも口縁部内外に数条の沈線をめぐらす半精製の甕ないし鉢である。このうち159は横走する口縁部沈線文帯下に縦走する刷目痕を留めている。

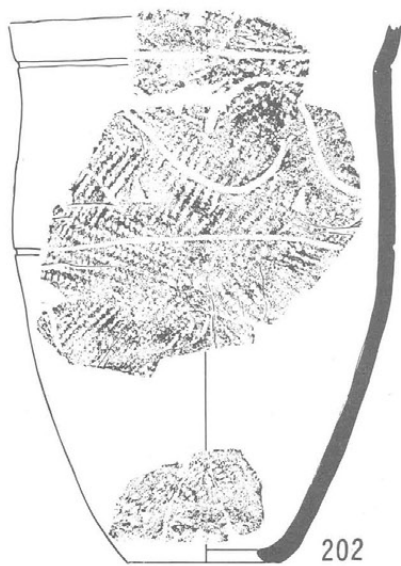
161~162は8号住覆土内出土、163~165は9号住覆土内出土土器片である。また168は16号住覆土内出



第26図 樋口五反田遺跡出土縄文土器そのその7 拓影
170~201 第1・第2周溝墓覆土内出土（1：4）



第28図 樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その9 203~242 C区出土(1:4)



左 第27図 樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その8
202、単独出土土器 (1 : 4)

右 第32図 樋口五反田遺跡出土土偶



第29図 樋口五反田遺跡出土縄文土器拓影その10
243~263 C区出土 (1 : 4)

土である。162・163は、指頭による凸凹文のある凸帯をめぐらした深鉢で、168は変形工字文様の文様帯をめぐらしている鉢である。

次に170～201までは1・2号周溝墓の溝内より出土したもので、この中には、5・6・10・17・18・19号址に属するものが混っていると思われる。縄文中期前半から中葉そして末葉にかけてのものが大部分だが、後晩期のもの197・198・200・201も若干検出されている。

(10) C区出土遺物 (第28・29図)

縄文中期住居址、晩期配石址、弥生後期住居址の発見されたB区以北のC区とした地域からは、綿密な調査にもかかわらず、住居址等の遺構の検出はなかった。ただ、水田床土下の黒褐色土層内よりは、縄文中期の土器片及びそれに伴っての少量の後期(254～261)、晩期(262～263)の土器片が出土している。その出土量も南部分において多く、北へ行くに従ってその量を減じている。

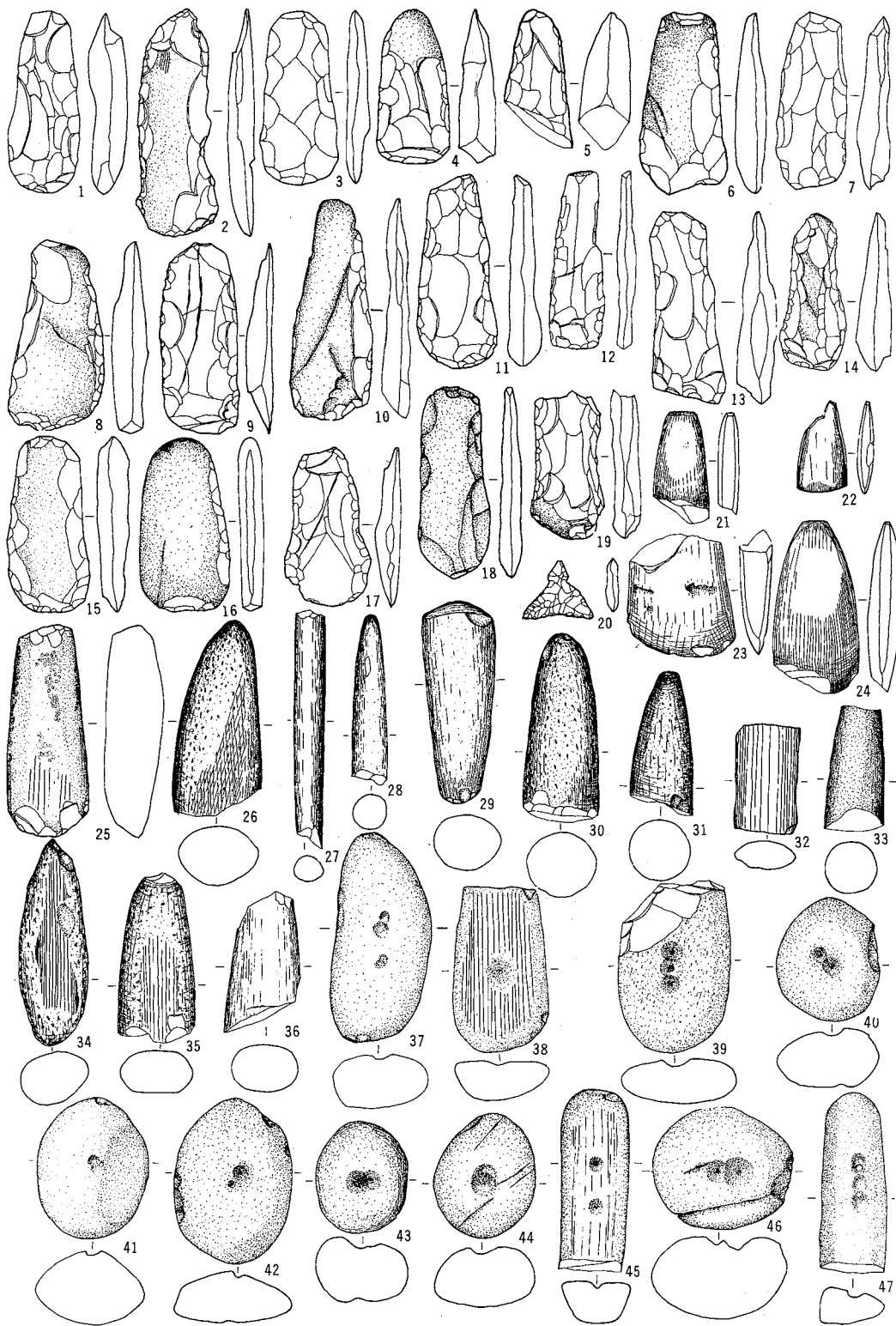
縄文中期土器片は、中期前半、中葉時が主体を占め、227の蛇の意匠ある把手は注意を引く。また渦巻文でスペースの全てをうめている253は、三角形柱状土製品の破片と思われる。

(11) 石 器 (第30・31図)

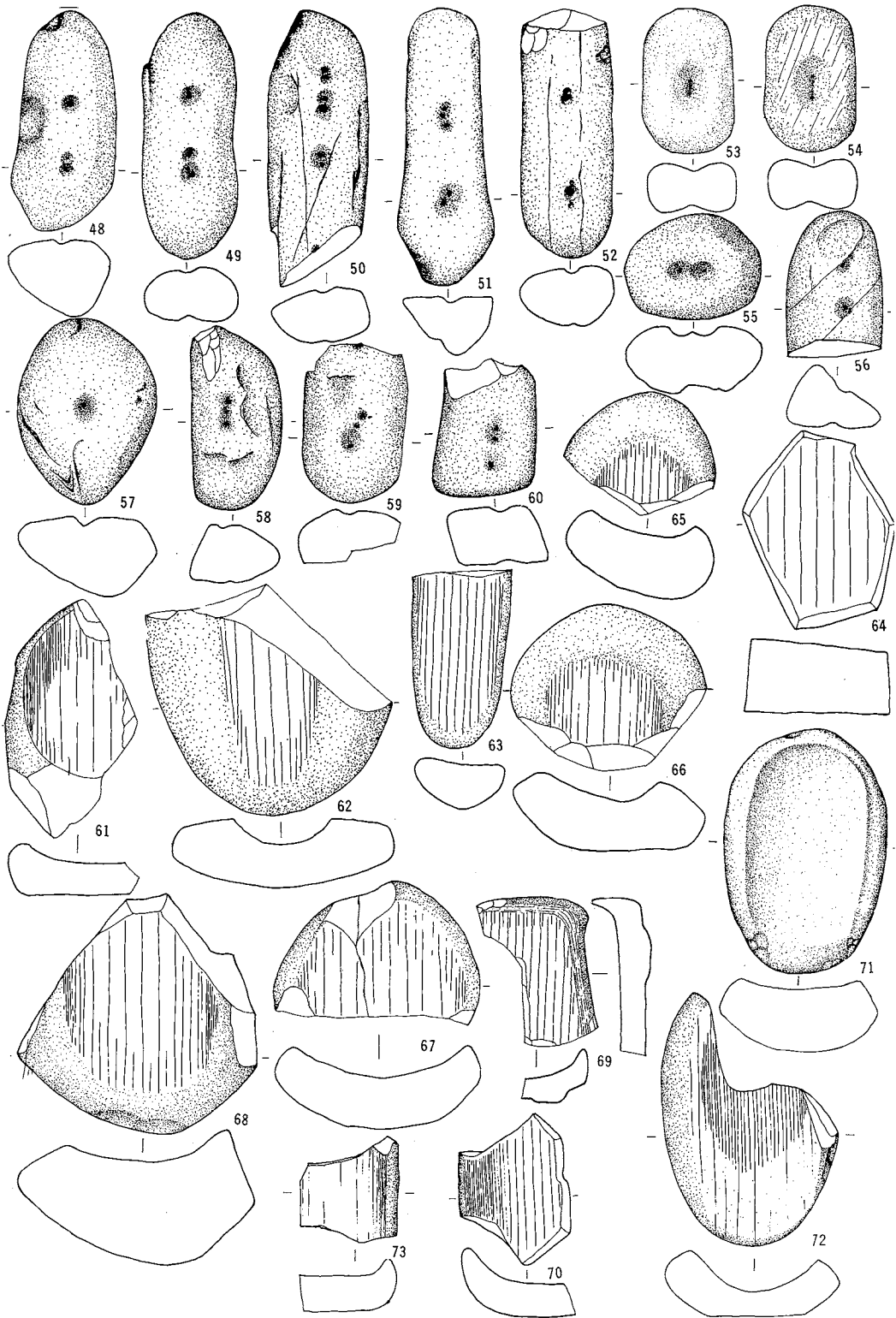
B区の縄文住居址、同じく同弥生時代遺構及びC区より発見された石器は、第3表のように打製石斧・

第 3 表 樋口五反田遺跡縄文時代石器出土地点別一覧表

石器番号	出土地点	石器番号	出土地点	石器番号	出土地点	石器番号	出土地点
1	1号住	20	3号住	39	9号住	58	C区
2	3号住	21	7号住	40	"	59	"
3	4号住	22	表採	41	配石址	60	"
4	8号住	23	15号住	42	15号住	61	表採
5	15号住	24	表採	43	1号周溝墓	62	"
6	"	25	4号住	44	2号周溝墓	63	5号住
7	1号周溝墓	26	7号住	45	配石址	64	7号住
8	"	27	"	46	表採	65	8号住
9	C区	28	"	47	"	66	"
10	C区	29	1号周溝墓	48	1号住	67	"
11	"	30	"	49	1号周溝墓	68	15号住
12	"	31	"	50	C区	69	2号周溝墓
13	"	32	"	51	"	70	"
14	"	33	C区	52	"	71	C区
15	"	34	"	53	表採	72	"
16	"	35	"	54	C区	73	"
17	表採	36	"	55	表採		
18	C区	37	1号住	56	C区		
19	"	38	表採	57	"		



第30図 樋口五反田遺跡出土縄文時代石器実測図その1 (1:4)



第31図 樋口五反田遺跡出土縄文時代石器実測図その2 48~60 (1 : 4) 61~72 (1 : 8)

磨製石斧・石匙・石剣・凹石・石皿・砥石でその量はさして多くない。石材は天竜川及び同川に注ぎ込む横川川、沢底川等に見られる安山岩、片麻岩系統の転石で、ただ石匙（20）のみが黒耀石製である。その出土した遺構、地点については、第3表を参照してほしいが、良好な住居址の検出がなかったことと合わせて、15号住を除いては石器のセット関係をつかむことはむずかしい。ただ強いて言えば黒耀石製の石鏃の出土がみられなかったこと、石匙が僅か1点のみの出土であったことなどは、注意すべきことかもしれない。

(12) 土製品

土製品にはC区出土の三角形土製品の他に4号住覆土内より発見された土偶の破片がある（第32図）。顔面から肩部にかけての破片で、顔面は正円形を呈している。僅かな肩部の破片から類推すると辰野・新町出土の仮面をつけた土偶のように顔を前方に突き出した呈をなすものと考えられる。胎土、焼成、中空であること、肩部にみられる僅かな沈線文などよりその所産は縄文後期であろう。顔面は径4.5cmの円形で沈線によって縁どられ上部3分の1の所に微隆帯が走り、その両端に耳部が表現されている。隆帯の下には沈線によって細長の目が切れ、その中辺は隆起し下方から1孔が刺突されて鼻を形づくっている。口は、下方にあり円形の小孔で表現されている。径は0.5cm、深さ1.4cmである。

3) 配石址

1号住の南方に発見された配石址群は、東西20m、南北15mの範囲を有しているが、1号住内から多量

第4表 樋口五反田遺跡配石址一覧表

配石址番号	プラン	主軸方向	内部規模 (cm)	深さ (cm)	内部状態	遺物
1	不歪楕円形	N61°W	130×40	-16	石が3個	骨片・石鏃 附近に埋襲
2	不歪楕円形	N41°W	155×72	-13	石が9個	骨片・黒耀石
3	不歪楕円形	N61°W	165×68	-10	石が12個	骨片・黒耀石 土製円板
4	不歪長方形	N60°E	185×83	-13	石はなし	骨片
5	不歪楕円形	N47°E	254×69	-12	石が10個	骨片・石鏃
6	不歪楕円形	N0°E	187×118	-12	石が7個	骨片・
7	不歪長方形	N57°W	180×52	-13	石が1個	骨片
8	不歪三角形	N49°W	157×83	-14	石が4個	骨片
9	不歪長方形	N70°E	339×70	-14	石が7個	骨片・石鏃
10	不歪楕円形	N87°E	213×110	-15	石が8個	骨片
11	不歪楕円形	N24°E	120×42	-9	石が4個	骨片
12	不歪長方形	N49°E	133×53	-10	石はなし	骨片
13	不歪楕円形	N52°W	335×84	-8	石が2個	骨片
14	不歪楕円形	N24°W	160×55	-13	石が5個 縁石に石棒	骨片
15	不歪楕円形	N8°W	157×62	-12	石が4個	骨片
16	不歪楕円形	S64°W	126×82	-11	石はなし	骨片 附近に埋襲

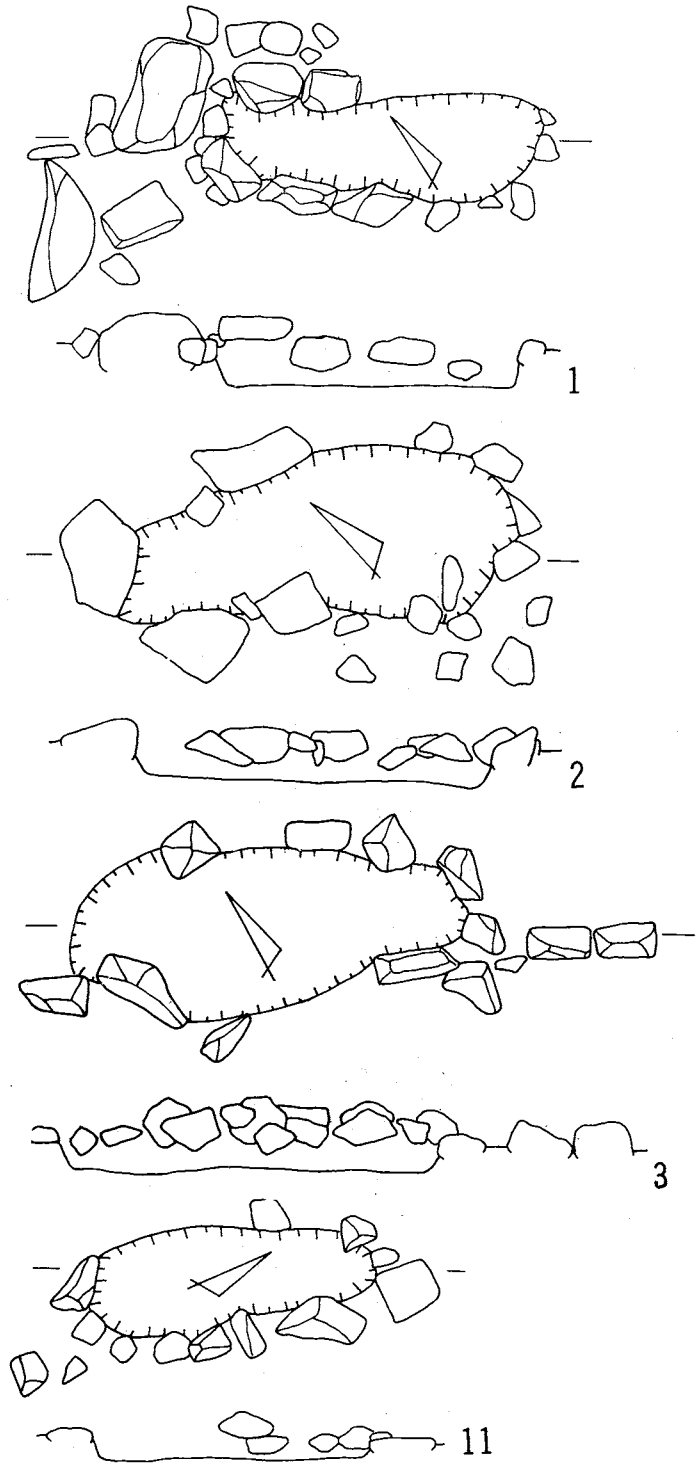


第33図 樋口五反田遺跡配石址群実測図 (1:600)

の石塊が出土したこと、その北壁外に配石16号址の発見されたこと、さらに1号周溝墓の溝内及びその内のテラス上に石塊が存在したこと、また縄文晩期土器片が7・8・9・11号住より検出されたこと等から、かつては南北40m程にわたって構築されていたと思われる。ただし、東西幅は20～25m程度で中央道の用地に限って言えば中心杭より西方にはみられない。

遺構の検出された層位は、水田床土下の黒褐色粘土層中で石の上面は床土に接していた。従って水田造成時に相当量石塊のぬき取られたことが考えられ、事実古老の言においても同様であった。石材は1点の石棒破片を除いては、いずれも角のない河原石で安山岩・片麻岩など天竜川で採集できるものである。大きさは両手でかえ上げる程度のものである。これらの石塊は規則性なく雑然と埋っているかに見えたが、浮き石を除去していくと16を数える配石址が確認できた。

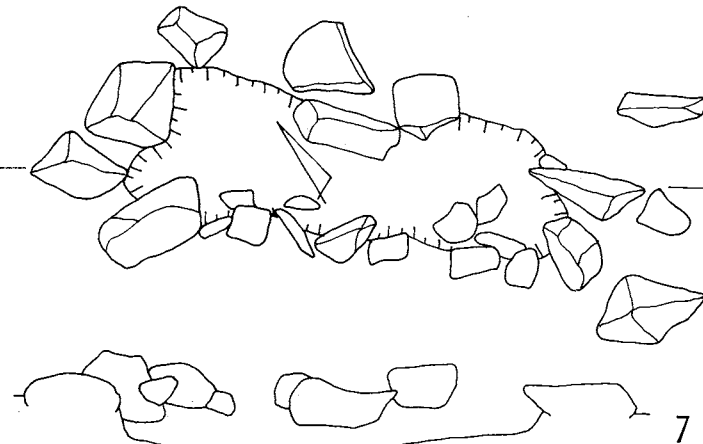
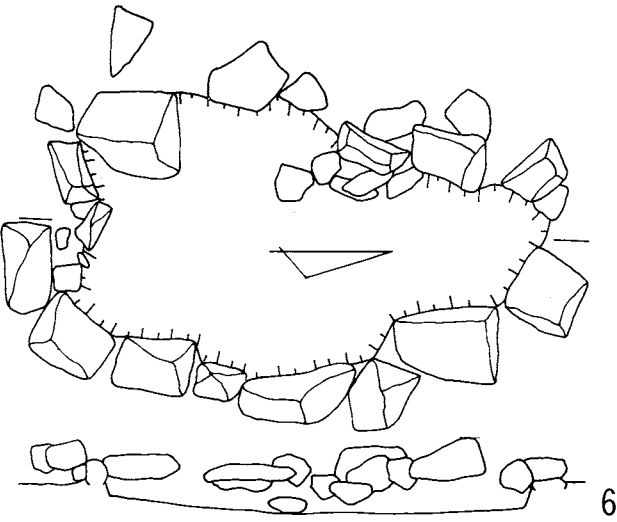
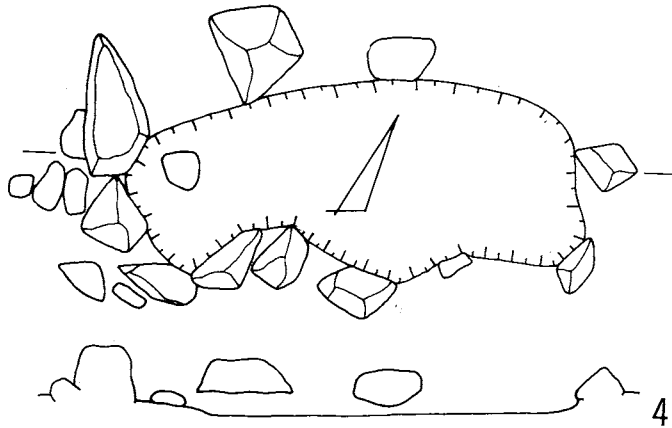
(第33図)



第34図 樋口五反田遺跡配石址実測図その1 (1:30)

遺物は土器片・石器・骨片で土器片はいずれも配石址の上面ないし周辺から発見され、その状態は16号址横の埋嚢を除いていずれも破片であり、全器形のかがえるものは存在しない。破片の部位は口縁部が圧倒的である所から土器を故意に破砕したとみるよりは、配石址周囲に16号址のそれと同様の逆位の埋嚢を想定した方が適切かと思われる。石器は、石鏃が大部分を占め、同種遺跡にみられるような非実用的石器は出土していない。また石鏃について欠損しているケースも少ない。骨片はすべて配石址内より出土した。これについては、後章でふれたい。なおこの骨片については直良信夫博士・鈴木誠博士の御教示を得た。

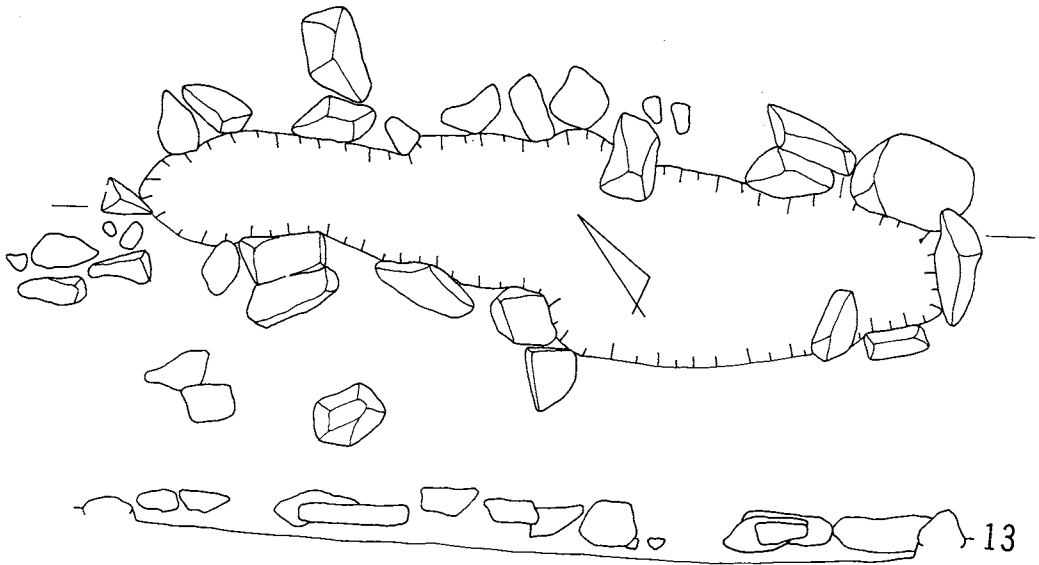
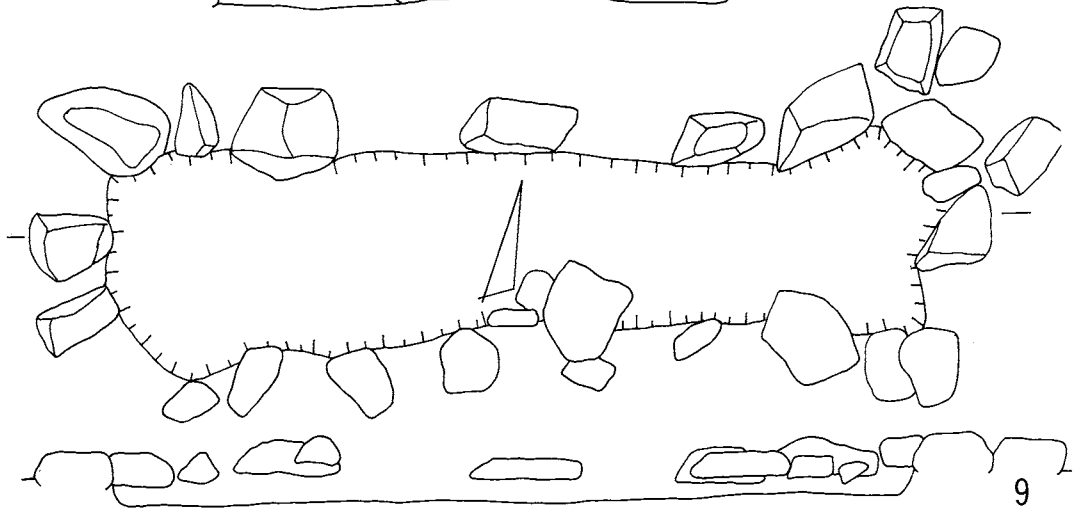
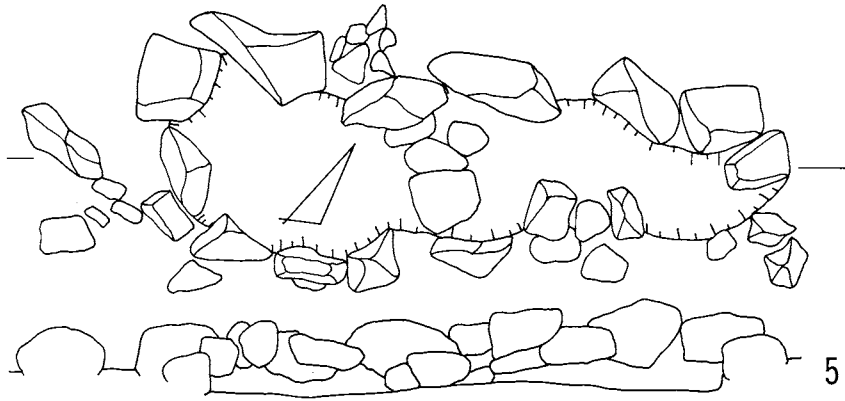
以下各配石址の記述にうつるが、その数値については第4表のとおりである。



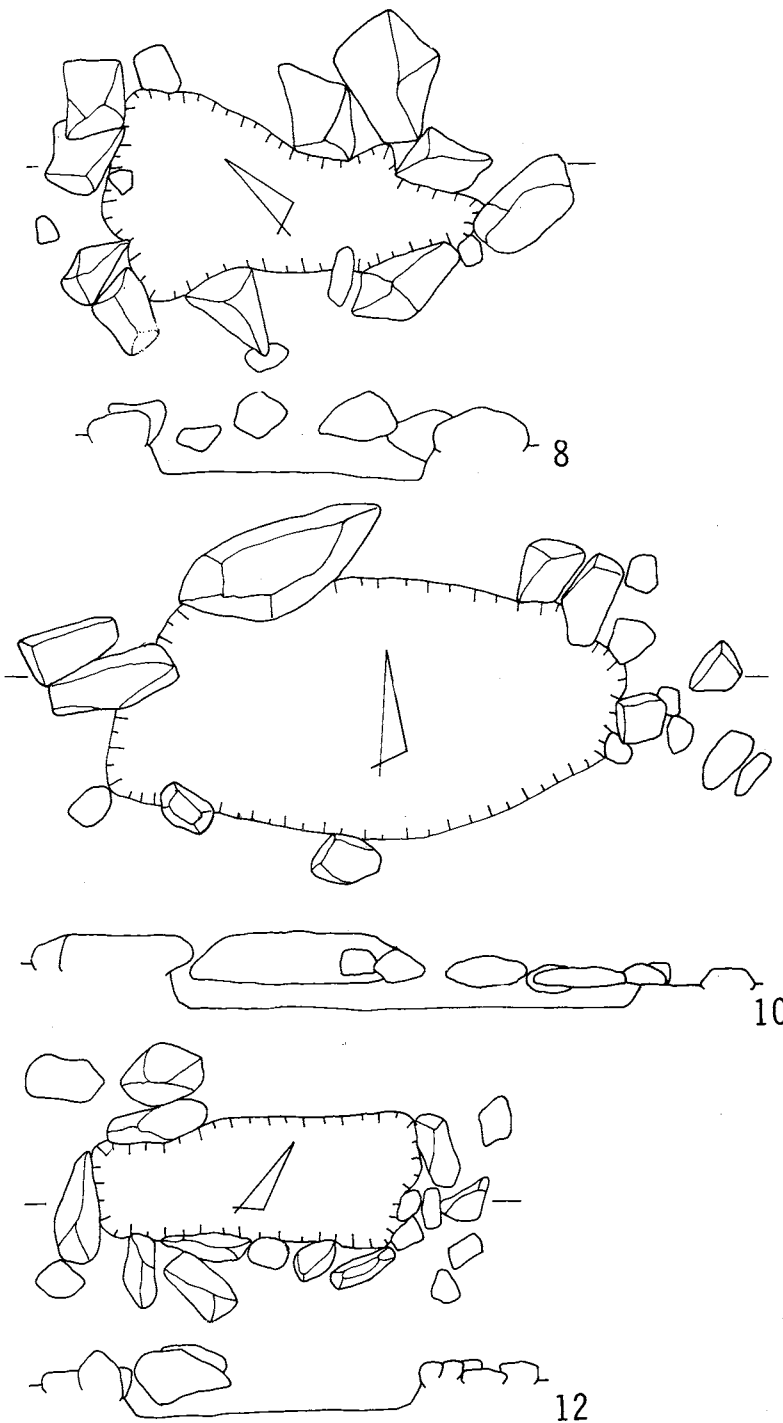
(1) 配石第1号址 (第34図)

1号住東壁に接して

第35図 樋口五反田遺跡配石址実測図その2 (1:30)



第36図 樋口五反田遺跡配石址実測図その3 (1:30)



第37図 樋口五反田遺跡配石址実測図その4 (1:30)

(4) 配石第4号址 (第35図)

配石の良好な部分は西端のみで他の大部分はぬかれている。西端辺の一石は高く聳立している。凹みの深さは10cmで若干の骨片が検出されている。

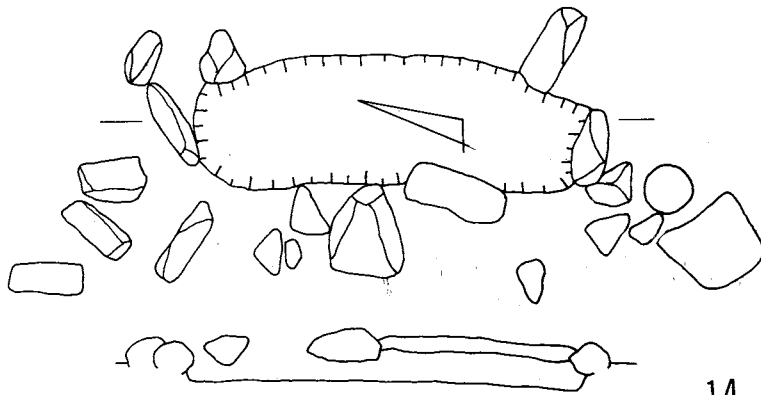
いるもので、西端の大石は二つに割れ、片方は1号住の床面上に転落していた。上面と東縁の石塊は失なわれているが、南半分より北半分にどうも大石が用いられていたようである。配石内凹みの床面は低平で床より6~10cm浮いて3個の石塊が存在していた。出土遺物は黒耀石製の完存な石鏃1点と少量の骨片で火熱を受けた鹿の角であった。ただし、焼土、火熱を受けた石塊は発見されていない。なお本址北側に逆位の埋嚢と考えられる土器片縁部破片が2個体分出土している。

(2) 配石第2号址 (第34図)

長さ2mの規模を持つもので、東半部の石は大部分失なわれてはいるも西半部は覆石がほぼ残っていた。配石内は15cm程掘りくぼめられ西半部より火熱を受けた鹿角片を検出している。

(3) 配石第3号址 (第34図)

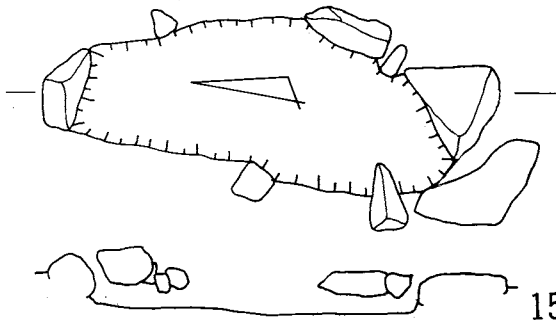
全長2.8mを計るが、凹みの長径は1.65mで終わっている。凹みの上面はほぼ石で覆われている。出土遺物は黒耀石片と鹿角で、配石址付近より土製円板が発見されている。



14

(5) 配石第5号址(第36図)

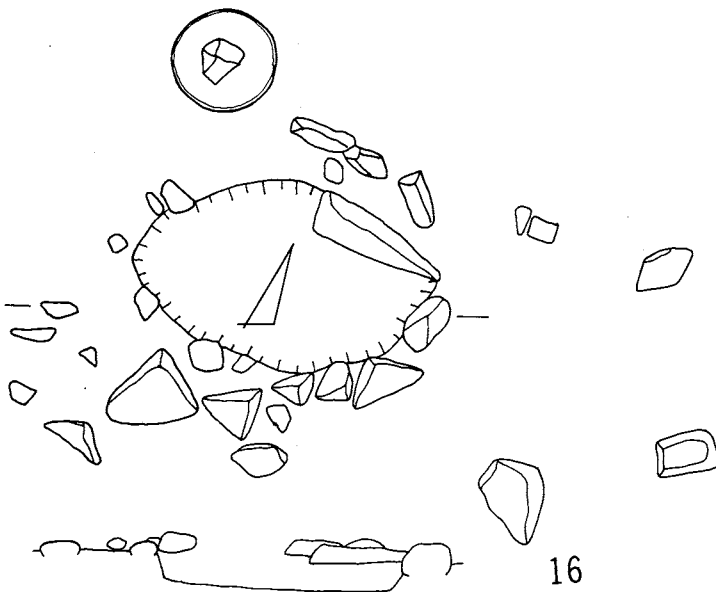
5号址は6号址と共に主軸方向が他のものより若干かわっている。比較的縁石と覆石の遺存状態は良好である。覆石の一部は、内部の凹みの床面まで落ち込んでいた。出土遺物は無茎の黒曜石製石鏃1点と骨片だけである。



15

(6) 配石第6号址(第35図)

長さに比し幅広のもので縁石のもっとも完存のものである。内部の凹みは、187×111mmでちなみに成人を横たえた場合、仰臥屈葬させてなお若干のゆとりがある。凹み内からの出土遺物は骨片のみである。



16

(7) 配石第7号址(第35図)

西側の縁石と両端部の石塊が残っている。-13cmを計る凹みからは、骨片の検出がみられた。

(8) 配石第8号址(第37図)

7号址に続くもので、長さは1.8mとその規模は小さい。内の凹みは著じるしく歪んでいる。出土遺物は骨片である。

(9) 配石第9号址(第36図)

13号址と共長さ4.5mを越す大形なものである。覆石はなく縁石もなかばを抜き取ら

第38図樋口五反田遺跡配石址実測図その5 (1:30)

れている。凹み内からは柳葉形の石鏃1点と火熱を受けた鹿角が出土している。

(10) 配石第10号址 (第37図)

配石址群の西端にあるもので、石塊のなかばを失っている。凹みは15cmとやや深く骨片の出土が見られている。

(11) 配石第11号址 (第34図)

2号址の隣りに発見されたもので、長さ、幅共に小さい。縁石も片側を欠いている。骨片が出土している。

(12) 配石第12号址 (第37図)

11号址同様、規模の小さなもので片側の縁石を失っている。骨片が出土している。

(13) 配石第13号址 (第36図)

大形な配石址であるが、石塊のなかばは失われている。中の凹みは浅いがその内より骨片が出土した。

(14) 配石第14号址 (第38図)

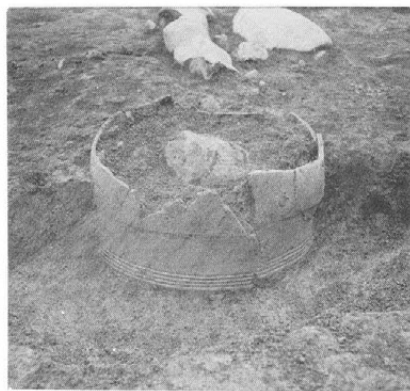
13号址の隣りにあって、片側の縁石を欠いているが、南端部にはやや大きめの石塊が据えられて、それに接して径20、長さ60cmの石棒破片が立てられていた。この石棒はその大きさから明らかに縄文中期の所産と考えられるもので、この場合石棒自体に意味を持たせる必要はない。ただし、配石址の一端に大石や柱状の石を置く傾向のあることは、本址の例からうかがわれよう。内部からは骨片が出土している。

(15) 配石第15号址 (第38図)

石塊の大半を欠失している。骨片が検出されている。

(16) 配石第16号址 (38・39図)

1号住居址の北壁外に発見されたもので、126×82cmという不歪楕円形の凹みがあり、その片縁に10数個の石塊が置かれている。凹みの内からは骨片が検出されている。この配石址の北西方30cmにおいて縄文晩期の大型深鉢形土器が倒立の状態で見つけられていた。口縁の位置は配石上面のレベルより、30cm程下である。なお、この埋葬は図上復元をすると60～70cm程の器高となり、底部は当時の地表外にあったことになる。



第39図 樋口五反田遺跡配石址
配石第16号址出土埋葬

4) 配石址出土遺物

若干の縄文中期初頭土器片の混在をみたが、主体は縄文晩期である。(第40・41図)

縄文中期の土器片は1～14までで、うち1～4・7～11は半截竹管工具による格子目文を口縁にめぐらす中期初頭のものである。なお4には三角形の印刻文が見られる。5・6・12～14は中期中葉の勝坂式的な類である。

主体を占める土器片は、15～103まででこのうち62・63・65・73・79は縄文後期に位置するもので、内面に5条の沈線を走らす。79の鉢などは典型的な加曾利B式土器である。

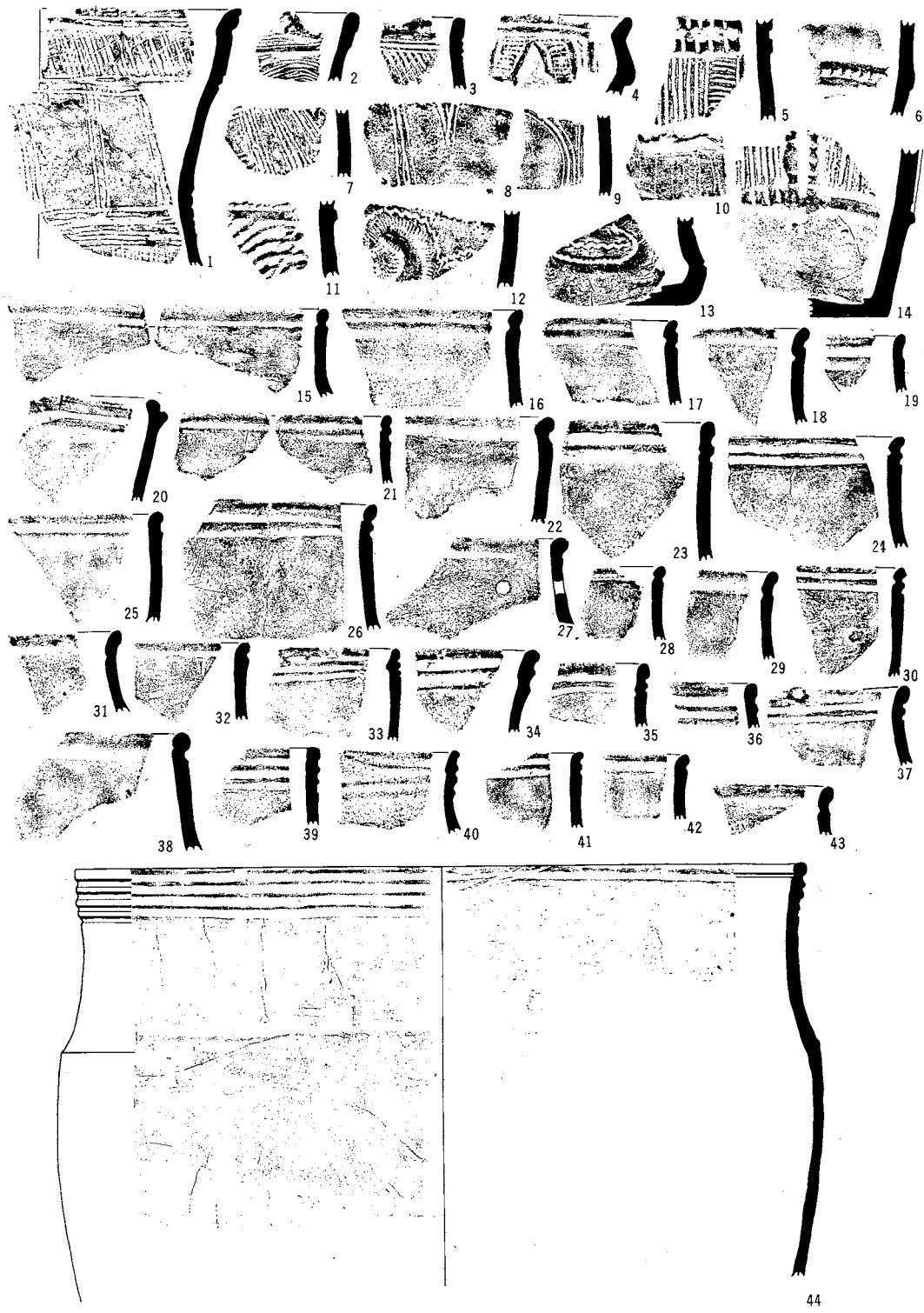
縄文晩期の土器片は、器形・焼成・胎土から粗製・精製の2種に大別できる。粗製はおおく深鉢形をとる。このうち口縁の外側にやや幅のある凹み状の沈線を1条めぐらしたもの(32)、沈線の2条走るもの(17・21・23・24・26・30・35・36・37・41)があり、シャープな1条沈線及び2条の沈線をめぐらしたものは口縁内側にも多く1条の沈線を走らせている。さらに、それらの深鉢の器表面は口縁外側に幅広の1条をめぐらすものよりも、研磨の痕が著じるしく見方によっては、半精製の感を与える。なお、口縁外側に3条ないし4条の沈線をめぐらすものがある(39・44)。このうち44は配石16号址のかたわらに発見された逆位の埋甕で口縁径は44cm、残存器高は25cmを数えた。その器形は、口縁下11cmに稜線を走らせているもので、稜線下の胴部には薄い擦痕が施されている。頸部と内面はへら状の工具を横走させての研磨でこれも所謂半精製の部類に入る。

粗製土器にはこの他に、無文と条線のあるものとがある。なお84・85は口縁外側断面四角形の凸帯文をめぐらし、胴体上に穀粒状の刻目がなされていて東海的な色彩が濃厚である。いずれも粗製の深鉢で口縁は平縁が大部分だが中には、2個並列の山形突起を置くものもみられる(93・94)。条線あるもの(100～103)、うち100・101はその施工工具は不明だがともかく口縁部から擦痕が横走している。102・103はより薄い刷目状の擦痕が縦走している。

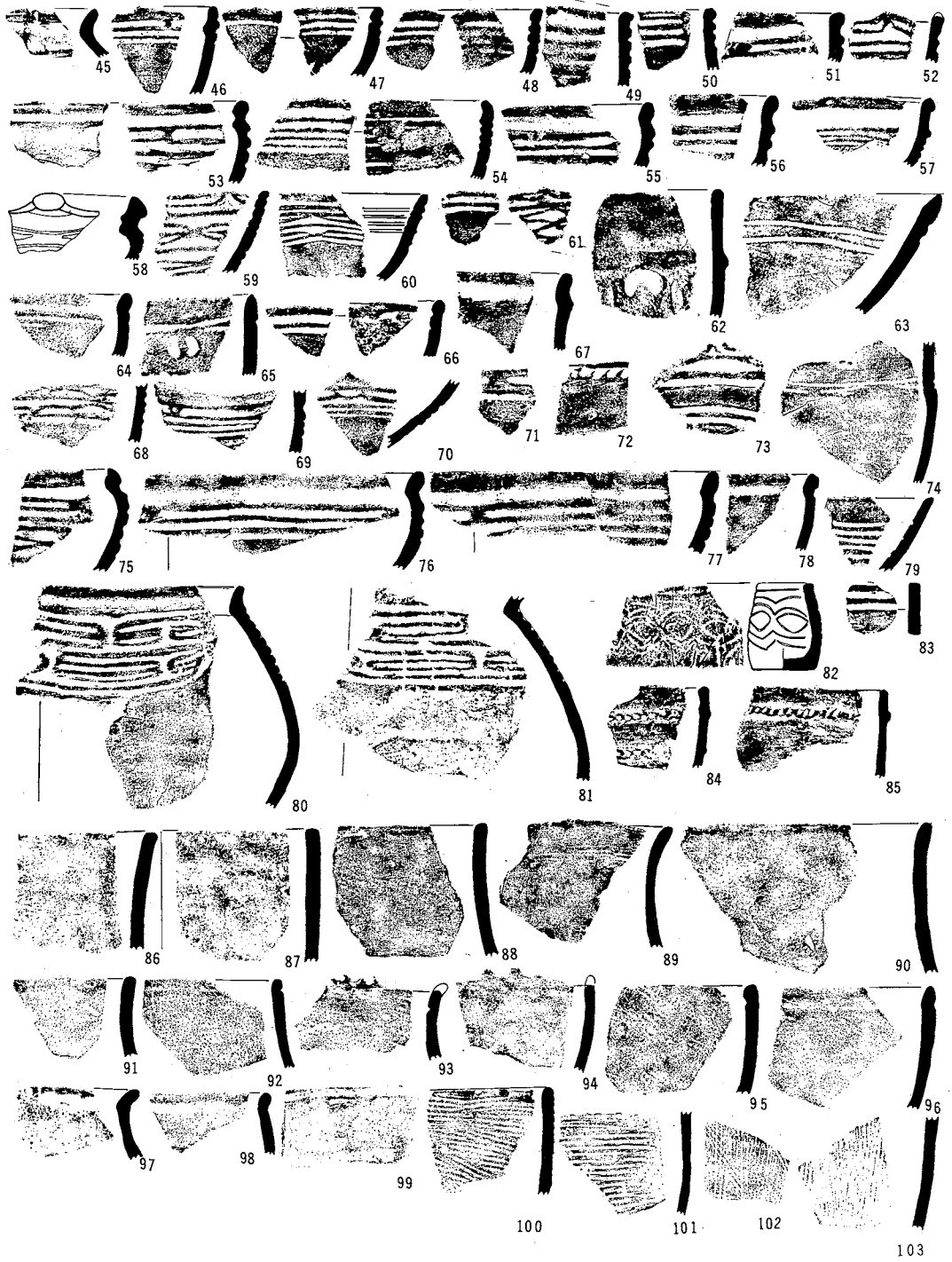
精製土器は浅鉢・鉢・壺形をなすもので、口縁外側には3条ないしそれ以上の幅狭いシャープな沈線をめぐらし、内部にも1条～3条の沈線を刻むもの(46・50・54～57・69)、数条の沈線をむすんで工字文を構成しているもの(53・58～61・68・70・75～77)、1条の沈線を折り曲げて3角形状の空間を作り出しているもの等がある。鉢形土器の形態は口縁から塊状に丸く収約していくものと、口縁が「く」字に短く屈折して以下塊状をなすものとに別けられる。壺形をなすものとして80～82がある。80・81は、口縁が短く立ち上がり最大腹形部位を器高中辺に置く無頸壺的なものである。文様帯は上胴部のみ施されている。その文様はやや太めの沈線を用いて彫刻的な工字文である。82は小形品で胴部一面に重杏仁形文様をめぐらしている。

最後にこれら精製土器のうち口径の大きい76・77は、配石1号址の傍らより口縁を下にして発見された。また、その附近より、80・81の壺形土器片が出土していることを記しておく。なお、83は精製土器片を加工しての円板で配石3号址附近から出土した。

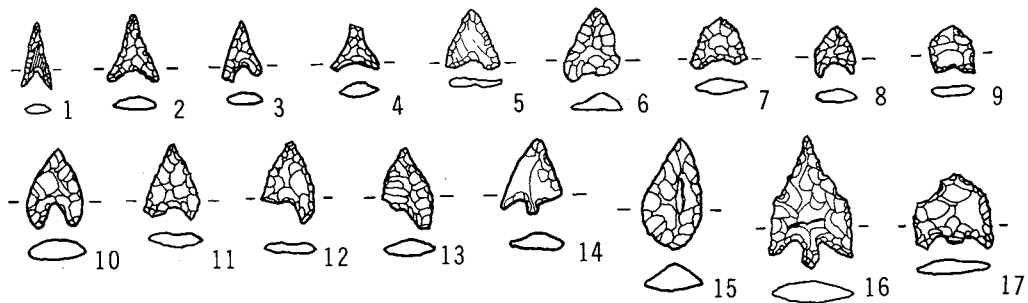
採集された石器は、石鏃と凹み石だけである。石鏃(第42図)はすべて黒曜石製で完形品が大部分である。形状は小形の無茎が大部分で、有茎・柳葉形は17点のうち14点のみで、うち16はことに大きく圭角を



第40図 樋口五反田遺跡配石址出土縄文土器拓影その1 (1:4)



第41図 樋口五反田遺跡配石址出土縄文土器拓影その2 (1:4)

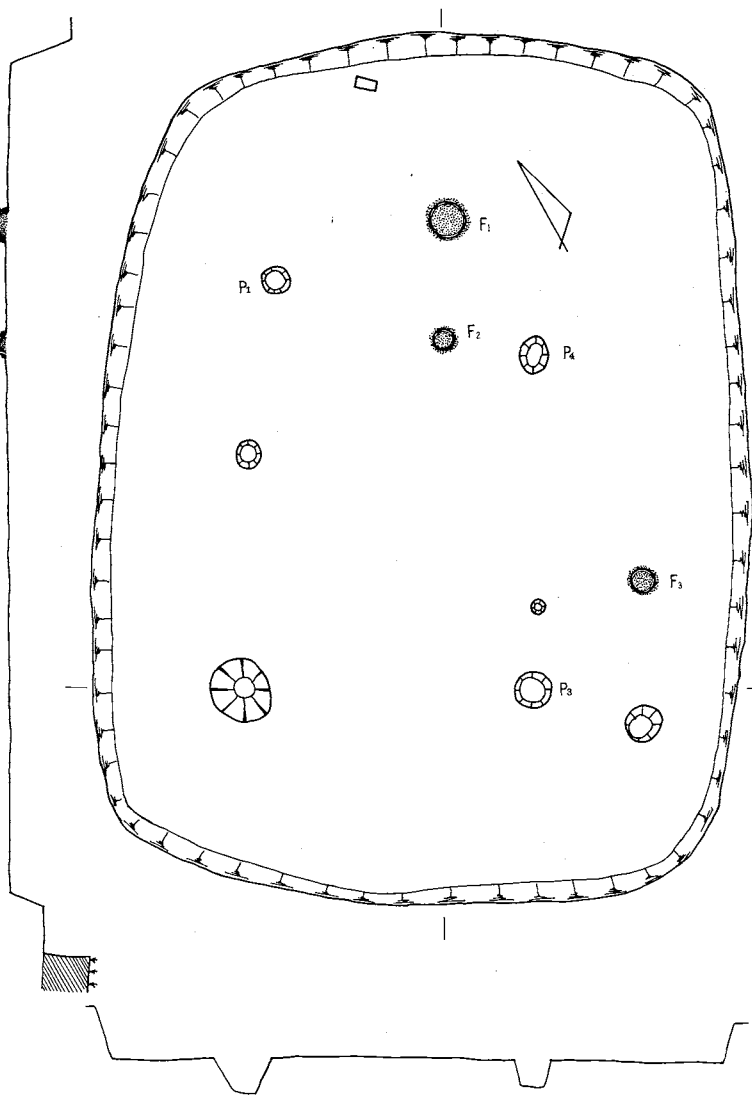


第42図 樋口五反田遺跡配石址出土石鏃実測図(1:2)

を有する飛行機鏃である。出土地点について配石1号址(4)、配石5号址(3)、配石9号址(15)、配石周辺(1・2・6~8・11・12・14・16・17)表面採集(5・9・10・13)である。凹み石は縄文中期の遺構及び包蔵地出土のものとは何ら変りはない。

5) 弥生住居址

樋口五反田遺跡の弥生住居址群は、天竜川に向かって突出した岬状台地の先端より40m奥まった地点より発見された。東西幅は長さ40mの中央道用地幅以外まで尋ねることはできなかったが、1号周溝墓東方に1住居址の存在が確認されていること等から、おそらくは



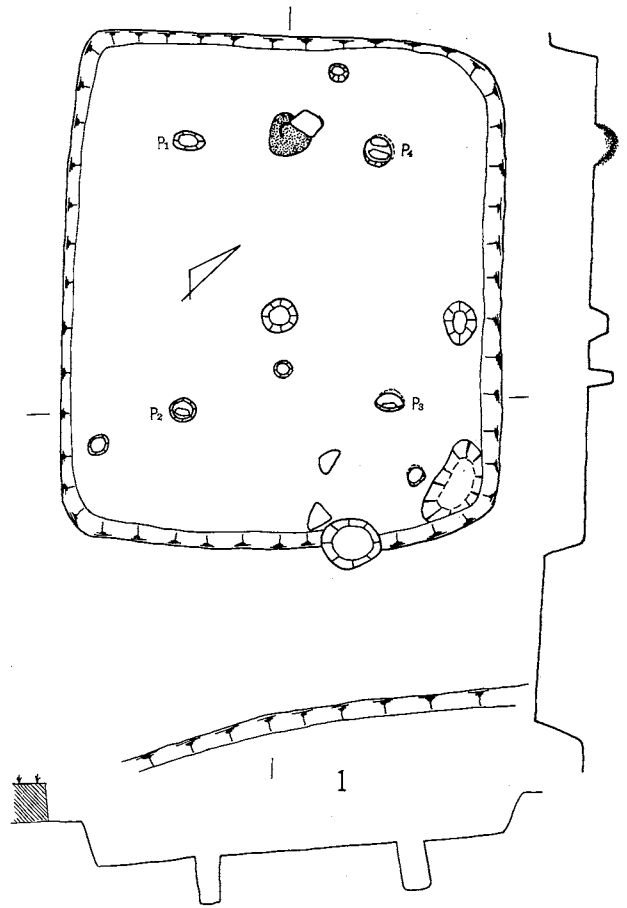
第43図 樋口五反田遺跡第1号住居址実測図(1:80)

台地幅いっぱいに住居の営なまれていたろうことが推察できた。これに対して、南北幅は南端に発見された1号住より40m離れた地点に8号住を見出したのが最後で、それ以北には1軒の竪穴も見出せなかった。東西幅40mの中央道用地内に発見された住居址は、1・2・3・4・7・8・9・11・12・13・16の11ヶで番号は発見順に付していったが、規模の大小、プランの異同、重複関係、特に火災の有無、後述する1号・2号周溝墓との切り合い関係から2期もしくは3期に分類することができそうである。

(1) 第1号住居址 (第43図)

住居址群の南端に発見されたもので主軸方向をN-29°-Wに置く隅丸長方形プランを持つ。規模は9.2×6.8mと大きすぎる。壁は垂直で北壁では60cm、南壁では40cmを計る。壁下には溝などの施設はみられない。床は水平堅緻で粘土を敷きこれを敲打してある。炉址が3ヶ発見されていることから、床面の修築が考えられ精査したが、そのような痕跡を確認するには到らなかった。なお、炉址のレベルはみな同一であった。床面上の施設として柱穴は7ヶ発見されたが、主柱穴と見られるものはP₁~P₄の4ヶと推察される。主柱の深さはP₁が50cmと深く他は36~28と浅きにすぎる。炉は3ヶ所に発見された。いずれも土器を火壺とした地床炉で、火壺の外は焼土が堅く火壺の中は上部に堅い焼土があるも下部は炭と灰の柔らかい土で満たされていた。F₁は北壁中央にもっとも近い位置を占めているもので、無文の壺胴部を逆位に用いている。F₂はF₁の内側にありP₁とP₂の上に梁を想定すればその直下に位置している。甕形土器の口縁をそのままに用いている。これに対して、F₃は東壁に近く発見された。胴長の甕を直立させて火壺としている。このほか床面上の施設としては北壁に接して21×12cmの長方形平板石1枚が敷かれていた。周囲に遺物はみられていない。なお、遺物は土器だけでそれも火壺に用いられた3点の土器以外はみな破片である。

(2) 第2号住居址 (第44図)



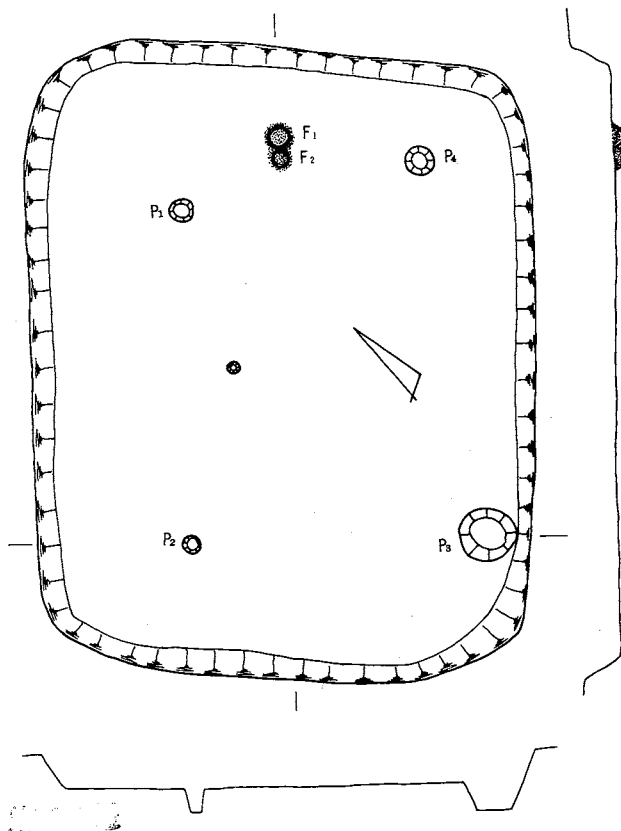
第44図 樋口五反田遺跡第2号住居址実測図(1:80)

第44図 樋口五反田遺跡第2号住居址実測図(1:80)

1号住の西方1.7m発見されたもので、主軸方向をN-45°-Wにとる方形プランの竪穴で5.4×4.6mである。壁高は50~40cmで、壁外施設としては東壁上にピット1ヶうがたれている。床面は粘土を敷き固めてその露呈はきわめて容易であった。支柱穴は4個整然と設けられてあり、うちP₂・P₃・P₄の内部には石塊が埋められていた。炉はP₁とP₄の中間に設けられている。地床炉で深さ25cmあり、その底に甕形土器の口縁がうめられていた。傍らに石塊がある。

(3) 第3号住居址 (第45図)

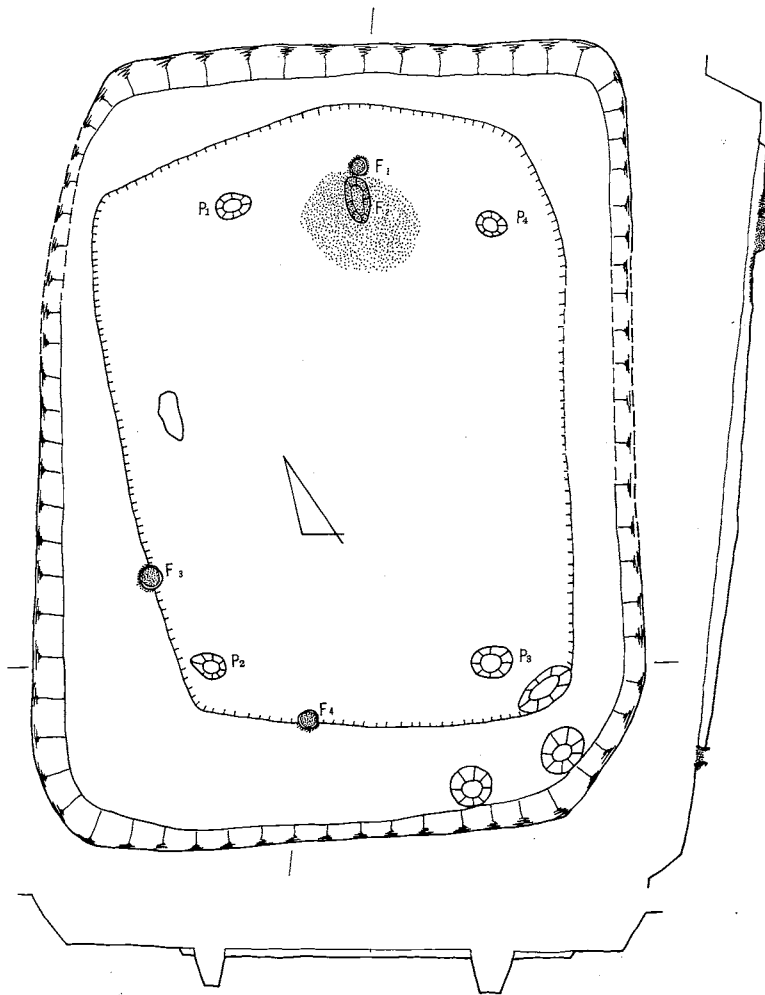
主軸方向をN-39°-E、長方形プランの竪穴で6.7×5.3mの規模を持つ。壁高は38~35cmでやや浅く勾配は緩やかでかつ柔らかい。支柱穴として一応4ヶのピットを想定したが、P₃は径が大きくかつ壁に寄りすぎていて難がある。炉は北壁に寄って2ヶ設けられているが、P₁とP₄を結ぶ線の下にはない。いずれも土器を火壺としたものでレベルからすればF₂が深く、発掘時の所見によればF₂が最初の炉で遅れてF₁が作られたということになった。ただし、床面は1層で張床の痕跡はない。F₂は無文の土器口頸部破片、F₁は立ち上った口縁を持つ壺の上半部を逆位に用いている。なお、この住居址の北壁は2号周溝墓の南溝によって切られている。



第45図樋口五反田遺跡第3号住居址実測図 (1 : 80)

(4) 第4号住居址 (第46図)

主軸方向を3号址とほぼ同方向にとる長方形プランのもので、規模は1号住に次ぐ8.4×6.2mの大きさを持つ。壁高は45cmと深い、掘り込みは直ではなく相当の傾斜がある。床面は硬く水平であったが、壁下から1m程度離れると厚さ3~5cmの張床となった。この張床は焼けていて、張床に伴う施設としてP₁~P₄までの支柱穴とF₃・F₄の炉がある。F₃は西壁寄りにあり。F₄は南壁寄りにある。いずれも火壺をもつ地床炉である。次に張床部分を除去してみた。張床の下には10cm程の粘土をまじえた黒土があり、その下に堅い第2の床面があらわれた。この床面の範囲は、東西4.7・南北6.5mで輪郭は不歪長方形をとる。この床面に属する柱穴は上部張床のそれと同様であり、そしてP₁とP₄を結んだ線のほぼ中央に規模の大きい地床炉が存在していた。その炉はF₁・F₂の記号で表わしてあるが、これは同じ施設と見られる。すなわ



第46図 樋口五反田遺跡第4号住居址実測図(1:80)

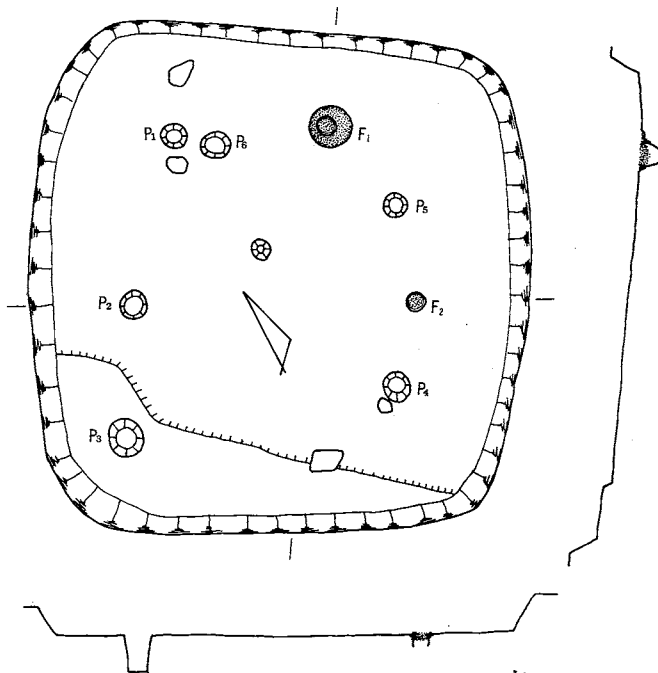
(5) 第7号住居址(第47図)

N-30°-Eに主軸方向をおき5.3×5.2mの隅丸方形プランをとる。壁は軟弱で高さは37~30cm程度である。床は硬く水平であるが、南端部において10cm程上がり、南壁下はテラスをなしている。柱穴は7ヶあり、うちP₁・P₂・P₄・P₅が支柱穴と考えられるがP₁に接してP₆がありP₁・P₂の延長上にP₃があることから、あるいは4号住同様住居の拡大が図られたかもしれない。さすれば、南壁下のテラスはその拡張部となる。炉址は北壁寄りにF₁、東壁寄りにF₂と2ヶ認められている。F₁は壺形土器、F₂は甕形土器を火壺に用いている。そして、この住居址が後に拡張されたと解するならば、炉址はF₂が古く、F₁が新しいということになる。なお、本址もその一隅を2号周溝墓北溝によって切られている。

(6) 第8号住居址(第48図)

7号住の北方に発見された住居址で隅丸方形をとる4.5×3.9mの小形な竪穴である。主軸方向はN-

ち、甕形土器上半部を火壺としたのがF₁であり、それに接するF₂はそれに伴なう凹みであってその中には木炭・灰・焼土塊、そして火熱を受けた骨片が入っていた。なお、この凹み(F₂)を中心に径1.2mに及んで焼土が散布していた。後日、この骨片を信州大学医学部第2解剖学教室の鈴木誠教授に鑑定を願ったところカモシカの末節骨とのことであった。本址については、はじめF₁・F₂を炉址に持つ4.5×6.5mの規模であったものが後日張床をし、壁を拡張して8.4×6.2mの規模となり、やがて火災によって廃滅し去ったものと判断し合った。なお、本址はその真中を1号周溝墓によって切られている。

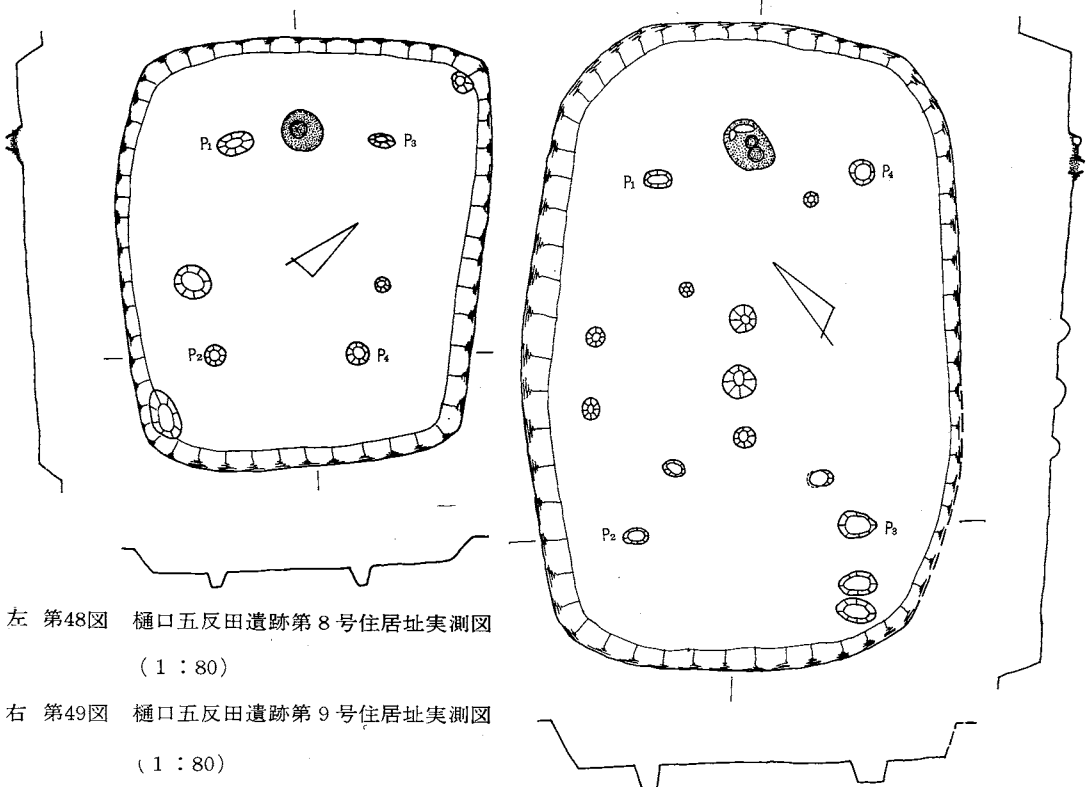


第47図 樋口五反田遺跡第7号住居址実測図 (1:80)

56°-Wである。壁高28~25cmと浅く相当な傾斜がみられる。床面は堅く一部北西隅寄りに床構造物と思われる炭化物の検出をみた。また、床面上5cmの処に焼土と炭の混在があったが火災の痕跡を示すほどのものではない。床面上の施設として主柱穴は4ヶあり、P₁とP₃の中間に火壺を持つ地床炉が設けられている。火壺内の状況は他の火壺のそれと同じく上面に焼土があり下方には柔らかい炭と灰が充満している。

(7) 第9号住居址 (第49図)

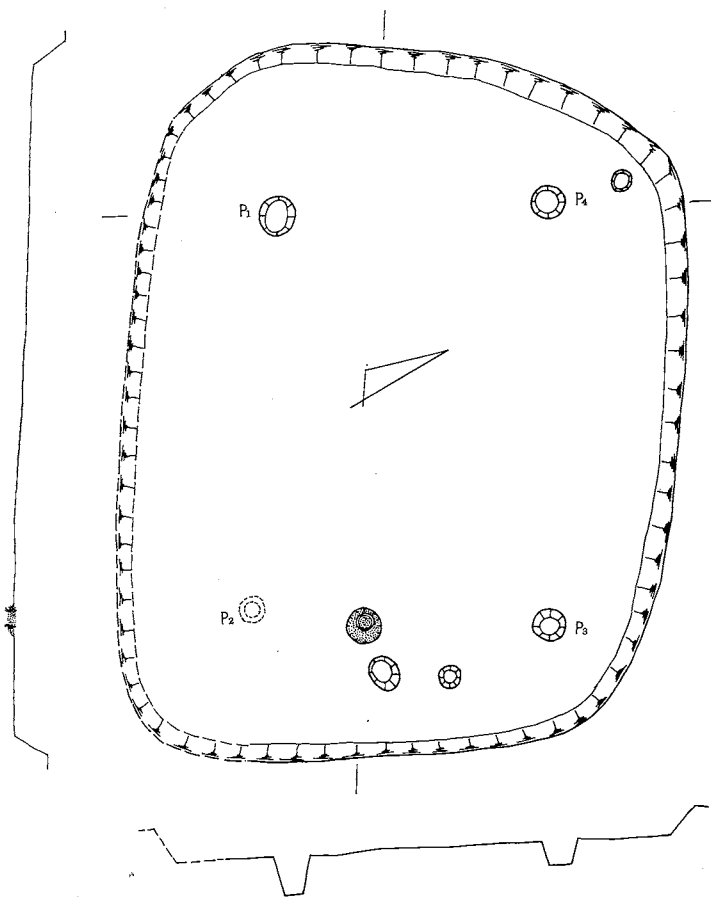
1号周溝墓のテラス内にあり、かつその東壁は周溝墓東溝によって切られている。隅丸長方形をな



左 第48図 樋口五反田遺跡第8号住居址実測図 (1:80)

右 第49図 樋口五反田遺跡第9号住居址実測図 (1:80)

す6.8 m×4.9 mの竪穴で、主軸方向は1・4・16号とほぼ同様である。壁はほぼ垂直に掘られ、深さ56~40cmを計る。床は粘土を張った堅緻なものであるが、それは張り床でその直下にはすぐ第2の床が作られていた。支柱穴は4個であるが、その他に12個の小ピットが不規則にうがたれている。とくにも、住居址中央に3個が並んでいて間仕切りの小柱穴かと思われたが、16号住のケースから柱穴以外の用途を考えた方が妥当らしい。炉址はP₁とP₄の間に築かれている。径50cm程の地床炉で枕石がありそれに接して2ヶの火壺があった。火壺の周囲には木炭・灰・焼土がありこれにまじって加熱を受けた獣骨片を採集した。



第50図 樋口五反田遺跡第11号住居址実測図(1:80)

この住居址は火災によっての廃滅で床全面と、4囲の壁

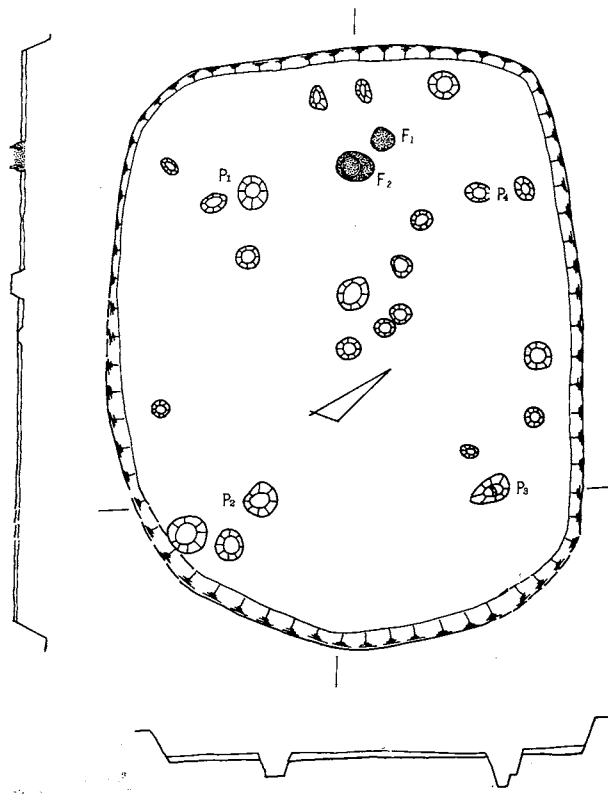
面が焼けていた。ことに北壁と西壁の面が強く焼け同処に可燃性の壁体の存在を思わしめた。また、火災によっての廃滅であるから当然に遺物の出土は多いはずで10数点の土器が炉址に近い壁下に残存していた。

(8) 第11号住居址 (第50図)

1号周溝墓北溝によって南壁を削り取られた住居址で主軸方向はS-58°-Eをとる。推定隅丸長方形で7.5×5.8 mの規模を持つ。壁は浅い方で一部分軟弱不明瞭な所がある。床面は水平であるが、壁下は堅く支柱が囲む中央部は柔らかい。柱穴は4ヶが整然と掘られている。(周溝墓で切られているためP₂の位置は推定である。) 炉址はP₂(推定)P₃の間にあり、無文のカメ上半部を火壺とする地床炉である。なお、この炉はあまり焼けてはいない。

(9) 第12号住居址 (第51図)

2号周溝墓西溝によって東壁の一部が破壊されているもので、やや歪んだ隅丸長方形を呈している。規



第51図 樋口五反田遺跡第12号住居址実測図 (1:80)

面は単一の面で堅く、同上には支柱穴4ヶとR₁・P₄の間に位置する炉址を持つ。炉址は中央に甕を埋めた地床炉で焼土が多い。甕内部の状態について上面は堅いが、下半分は炭と灰でその中より少しの骨片がみられた。なお、火壺の上には2点の甕形土器がつぶれ込んでいた。また、ピットについて中央部にみられる3個のものは間仕切に関係するものとは思われない。

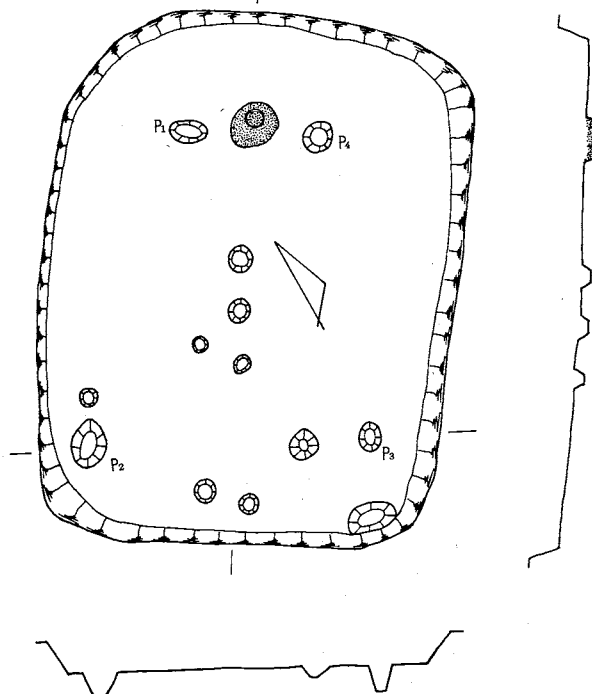
(11) 第16号住居址 (第53図)

1号周溝墓テラス内にあり、北壁は同周溝墓北溝によって切られている。また、同周溝墓の土壌は本住居址の中央部上に設けられてあった。プランは長方形、規模は7.5×5.3 m、主軸方

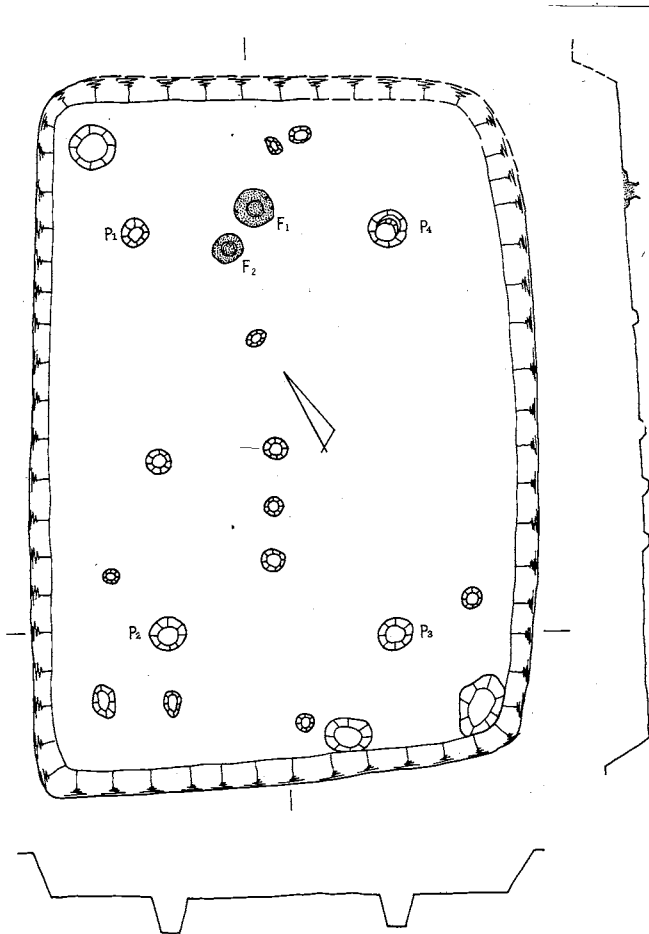
模は6.4×4.9 m、主軸方向は2・7・8・11号住とほぼ同様のN-64°-Wをとる。壁高は35 cm 前後で13号住との接触でやや明瞭を欠いている。床は厚さ8 cmほど張床がまずあり、間層を置かずして第2の床が張られている。上面の床に伴う施設として支柱穴はR₁~P₄、炉址は火壺を持つ地床炉F₂である。下方第2の床面が持つ支柱穴もR₁~P₄であるが、炉址は火壺のないF₁である。なおF₂の炉址について焼土は豊富で中より骨片がわずかにみられた。

(10) 第13号住居址 (第52図)

東壁を12号住と接しているもので、プランは隅丸長方形、規模は5.6×4.4 m、主軸方向は12号住と異なりN-33°-Eをとる。壁は床と同様に堅く固められてあり、壁高34~30cmを計る。床



第52図 樋口五反田遺跡第13号住居址実測図 (1:80)

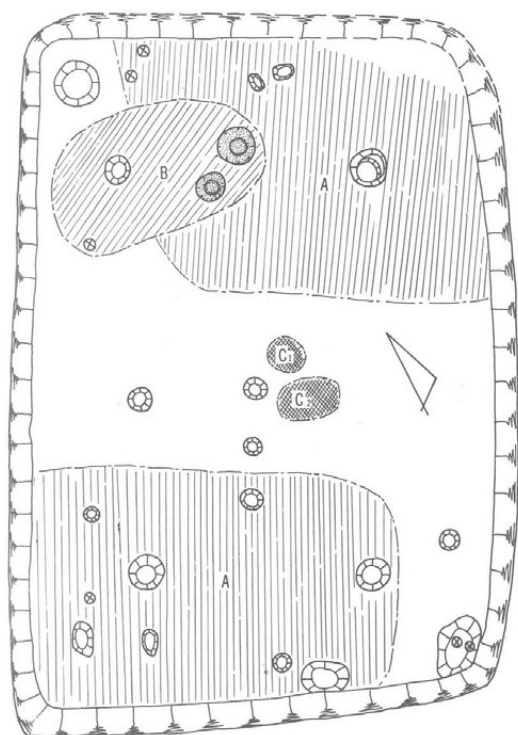


第53図 樋口五反田遺跡第16号住居址実測図（1：80）

と思われるナラ・クリの炭化物が横たわっていた。次に、同図には3個のピットが並んでいる中央辺にC₁・C₂の記号がうたれている。ここからは炭化米が検出された。C₁においては、比較的粒のそろった玄米が径15cmの円内にまとまってあった。その在り方は若干主観がまじるが何か木桶状の容器に納められてあったようにも思えた。米の量は0.3ℓ程度である。なお、この床面は図示しなかったけれども3～5cm程凹んでいた。C₂の箇所からも炭化米が出土しているが、この方は粒の揃った玄米ではなく脱稈されないものを多く含んでおり、これは感觸的ではあるが、この方は炭化が進み破砕しやすい状態になっていた。このような炭化米の在り方から内部状況を復元する時、これらの米は床下に収納されていたろうことが推察できる。その場合傍らにある3ヶのピットは何の役目をするのだろうか。そこに柱が立てられたとしてもはたして床より上に出ていたかどうか。次にBと記した範囲からは骨片が多く検出された。図では屋根材の上に範囲を描いているがもちろん逆である。2ヶの炉址をその中に納めたこの箇所はおそらく炊き場の場であったろう。ここで検出された骨片はみな火熱を受けていて直良信夫博士の鑑定によると、シカ・イノシシ及びシバイヌと推察されるものであった。

向はN-25°-Wである。壁はほぼ垂直でその高さは45cmと深い。床面は粘土を張った極めて良好な遺存状態を示していたが、これは張床でその下にすぐ第2床面が存在している。この床面も堅緻なものである。床面上の施設はピットと炉址で、ピットは20個近くがうたれていたが、支柱穴はP₁～P₄まででそれは上方の張床と下方の床面が共有している。炉は2ヶありF₁が後出する。ともに火壺である甕を埋めている。

ところで、この住居址も9号址同様火災によっての壊滅である。床と西壁の面がよく焼けている。このことから火災時に屋根が西に倒れ、そのためとくにも強い火熱を受けたかとも受けとられる。次に本址の床面は火熱を受けたのみならず、多量の炭化物を床面上に遺存させた。第54図にその略図を掲げたが、Aと記号をうった地域には屋根材と思われるカヤ類の炭化物が層をなして遺存し（第55図）、それに混って梁・桁材



第54図 樋口五反田遺跡第16号住居址内遺物配置図
(1:80)



第55図 樋口五反田遺跡第16号住居址発見屋根材

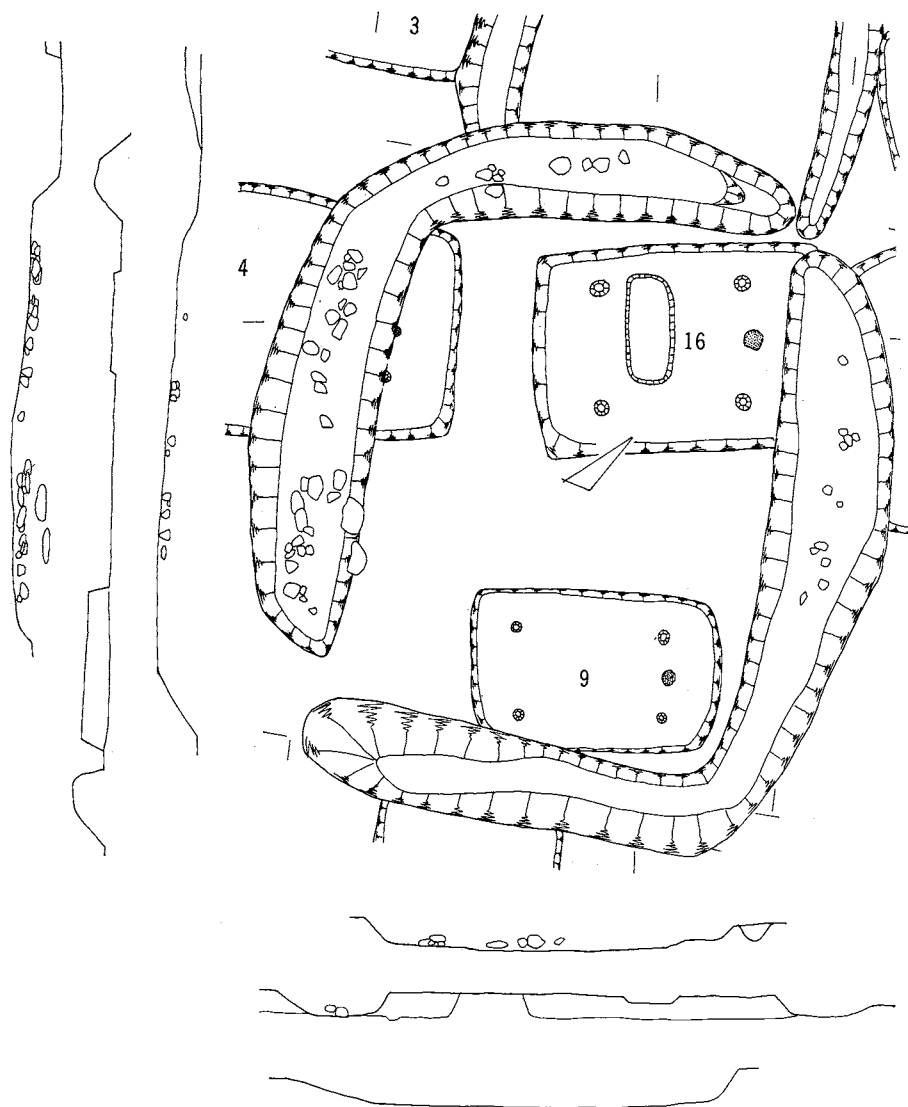
最後に遺物について、本址からは火壺以外に6点の土器が出土している。いずれも甕形土器だがうち2点は小形有脚のものである。これら6点の土器は他の住居址にみられたと同様に壁下に沿って置かれていたが、必ずしも炉址の周辺にかたまっているわけではない。北西隅に2点、南西隅に1点、南東隅に2点といった具合である。

6) 方形周溝墓

本遺跡では、弥生住居址群を切る2基の方形周溝墓が発見されている。1つの溝を共有するもので東側を1号、西側のものを2号と命名した。

(1) 第1号方形周溝墓 (第56図)

4・9・11・16号住と4ヶの弥生住居址を切っている。周溝外縁から計ると18.6×17.0mの規模となる大形の周溝墓で、長軸方向はN-61°-Wで南北方向に隅部がくるが、各溝の説明にあたっての便宜上、4号住を切っている溝を西溝、9号住を切っている溝を南溝、11・16号住を切っている溝を東溝、そして



第56図 樋口五反田遺跡第1号方形周溝墓実測図（1：200）

1号周溝墓と共有している溝を北溝とよびたい。（したがって北溝は2号周溝墓の場合南溝となる。）周溝は弥生住居址と同様なレベルから掘り込んでいて、平面形態は相対する北東隅と南西隅が開口している。南西隅開口部幅は1.1m、北東隅開口部幅は0.8mを計る。

東溝は、長さ14m・最大幅の所で3.2m・溝の深さは北端に近い所で0.5m・南端部で1.2mと溝底は南に向って傾斜している。横断面は緩やかな舟底状を呈している。溝を埋めている土層は単一で、封土の



第57図 樋口五反田遺跡第1号方形周溝墓北溝

南溝は、長さ約11m、幅は2.4mで東西幅よりやや狭い。溝の深さは平均して0.9mだが心持ち東へ向って傾いている。従って南東隅に滞水することになる。

北溝は長さ10m幅平均2.5mでその横断面は台形を呈している。溝底は西に向って傾斜しているため、北西溝の水は西溝南端にあつめられる。底部には10点近くの石塊が転落している(第57図)。

溝内の遺物としては縄文土器片がもっとも多い。それ以外の土器片は、いずれも少破片で完形土器の埋納といった痕跡は認められていない。

これらの周溝で囲繞されたテラス面は、そこに縄文・弥生合せて8ヶの住居を有していることから複雑で封土の痕跡をたずねることはできない。土壌も中央部には見出せず北にかたよったところでろうじて発見するといった次第であった。土壌は、2.9×1.3mの隅丸長方形をとるもので深さはわずか20cm程度である。16号住に掘り込んでいることもあって、その床面は軟弱で識別には困難を感じさせた。出土遺物はない。

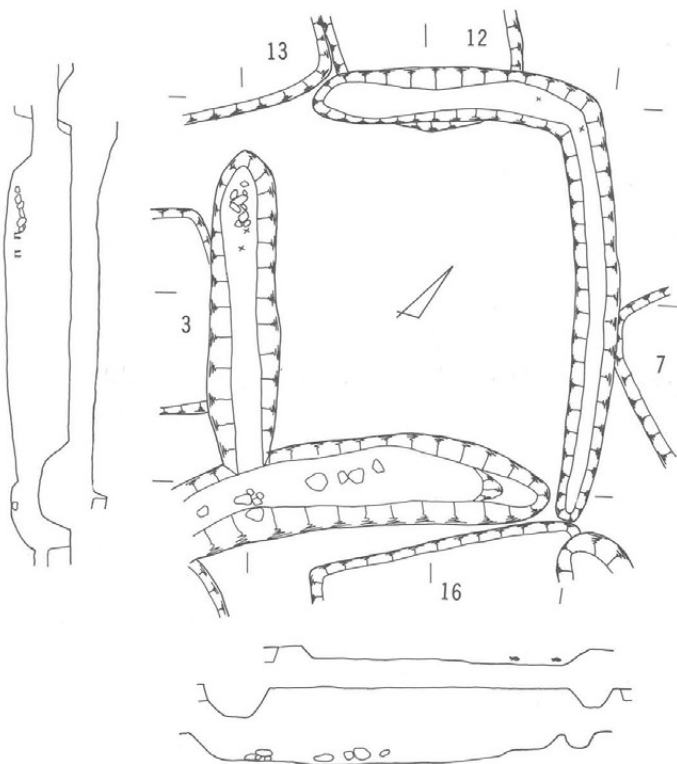
(2) 第2号方形周溝墓(第58図)

この周溝墓も3ヶの弥生住居址を切っている。ただし、1号周溝墓と違って内側のテラス面に住居址はない。規模は周溝外縁から計って10.8×12.0m、長軸方向はN-48°-Wで南北方向に隅部がくる。いささか方位は異なるがこれも便宜上、3号住を切っている溝を西溝、12号住を切る溝を北溝、7号住を削っている溝を東溝、1号周溝墓と共有している溝を南溝として説明を続けたい。溝の形態について開口部は2ヶ所にある。隅部にあることは1号周溝墓と同様だが、その位置は南東隅・北西隅と異っている。南東隅の幅は現在ではわずか20cm足らずだが、当初においては1.4mはある。北西隅の幅は1.9mである。

1号周溝墓と共有している南溝について詳細にうかがってみると東端部分において溝底にわずかな段が見受けられる。また西溝との接続面がスムーズではない。南溝自体にしても真中辺においてテラス面へくいこみすぎている。さらにその幅は他の3溝に比して広きにすぎる。これらの点から同処に存したであろう溝は1号周溝墓構築のさいに破壊されてしまったものと解することができる。東端部溝底にみられた段落はおそらくは本来の第2周溝墓南溝東端を示すものではなかったか。

流れ込みが指摘できる三角形堆土などは見られていない。溝底には人頭大の河原石が10数個転落していた。これらには規則制はなく、おそらく縄文晩期の配石址の残存石塊と思われた。

西溝は4号住を切っている。大部分は住居址床面で終わっているが最深処では若干住居址床面を削っている。溝の長さは約12m、幅は3.2mその横断面は緩やかな舟底形、そしてこの溝も南へ漸次深さを増している。溝内の土層状態は単一で溝底には30数点の大きな石塊が転落していた。



第58図 樋口五反田遺跡第2号方形
周溝墓実測図(1:200)

は50cm前後で断面を呈している。

北溝は長さ7.5m、幅は1.5mである。東溝と北溝からは石塊の検出はなかった。遺物は東端部分において、2ヶの甕形土器上半部が横につぶれて出土した。溝底上10cmの位置である。附近に12号住が存在するが、これらの甕は住居址にはともなわない。

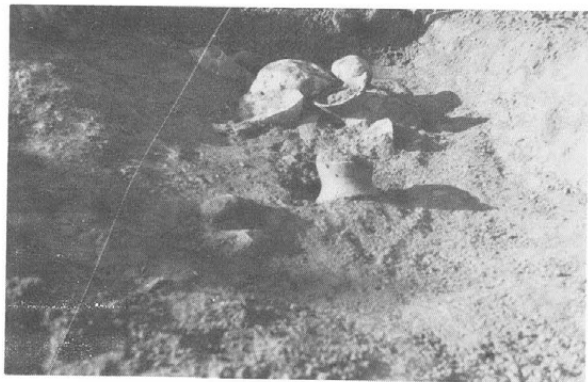
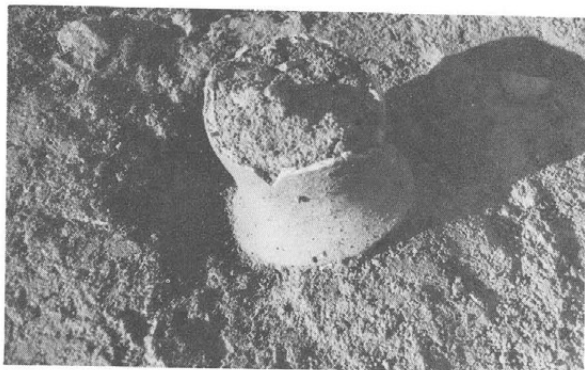
溝内のテラス面について精査したが、土壌は見られずまた他の遺構も検出されなかった。

7) 弥生時代遺構出土遺物

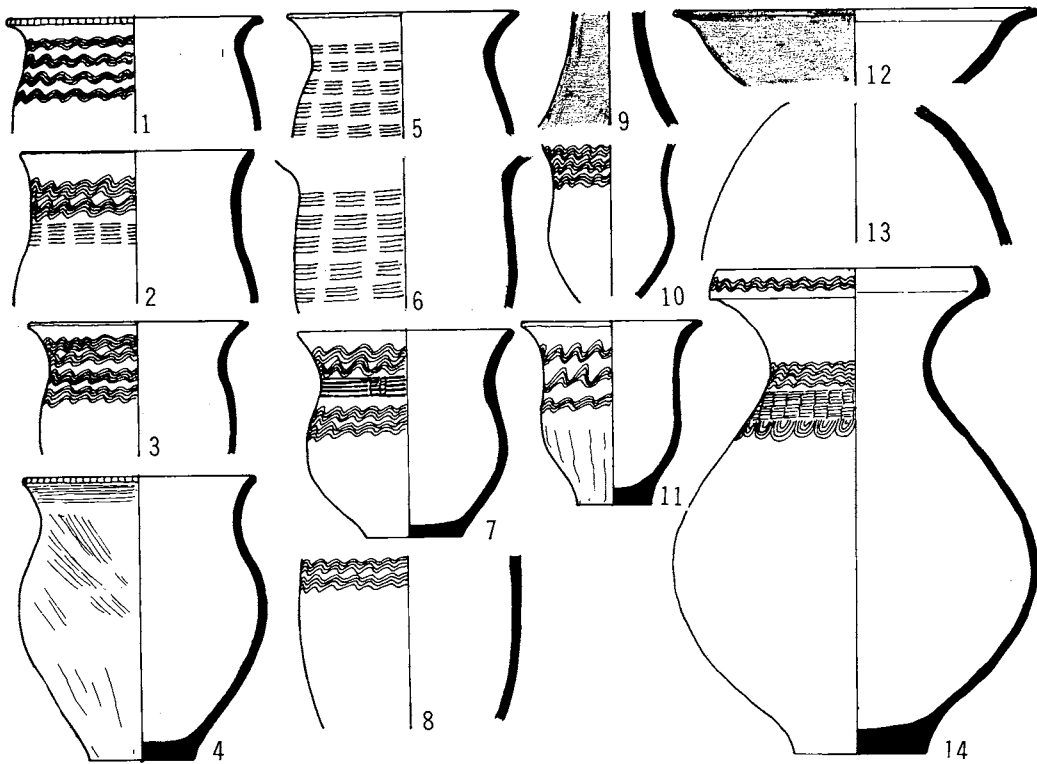
土器(第60~66図)だけで石器・金属器は1点もない。自然遺物では火災に会った住居址より出土した屋根材・建築材・炭化米、そ

西溝は長さ8.3m、幅1.9mを計る。深さは0.8m程度でその横断面は台形に近い。北端に近く10点近い石塊が溝底より20~30cm浮いた状態で発見され、それに接して2ヶの弥生式土器(甕形土器上半部)が口縁を下にして発見された(第59図)。そのレベルは3号住の床面とほぼ等しいが、同所は明らかに住居址壁外であり3号住に伴うべき遺物とは考えられない。溝内の層序について溝底より20cm前後の所に1線が引かれる。線上は黒色土で線下は黒褐色土である。甕口縁と石塊底面は黒褐色土上面に接して存在していた。

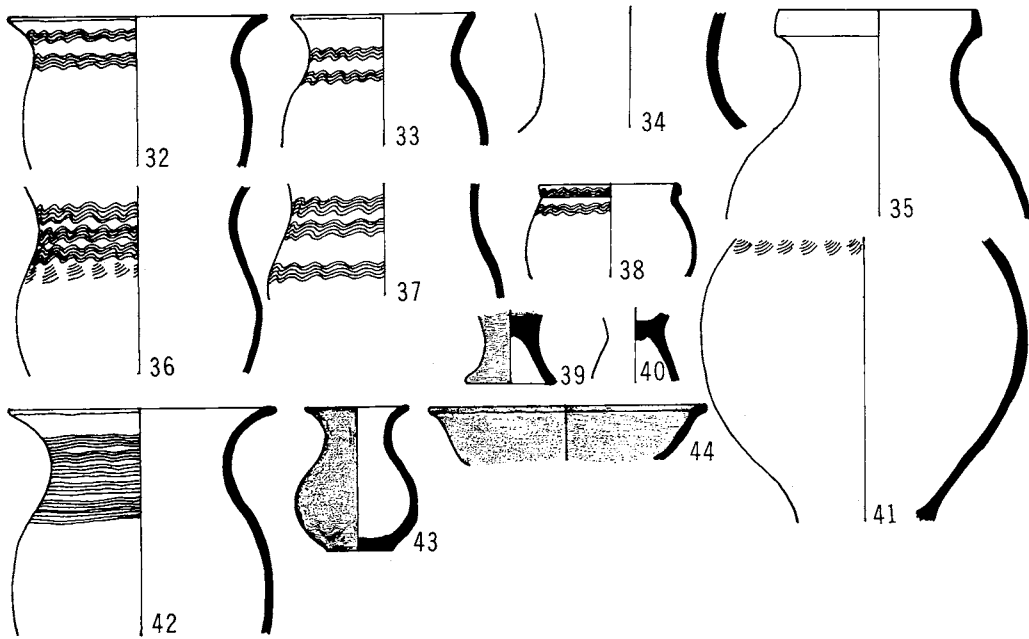
東溝は長さ11、幅1.1m、深さ



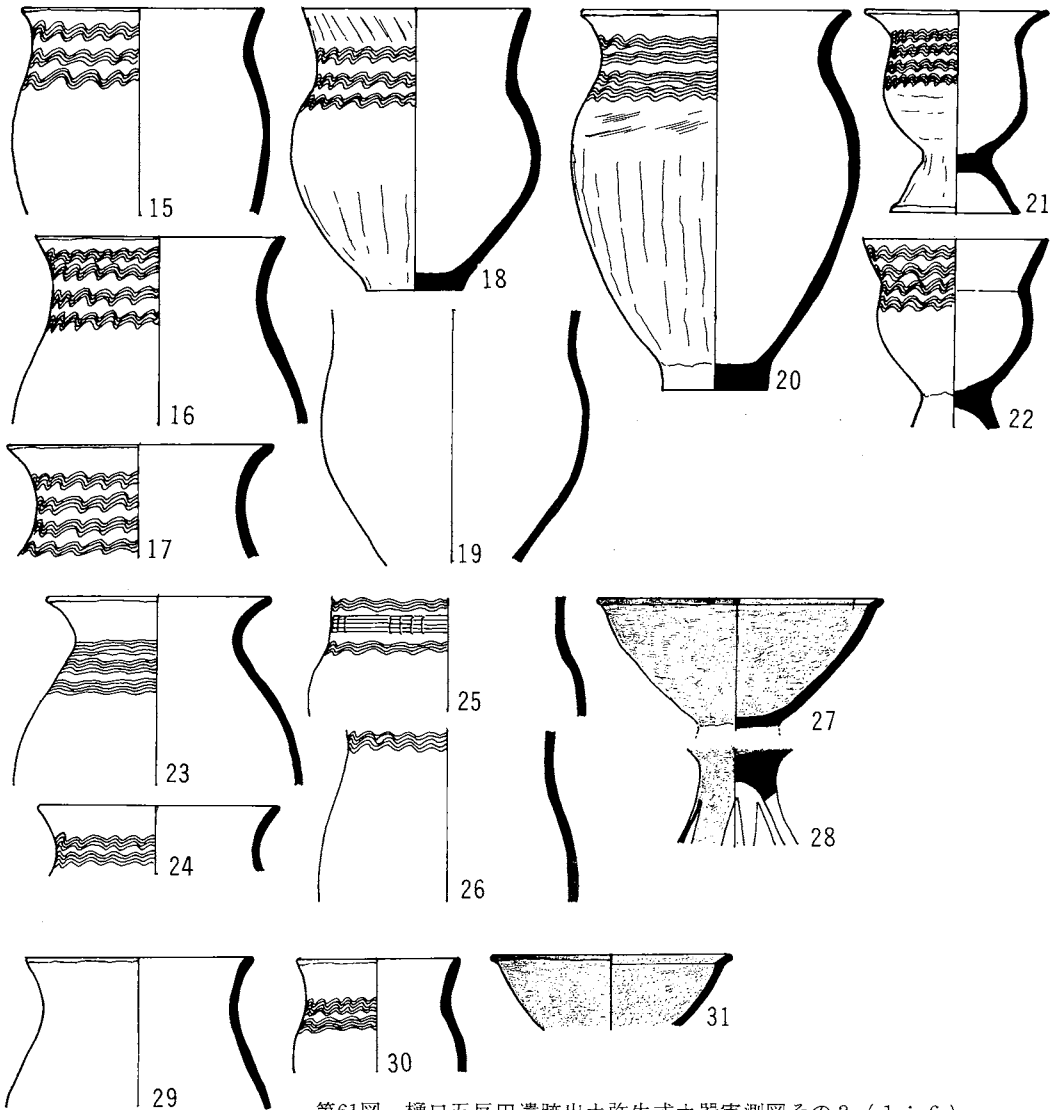
第59図 樋口五反田遺跡第2号方形周溝墓西溝内土器出土状態



第60図 樋口五反田遺跡出土弥生式土器実測図その1。(1:6) 1~14 9号住出土

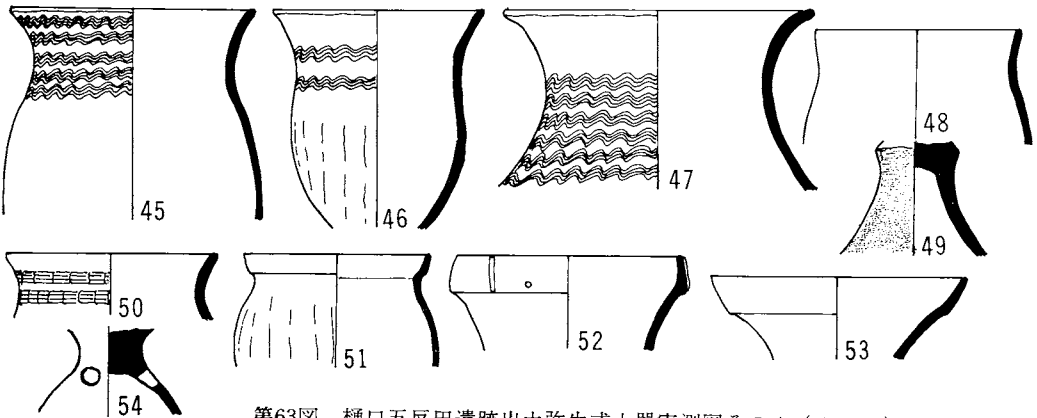


第62図 樋口五反田遺跡出土弥生式土器実測図その3 (1:6)
32~35 3号住・36~41 7号住・42~44 12号住出土



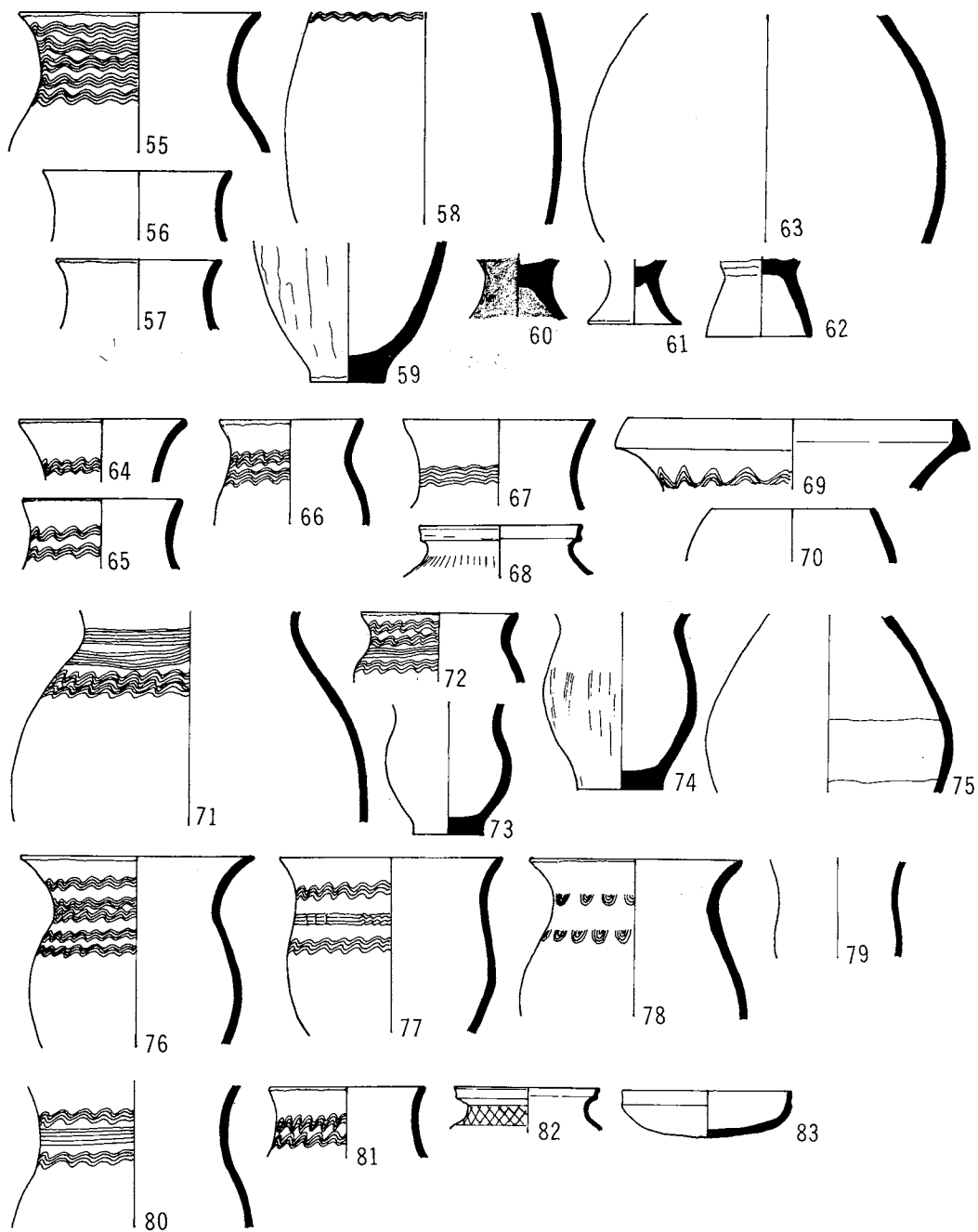
第61図 樋口五反田遺跡出土弥生式土器実測図その2 (1:6)

15~22 16号住・23~28 4号住・29~31 11号住出土

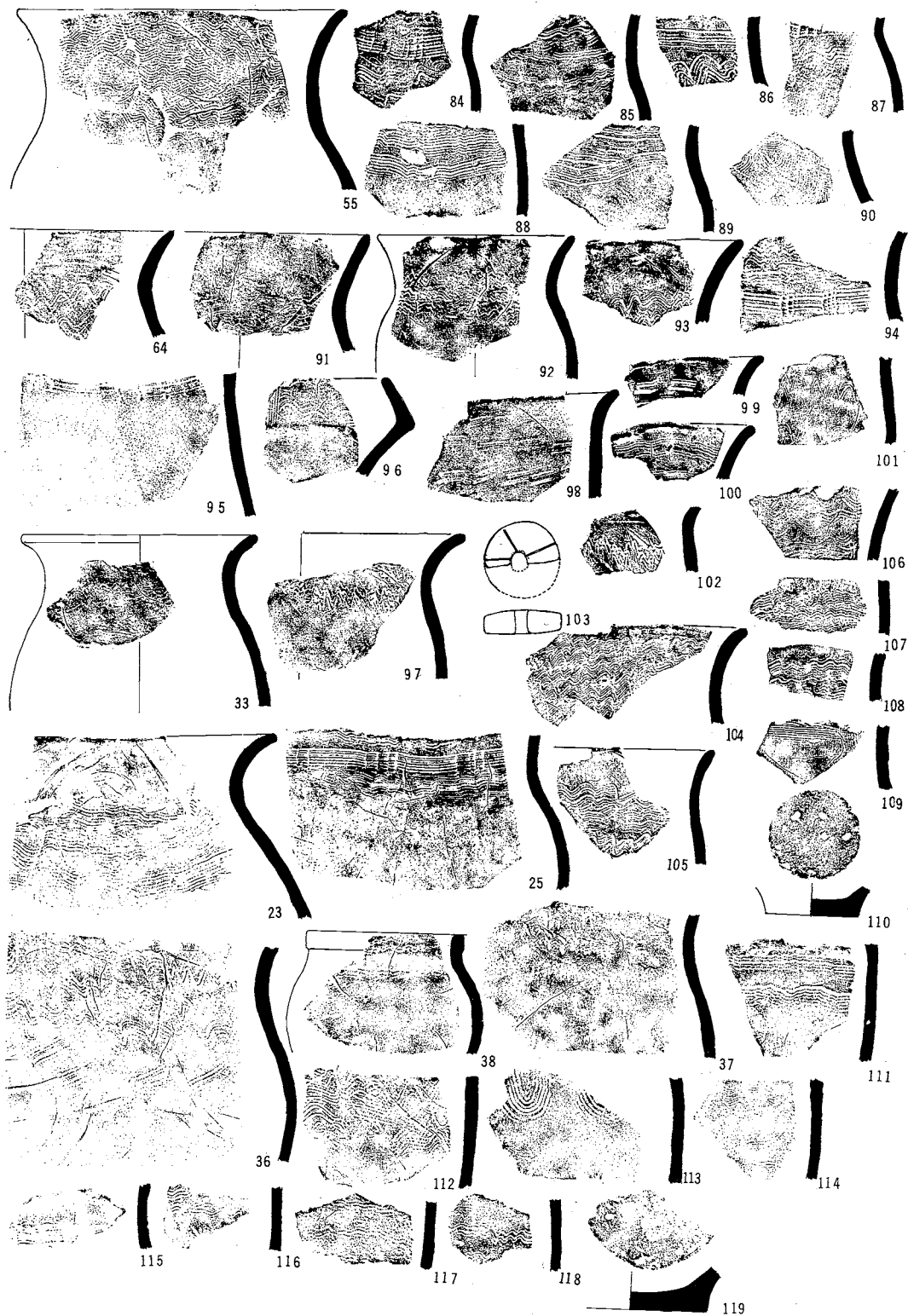


第63図 樋口五反田遺跡出土弥生式土器実測図その4 (1:6)

45~49 第2号周溝墓・50~54 第1号周溝墓出土

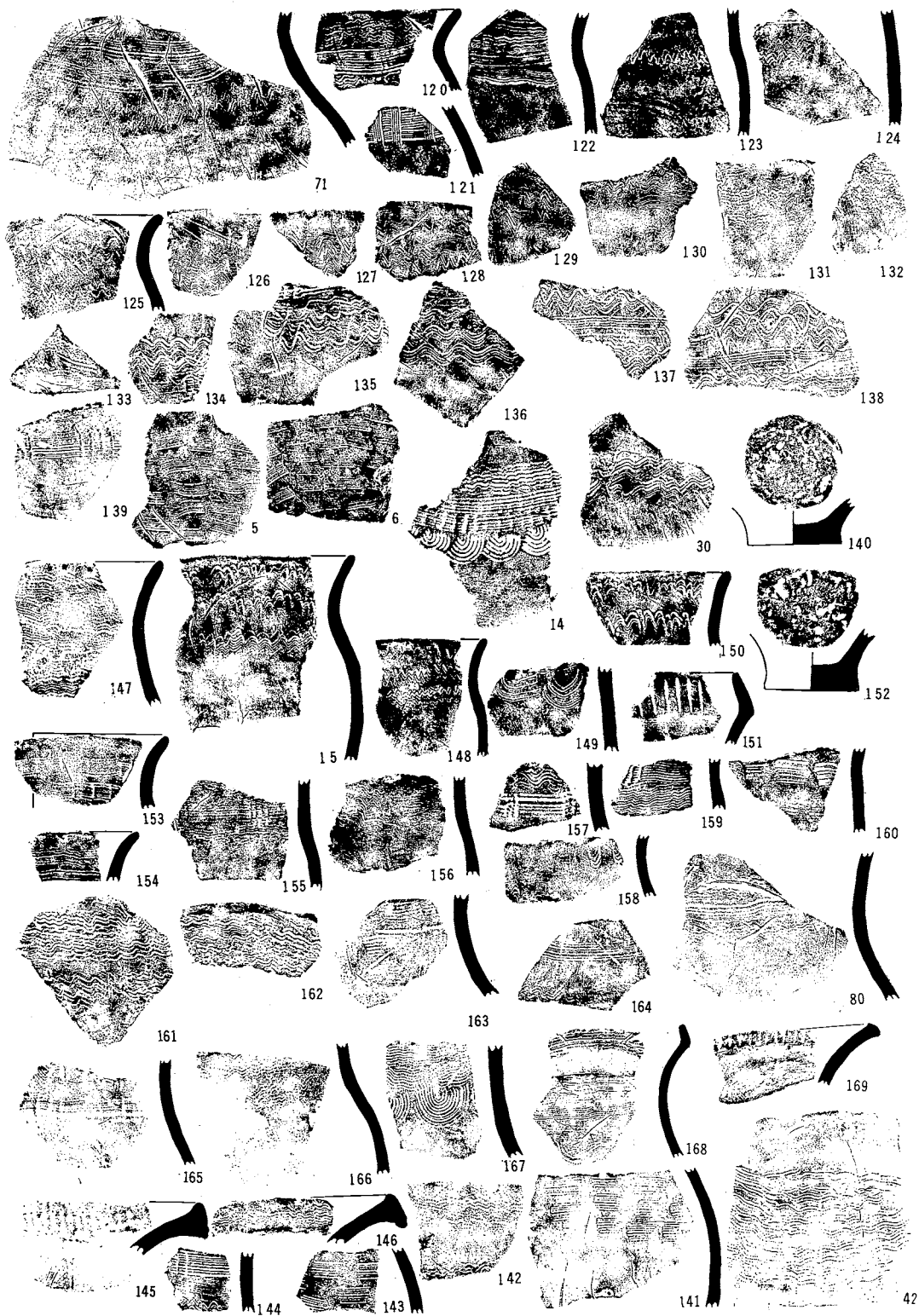


第64図 樋口五反田遺跡出土弥生式土器実測図その5 (1:6)
 53~63 1号住・64~70 2号住・71~75 8号住・76~79 13号住出土・80~83 その他



第65図 樋口五反田遺跡出土弥生式土器拓影その1 (1:4)

84~90 1号住・91~96 2号住・97~103 3号住・104~110 4号住・111~119 7号住



第66図 樋口五反田遺跡出土弥生式土器拓影その2 (1:4)
 120~124 8号住・125~139 9号住・140 11号住・141~146 12号住・147 13号住
 148~152 16号住・153~160 第1周溝墓・161~163 第2周溝墓・164~169 その他

して炉址内よりの出土である獣骨片のみである。

(1) 第1号住居址出土土器 (第64図 55~63 第65図 84~90)

55はF₂、58はF₃、63はF₁に埋められていた火壺である。55は口縁がゆるやかに伸び外面一面に櫛描波状文をうめている。58は卵形長胴の甕、63は壺形土器の上胴部でおそらく35同様の口頸が付くものと思われる。56~59・84~90までは甕の上腹部破片で櫛描波状文、同平行線文、同簾状文がめぐっている。90は円弧文重ねられていて伊那谷的な色彩が強い。60・61は高杯の脚部で内外面に赤色塗彩がみられる。62は甕の脚部で側線は心持ち外彎している。

(2) 第2号住居址出土土器 (第64図 64~70・第65図 91~96)

いずれも口縁・頸部にかけての破片である。甕形土器のうち64は炉内に埋められてあった。甕の形は口縁のゆるやかに伸び上っているもので頸部にやや乱れた櫛描波状文をめぐらしている。94・95は櫛描簾文で94は口縁いっぱい波状文が埋められている。壺形土器は69・96でL字状に立ち上った口縁部破片である。69の口縁の無文でその下方にシャープな動きの波状文がめぐらされている。96は立ち上った口縁部に櫛描波状文がめぐり、同帯はところどころで縦走する直線文で切られている。70は無頸壺形土器の破片で、68は薄手の2重口縁の甕破片である。

(3) 第3号住居址出土土器 (第62図 32~35・第65図 97~103)

34はF₂、35はF₁に埋められてあった。34はおそらく壺と思われる頸部破片で文様はない。35は口縁の立ち上った壺でこれにも文様はない。甕形土器は口縁のやや短かく外反するもので頸部に1条ないし2条の櫛描波状文をおいている。(32・33・100・102)この他に櫛描短線文を口縁下に置いたもの(98・99)も見られ、この住居址の出土土器には伊那谷の要素が強い。103は土製紡錘車破片で裏面は平坦だが表面はやや丸みを帯び放射状に数条の沈線がほられている。

(4) 第4号住居址出土土器 (第61図 23~28・第65図 104~110)

26はF₁、25はF₃、23はF₄の火壺である。甕形土器には口縁部が伸び、その外側に櫛描波状文をいっぱいにめぐらすもの(104~108)と、口縁が短かく外反し肩部の張った器形をとるもの(23)とがある。壺は109の1点のみ。高杯は27・28で杯部内外面、脚部の外側は赤色塗彩されている。ことに28の脚部には三角形の窓が6ヶうがたれている。なお、110は甕形土器の底部に靦痕が4粒印されている。

(5) 第7号住居址出土土器 (第62図 36~41・第65図 111~119)

41がF₁、36がF₂の火壺である。甕形土器は口縁が伸び上胴部がふくらむ形態で、頸部には幅広く乱れた櫛描波状文をめぐらしている。36は櫛描波状文の下方に平行短線文をななめに、113は半割同心円文をそれぞれおいている。甕のうち38の口縁はいささか特異で折り返し口縁をとり同様に細い櫛描波状文をめぐらしている。壺形土器は1点だけで(41)球形の胴部が急激に底部に向かってこける形をとり胴上部に円弧文を1列連続させている。なお、本址からも靦の圧痕ある底部が発見されている。(119)

(6) 第8号住居址出土土器 (第64図 71~75・第66図 120~124)

口縁の伸びはさほどではなく肩の張った甕が多い。頸部には櫛描平行線文や簾状文をめぐらし、その上下に櫛描波状文をおいている。これにまじって無文の甕が2点存在している(73・74)。壺形土器には、炉に用いられた75と、上胴部に櫛描平行線文を引きそれを等間隔に縦走する直線文で区切った箱清水式土器に見られる文様を付した121とがある。

(7) 第9号住居址出土土器 (第60図 1~14・第66図 125~139)

甕形土器・壺形土器・高杯形土器の3器形が存在する。甕形土器は口縁が短かく外反し肩部の張った長胴の器形をとるものと、口縁が朝顔状に緩やかに伸び上っているものにと別けられる。前者(1~4)の文様特徴は口唇部に刻目をおくこと、比較的整った櫛描波状文を数条めぐらしていること等で、後者(5~8・10・11・125~139)のそれは頸部に簾状文を走らせその上下に乱れた櫛描波状文をめぐらしていること等である。なお、後者の中には平行短線文列で上胴部をいっぱい埋めているものが含まれる。前者に含めずに2もあるいはこの類に移すべきかもしれない。壺形土器は炉に用いられた13と住居址の一隅につぶれた14のみである。14は無花果形の胴部に立ち上った口縁の付されたもので、口縁外側には細かい櫛描波状文がめぐり、頸部には櫛描波状文、同簾状文、同円弧文を重ねて置いている。高杯形土器は9・12の2点で12の杯部は口径が大きく口縁は短く折れ曲って内面に稜線を走らせている。外面にのみ赤色塗彩がなされている。9の脚部は丈高くスラッと伸びたものでこれも外面のみ塗彩されている。

(8) 第11号住居址出土土器 (61図 29~31・第66図 140)

甕は埋甕炉に用いられた無文の29と口縁の伸び頸部に2条の櫛描波状文をめぐらした30、靱痕の底部破片(140)の3点のみである。これに口縁の短く外反して内面に稜を形成している塊状杯部をなす高杯(31)が伴っている。

(9) 第12号住居址出土土器 (第62図 42~44・第66図 141~146)

甕形土器には埋甕炉に用いられていた42がほぼ完形をなすもので、頸部には幅広く動きの重い波状文をおいている。これに櫛描短線文を横走させているもの(141・143)が伴っている。壺形土器には口縁部がL字状に立ち上り胴部外側に櫛描波状文をめぐらしたもの(146)、櫛歯による刻線をおいた(145)がある。145の口縁直下には大きな動きの櫛描波状文が一条走っている。43は小形の壺で、床面より相当あがって発見された。外面は全面赤色塗彩されている。高杯形土器(44)は杯部破片で口径の大きく口縁の強く屈折した箱清水式的なもので内外面塗彩されている。

(10) 第13号住居址出土土器 (第64図 76~79・第66図 147)

5点の甕形土器が出土している。いずれも口縁部が大きく外反するもので、埋甕炉として用いられた76は頸部幅広の櫛描波状文、その上下にも同様文様をめぐらし、77は頸部に櫛描簾状文、その上下に波状文をおいている。なお、頸部の簾状文は末端で波状文に変わっている。78は頸部に半割同心円文列を2帯めぐらしている。147は口縁から胴上部まで一面に弱い櫛描波状文をおいている。79は無文の小形品である。

(11) 第16号住居址出土土器 (第61図 15~22・第66図 148~152)

完形品では甕形土器が多く、壺形土器はわずかに口頸部破片2点のみである。甕形土器は20のように長胴のものも見られるが、口縁部の緩やかに伸び上がり同処に櫛描波状文を数帯めぐらしたものが大部を占める。18は胴部の短かく肩の張ったもので、同様な器形をとる。19には文様は施されていない。21・22は同様な器形をとるも小形有脚のもので、21の脚部側線はわずかではあるが外に向ってのふくらみをみせている。壺形土器のうち、151はL字状に立ち上った厚手の口縁部破片で外側には縦の刻目が印されている。149は上胴部破片で円弧文が施されている。

(12) 第1号方形周溝墓出土土器 (第63図 50~54・第66図 153~160)

すべて破片であるが2類に大別できる。1つは頸部及び口縁部に櫛描簾状文・波状文をめぐらす甕で櫛描短線文のあるものも混じっている。もう一つは、無文の壺・甕・高杯で51は口縁の短かく立ち上った甕、52・53は口縁の立ち上った壺でその口縁には特別な文様はみられない。ただ、52には棒状浮文が一本貼られている。54は外彎する高杯脚部片で円窓が3ヶうがたれている。

(13) 第2号方形周溝墓出土土器 (第63図 45~49・第66図 161~163)

西溝内に逆位で発見された甕は46・47、北溝内につぶれて発見されたのが45・48である。47は口縁の大きく開いた大形甕で頸部には幅広く櫛描波状文を重ねている。46は口縁は開くも肩のさして張らないもので頸部に2条櫛描波状文をめぐらしている。45・48も同様な形態をとり、45は口縁から頸部までを櫛描波状文でうめている。この他破片として壺形土器片(163)と塗彩された高杯脚部片(49)がある。

(14) A区出土土器 (第66図 164~169)

配石址南方のA区からはわずかではあるが弥生式土器片の出土があった。頸部に櫛描簾状文口縁部に波状文をめぐらすものが多いが、それにまじって半割同心円文のえがかれているもの(167)、立ち上った口縁に弱い櫛描沈線文を走らせているもの(168)、肥厚した口唇部に刻目のあるもの(169)等が混在していた。なお、これは弥生式土器ではないが山茶碗の破片がC区より検出されている(第25図169)。

(15) 自然遺物

火災に会った4・9・16号住からは炭化物の出土があった。このうち標本に採集できたものは16号住関係のものだけである。その1つは建築材としてのナラ・クリなどの広葉樹がある。第2に屋根材としてのカヤがありこれらは層をなしての発見であった。第3は床面中央のC₁・C₂として囲んだ範囲から出土した炭化米である。以下、この炭化米につき2・3の問題点につき印しておきたい。

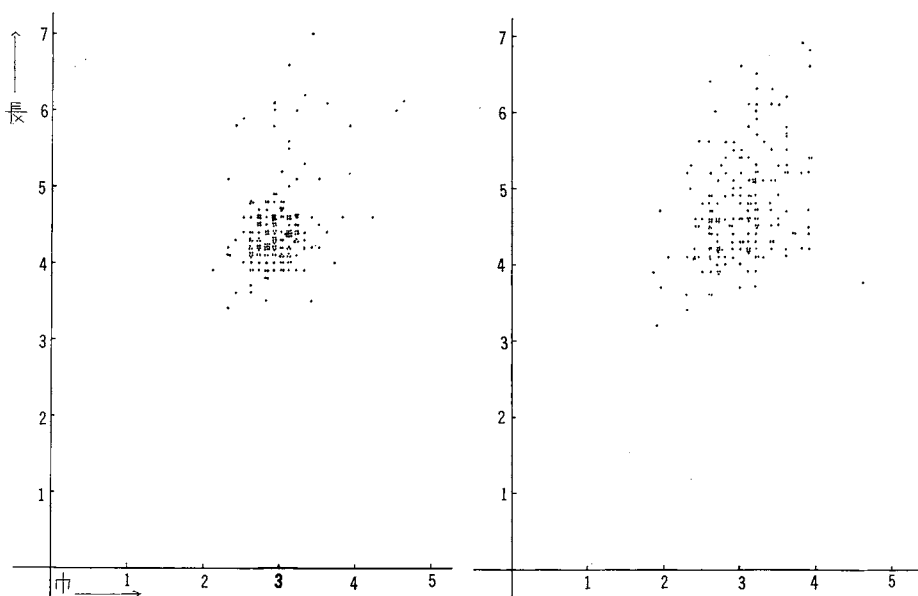
C₁・C₂から発見された量は共に0.3㍓ほどある(第5表)が、その内容については若干相異がみられた。

C₁の糲は発見時においてさして土を混ぜずかたまっておりあたかも容器に納められていたかの感を持たせた。大部が脱稈され、糲はアメ色の光沢をはなっていた(第67図)。糲殻の混入も少なく米以外の穀物もみられなかった。200粒を摘出しての計測において糲殻付は29粒の14.5%である。なお、29粒について芒の有無をいうならば、有6粒、無5粒、不明18粒であった。171粒の米について長さの平均値は4.3、



第67図 樋口五反田遺跡第16号住居址
発見炭化米 (1:4)

幅 2.9、厚 2.2 mm で、長さに対する幅 1.5 で (第68図)、品種でいうと単一な日本米の形態に属するもので、これに近似した数値をとるものは駿河沼津弥生後期の沢田遺跡から検出された90粒の平均値で、長さ4.3、幅3.0、厚さ2.1 mm、長さに対する幅1.4、長さに対する厚さは2.0となっていて、下須川種の種類名がついている。(直良信夫—日本古代農業発達史) 玄米について胚があり竜骨突起の顕著なるものが大部分であるので精白度はあまり高かったとは思われない。また、わずかではあるが胚を欠しているもの、竜骨突起の磨耗して



第68図 樋口五反田遺跡第16号住居址発見炭化米長幅関係図 (左-C₁・右-C₂)

いるものについては横に亀裂が走っている。直良博士の御教授によればかかるものについては水洗されたことをも考えて良いとのことであった。また長さに対する厚さは2.0でこの数値は完熟米であり、この点から品種の改良が相当進んでいたことが想像できる。

C₂発見の米はC₁とはいささか様相を異にしている。炭化米の総量は同じ0.3 lであるがこの方には、枝梗や籾殻が相当混っている。また、炭化の度はC₁よりもひどくて保存状態は悪い。200粒を摘出しての計測によると籾殻付は77粒で38.5%を占めている。芒の有無については有20粒、無9粒、不明48粒である。

23粒の玄米についての平均値は長さ4.7、幅2.9、厚さ2.2、長さに対する幅1.5、長さに対する厚さ2.0となりC₁のそれと品種において変りない。胚の有無についてはC₁のそれと同様であるが竜骨突起の磨耗の甚しいもの、及び横に亀裂の走ったもの等はみられていない。

獸骨片は、これも火災にあった住居址から出土しているがその検出箇所はみな炉址である。4号住からはカモシカの末節骨、16号住からはシカ・イノシシの骨片とシバイヌの四肢骨でみな火熱を受けている。

第5表 樋口五反田遺跡第16号住C₁・C₂地点出土稲実計測表

C₁地点 出土稲実計測表 (単位mm)

No.	長さ	幅	厚さ	長/幅	長/厚	備考	No.	長さ	幅	厚さ	長/幅	長/厚	備考
1	4.4	3.1	2.3	1.4	1.9	胚 有	32	4.8	2.6	2.1	1.9	2.3	竜骨突 起有
2	4.3	3.0	2.3	1.4	1.9	胚 有	33	4.0	2.5	2.0	1.6	2.0	竜骨突 起有
3	4.1	2.9	2.1	1.4	2.0	胚 有	34	4.1	3.1	2.3	1.3	1.8	竜骨突 起有
4	4.2	2.6	2.1	1.6	2.0		35	4.3	3.2	2.4	1.3	1.8	竜骨突 起有
5	3.9	2.6	2.2	1.5	1.8	胚 有	36	4.4	2.9	2.3	1.5	1.9	胚 有
6	4.4	3.2	2.2	1.4	2.0		37	4.1	3.1	2.3	1.3	1.8	胚 有
7	4.4	3.1	2.4	1.4	1.8	胚 有	38	4.3	2.9	2.3	1.5	1.8	胚 有
8	4.3	3.0	2.6	1.4	1.7	粃殻付	39	4.2	2.9	2.3	1.4	1.8	胚 有
9	4.6	2.9	2.3	1.6	2.0	粃殻付	40	4.2	2.8	2.3	1.5	1.8	横胚 有
10	4.6	3.0	2.6	1.5	1.8	小枝梗有	41	4.1	2.6	2.3	1.6	1.8	表面丸付
11	4.7	3.0	1.9	1.6	2.3	粃殻付	42	6.1	2.9	2.4	2.1	2.5	芒無小枝梗付
12	3.9	3.0	2.2	1.3	1.8	胚 有	43	4.3	2.6	2.0	1.7	2.2	横胚 付
13	4.2	2.9	2.2	1.4	1.9	胚 有	44	6.2	3.3	2.3	1.9	2.7	芒無小枝梗付
14	4.0	3.1	2.3	1.3	1.7	胚 有	45	4.5	2.8	2.3	1.6	1.9	胚 有
15	6.0	2.9	2.5	2.0	2.4	芒無小枝梗付	46	3.7	2.6	2.2	1.4	1.7	竜骨突 起有
16	4.6	3.0	2.2	1.5	2.0	横胚 有	47	5.3	3.3	2.2	1.6	2.4	芒有 裂有
17	3.9	2.9	2.5	1.3	1.6	表面丸有	48	6.1	3.6	2.3	1.7	2.7	粃殻付 小枝梗付
18	5.1	3.2	2.4	1.6	2.1	芒無小枝梗付	49	4.1	2.3	2.1	1.8	2.0	竜骨突 起有
19	7.0	3.4	2.9	2.0	2.4	芒有小枝梗付	50	5.2	3.0	2.0	1.7	2.6	小枝梗付 粃殻付
20	4.6	2.9	2.0	1.6	2.3	胚 有	51	5.1	2.3	2.1	2.2	2.4	芒不明小枝梗付
21	3.9	3.2	2.4	1.2	1.6	竜骨突 起有	52	4.2	3.1	2.1	1.4	2.0	横胚 有
22	6.0	3.2	2.7	1.9	2.2	粃殻付 起有	53	4.0	2.7	2.0	1.5	2.0	竜骨突 起有
23	3.9	3.0	2.3	1.3	1.7	竜骨突 起有	54	4.1	2.6	2.1	1.6	2.0	横胚 有
24	4.2	3.0	2.1	1.4	2.0	竜骨突 起有	55	3.9	2.8	2.1	1.4	1.9	横胚 有
25	4.3	2.9	2.4	1.5	1.8	竜骨突 起有	56	4.6	3.1	2.6	1.5	1.8	竜骨突 起有
26	4.4	2.9	2.1	1.5	2.1	胚 有	57	4.0	3.7	2.2	1.1	1.8	胚 有
27	4.4	2.6	2.0	1.7	2.2	胚 有	58	4.2	2.8	2.1	1.5	2.0	表面丸有
28	4.2	2.6	2.1	1.6	2.0	胚 有	59	4.2	3.4	2.2	1.2	1.9	胚 有
29	3.5	3.4	2.4	1.0	1.5	胚 有	60	4.7	3.0	2.1	1.6	2.2	横胚 有
30	4.5	2.9	2.0	1.6	2.3	横胚 有	61	4.2	2.8	2.1	1.5	2.0	胚 有
31	3.9	2.7	2.1	1.4	1.9	胚 有	62	4.3	2.4	2.4	1.8	1.8	胚 有

No.	長さ	幅	厚さ	長/幅	長/厚	備考	No.	長さ	幅	厚さ	長/幅	長/厚	備考
63	4.6	3.4	2.1	1.4	2.2	竜骨突起有	98	4.0	3.1	2.2	1.3	1.8	表面丸胚有
64	4.4	3.1	2.1	1.4	2.1	胚有	99	4.5	2.7	2.1	1.7	2.1	表面丸胚有
65	4.0	2.6	1.8	1.5	2.2	竜骨突起有	100	4.1	2.6	2.1	1.6	2.0	竜骨突起有
66	4.3	3.2	2.2	1.3	2.0	胚有	101	3.9	3.3	2.6	2.2	1.5	表面丸胚有
67	4.0	3.0	2.1	1.3	1.9	竜骨突起有	102	4.8	2.9	2.2	1.7	2.2	竜骨突起有
68	4.1	2.8	2.1	1.4	2.0	竜骨突起有	103	4.6	3.1	2.4	1.5	1.9	竜骨突起有
69	4.3	2.9	2.1	1.5	2.0	胚有	104	4.6	2.9	2.2	1.6	2.1	表面丸胚有
70	4.4	2.7	2.0	1.6	2.2	胚有	105	4.6	2.9	1.9	1.6	2.4	表面丸胚有
71	4.1	3.1	2.2	1.3	1.9	胚有	106	4.6	2.9	2.1	1.6	2.2	竜骨突起有
72	4.6	2.7	2.1	1.7	2.2	胚有	107	4.1	3.0	2.9	1.4	1.4	胚有
73	5.0	3.1	2.2	1.6	2.3	胚有	108	4.9	2.9	2.1	1.7	2.3	竜骨突起有
74	4.3	3.2	2.4	1.3	1.8	胚有	109	4.4	3.1	2.2	1.4	2.0	表面丸胚有
75	4.4	3.2	2.1	1.4	2.1	竜骨突起有	110	4.6	3.2	2.4	1.4	1.9	表面丸胚有
76	4.4	3.3	2.2	1.3	2.0	胚有	111						
77	4.2	2.8	2.5	1.5	1.7	胚有	112	4.6	2.5	2.1	1.8	2.2	表面丸胚有
78	4.9	2.9	2.2	1.7	2.2	芒不明小枝梗	113	4.6	3.1	2.1	1.5	2.2	表面丸胚無
79	4.4	2.5	2.0	1.8	2.2	表面磨胚有	114	4.5	2.7	2.0	1.7	2.3	表面丸胚無
80	4.0	3.0	2.1	1.3	1.9	横亀裂表面丸	115	4.5	2.7	1.9	1.7	2.3	竜骨突起有
81	4.6	3.2	2.4	1.4	1.9	一部穀殻付表面丸胚有	116	5.9	2.5	2.3	2.4	2.6	芒有穀殻付小枝梗
82	4.3	2.9	2.1	1.5	2.0	表面丸胚有	117	4.4	3.1	2.1	1.4	2.1	竜骨突起有
83	6.0	4.5	2.3	1.3	1.3	小枝梗胚有	118	4.3	2.7	2.1	1.6	2.1	表面丸胚有
84	4.2	3.3	2.3	1.3	1.8	竜骨突起有	119	4.1	3.0	2.1	1.4	2.0	表面丸胚有
85	4.2	2.8	1.9	1.5	2.2	胚有	120	6.1	4.6	2.6	1.3	2.3	芒有穀殻付小枝梗
86	3.9	3.1	2.3	1.3	1.7	胚有	121	4.4	3.1	2.1	1.4	2.1	竜骨突起有
87	4.1	2.9	2.1	1.4	2.0	竜骨突起有	122	5.8	3.9	2.1	1.5	2.8	芒不明穀殻付小枝梗
88	4.6	3.2	2.4	1.4	1.9	表面丸胚有	123	5.6	3.1	2.4	1.8	2.3	穀殻付小枝梗
89	4.8	2.8	2.0	1.7	2.4	表面丸胚有	124	4.6	2.8	2.4	1.6	1.9	表面丸胚有
90	4.2	2.7	2.0	1.6	2.1	表面丸胚無	125	4.5	2.7	1.9	1.7	2.4	表面丸胚有
91	4.8	3.0	2.4	1.6	2.0	穀殻付	126	5.5	3.1	2.4	1.8	2.3	小枝梗
92	4.8	2.6	2.1	1.8	2.3	表面丸亀裂	127	3.5	2.8	2.4	1.3	1.5	表面丸胚不明
93	4.4	2.8	2.3	1.6	1.9	表面丸胚有	128	4.2	2.7	2.1	1.6	2.0	表面丸胚有
94	4.0	2.8	2.1	1.4	1.9	竜骨突起有	129	5.8	2.4	3.4	2.4	1.7	芒無穀殻付小枝梗
95	4.7	2.7	2.3	1.7	2.4	表面丸胚有	130	4.3	2.6	2.2	1.7	2.0	表面丸胚有
96	4.5	2.9	2.1	1.6	2.1	表面丸亀裂	131	4.4	3.1	1.9	1.4	2.3	竜骨突起有
97	4.3	2.9	2.3	1.5	1.9	表面丸胚有	132	3.8	2.8	1.9	1.4	2.0	表面丸胚有

No.	長さ	幅	厚さ	長/幅	長/厚	備考	No.	長さ	幅	厚さ	長/幅	長/厚	備考
133	4.3	2.9	2.0	1.5	2.2	表面丸胚有横亀裂	168	4.4	2.9	2.1	1.5	2.1	竜骨突起無
134	3.6	2.4	1.9	1.5	1.9	表面丸胚有横亀裂	169	4.4	2.8	2.2	1.6	2.0	表面丸胚有
135	4.6	2.7	2.2	1.7	2.1	表面丸胚有	170	4.4	3.2	2.4	1.4	1.8	表面丸胚有
136	4.6	2.7	2.4	1.7	1.9	表面丸胚有	171	3.9	2.1	1.8	1.9	2.2	表面丸胚有
137	4.1	2.6	2.1	1.6	2.0	竜骨突起有	172	4.4	3.1	1.8	1.4	2.4	竜骨突起無
138	4.1	3.0	2.0	1.4	2.1	竜骨突起無	173	4.2	2.9	2.6	1.4	1.5	表面丸胚無
139	4.1	2.7	2.2	1.5	1.9	表面丸胚無	174	4.1	2.8	2.2	1.5	1.9	表面丸胚有
140	4.2	2.8	2.6	1.5	1.6	竜骨突起有	175	3.9	2.6	2.0	1.5	2.0	胚有表面裂
141	4.3	2.9	2.5	1.5	1.7	表面丸胚無	176	4.4	3.1	2.1	1.4	2.1	表面丸胚無
142	4.8	2.8	1.8	1.7	1.6	竜骨突起有	177	4.2	2.9	2.2	1.4	1.9	著竜骨突起有
143	4.4	3.0	2.2	1.5	2.0	竜骨突起有横亀裂	178	4.2	2.7	2.1	1.6	2.0	表面丸胚有
144	4.1	3.2	2.2	1.3	1.9	竜骨突起有横亀裂一部胚有	179	3.9	2.8	2.1	1.4	1.9	竜骨突起有
145	4.3	2.7	2.1	1.6	2.1	表面丸胚有	180	4.2	2.8	2.2	1.5	1.9	著竜骨突起有
146	4.4	2.8	2.2	1.6	2.0	表面丸胚有	181	4.5	3.1	2.3	1.5	2.0	表面丸胚有
147	4.5	3.2	2.6	1.5	1.7	竜骨突起有	182	4.1	2.6	1.9	1.6	2.2	表面丸胚有
148	4.2	2.3	2.3	1.8	1.8	竜骨突起有	183	4.8	2.6	2.0	1.8	2.4	胚有表面裂
149	4.3	2.6	2.0	1.7	2.2	表面丸胚有横亀裂	184	4.2	2.8	2.8	1.5	1.5	竜骨突起有
150	4.2	2.6	2.0	1.6	2.1	胚有表面丸裂	185	4.3	2.9	2.2	1.5	2.0	表面丸胚有
151	4.6	2.6	2.1	1.8	2.2	表面丸胚有横亀裂	186	4.4	2.6	1.9	1.7	2.3	竜骨突起有
152	4.2	2.7	2.3	1.6	1.8	著竜骨突起有	187	4.3	2.7	2.1	1.6	2.0	竜骨突起無
153	4.2	3.1	2.4	1.4	1.8	表面丸胚有	188	5.8	2.9	1.8	2.0	3.2	表面丸胚有
154	4.2	3.5	2.6	1.2	1.6	著竜骨突起有	189	4.6	2.7	2.2	1.7	2.1	表面丸胚有
155	6.6	3.1	3.2	2.1	2.1	芒有粃殼付小枝梗	190	4.6	4.2	2.2	1.1	2.1	表面丸胚有
156	4.2	2.8	2.1	1.5	2.0	表面丸胚有	191	4.1	2.3	1.7	1.8	2.4	表面丸胚有
157	4.8	3.0	2.4	1.6	2.0	胚有表面丸裂	192	4.6	3.8	2.6	1.2	1.8	胚有表面裂
158	4.3	3.3	2.3	1.3	1.9	著竜骨突起有	193	3.6	2.6	2.1	1.4	1.7	表面丸胚有
159	4.2	3.0	2.1	1.4	2.0	著竜骨突起有	194	4.2	2.7	2.1	1.6	2.0	表面丸胚有
160	4.5	3.5	2.3	1.3	2.0	著竜骨突起有	195	4.1	2.7	2.2	1.5	1.9	表面丸胚有
161	4.2	2.9	2.2	1.4	1.9	表面丸胚有	196	4.2	2.8	2.2	1.5	1.9	表面丸胚有
162	5.1	3.5	2.7	1.5	1.9	芒不明粃殼付小枝梗	197	3.8	2.8	2.1	1.4	1.8	竜骨突起有
163	4.5	2.9	2.4	1.6	1.9	表面丸胚有	198	4.7	2.8	2.2	1.7	2.1	表面丸胚有
164	4.5	3.2	2.3	1.4	2.0	表面丸胚有	199	4.2	3.1	2.1	1.4	2.0	胚有表面裂
165	3.4	2.3	1.8	1.5	1.9	著竜骨突起有	200	4.0	2.9	2.1	1.6	1.9	表面丸胚無
166	4.6	3.1	2.2	1.5	2.1	表面丸胚有	平均值	4.4	2.9	2.2	1.5	2.0	
167	4.4	3.6	2.5	1.2	1.8	著竜骨突起有							

C₂地点 出土稲実計測表 (単位mm)

No.	長さ	幅	厚さ	長/幅	長/厚	備考	No.	長さ	幅	厚さ	長/幅	長/厚	備考
1	4.6	2.8	1.9	1.6	2.4	竜骨突起有 胚有	34	5.2	3.9	2.5	1.3	2.1	粃殻付
2	4.1	2.7	2.3	1.5	1.8	竜骨突起有 表面丸胚有	35	4.5	2.6	2.1	1.7	2.1	竜骨突起有 胚有
3	3.7	2.2	2.1	1.7	1.8	竜骨突起有 胚有	36	5.2	3.2	2.2	1.6	2.4	粃殻一部
4	5.6	2.7	2.0	2.1	2.8	竜骨突起有 胚有	37	5.1	3.4	2.6	1.5	2.0	粃殻付
5	5.3	3.0	2.5	1.8	2.1	表面丸胚有	38	4.7	2.6	1.9	1.8	2.5	竜骨突起有 胚有
6	4.7	2.2	2.1	2.2	2.2	表面丸胚無	39	4.2	2.7	2.0	1.6	2.1	竜骨突起有 胚有
7	4.1	3.1	2.6	1.3	1.6	表面丸胚不明	40	5.0	3.0	2.2	1.7	2.3	表面丸胚有
8	4.2	3.1	2.4	1.4	1.8	胚有 芒無粃	41	4.1	2.8	2.2	1.5	1.9	表面丸胚有
9	6.0	2.9	2.1	2.1	2.9	竜骨突起有 胚有	42	4.2	3.1	2.6	1.4	1.6	表面丸胚有 表面丸胚有
10	5.6	2.7	2.0	2.1	2.8	竜骨突起有 胚有	43	4.2	2.6	2.2	1.6	1.9	表面丸胚有 表面丸胚有
11	4.1	2.3	2.2	1.8	1.9	竜骨突起有 胚有	44	3.7	3.0	2.2	1.2	1.7	粃殻付
12	3.9	2.1	1.7	1.9	2.3	表面丸胚有 竜骨突起有 胚有	45	4.1	2.6	2.0	1.6	2.1	竜骨突起有 胚有
13	4.5	2.7	2.2	1.7	2.0	竜骨突起有 胚有	46	4.8	2.5	2.5	1.9	1.9	竜骨突起有 胚有
14	5.1	3.4	2.4	1.5	2.1	粃殻付	47	4.2	2.4	2.1	1.8	2.0	表面丸胚有 表面丸胚有
15	4.5	3.1	2.0	1.5	2.3	横亀裂付 粃殻付 小枝梗	48	5.4	3.0	2.2	1.8	2.5	表面丸胚有 表面丸胚有
16	5.0	2.6	2.3	1.9	2.2	横亀裂付 粃殻付 小枝梗	49	4.2	2.4	2.4	1.8	1.8	表面丸胚有
17	5.1	3.7	2.5	1.4	2.0	粃殻付	50	4.2	2.9	2.5	1.4	1.7	竜骨突起有 胚有
18	5.3	2.6	2.0	2.0	2.7	芒無粃殻付 小枝梗	51	4.5	2.4	2.3	1.9	2.0	粃殻付
19	6.1	3.4	3.6	1.8	1.7	芒有粃殻付 小枝梗	52	4.6	2.6	2.2	1.8	2.1	表面丸胚有
20	5.4	3.1	2.1	1.7	2.6	胚有 粃殻付 胚有	53	4.9	2.6	2.2	1.9	2.2	粃殻一部 竜骨突起有 胚有
21	4.6	3.2	2.8	1.4	1.6	粃殻一部 胚有	54	4.2	2.7	2.1	1.6	2.0	竜骨突起有 胚有
22	5.4	3.9	2.2	1.4	2.5	粃殻一部 胚有	55	3.9	2.5	2.2	1.6	1.8	表面丸胚有
23	5.3	3.5	2.3	1.5	2.3	粃殻一部 小枝梗	56	4.1	2.4	2.2	1.8	1.9	表面丸胚有
24	4.0	3.0	2.2	1.3	1.8	粃殻一部 胚有	57	4.8	3.0	1.8	1.6	2.7	芒不明小枝梗 粃殻付
25	5.5	3.0	2.4	1.8	2.3	粃殻一部	58	4.6	3.5	2.5	1.3	1.9	竜骨突起有 胚有
26	4.0	2.7	2.1	1.5	1.9	竜骨突起有 胚有	59	4.5	3.5	2.2	1.3	2.0	竜骨突起有 胚有
27	6.1	3.5	2.5	1.7	2.4	芒有粃殻付 小枝梗	60	4.2	3.1	2.4	1.4	1.8	竜骨突起有 胚有
28	4.2	2.8	2.0	1.5	2.1	表面丸胚有 竜骨突起有 胚有	61	6.2	3.6	2.7	1.7	2.3	竜骨突起有 胚有
29	4.2	2.6	1.8	1.6	2.3	表面丸胚有 竜骨突起有 胚有	62	4.8	3.2	2.2	1.5	2.2	粃殻付
30	5.4	3.0	2.4	1.8	2.3	粃殻付	63	3.6	2.3	1.7	1.6	2.1	表面丸胚有
31	4.9	2.9	2.4	1.7	2.0	竜骨突起有 胚有	64	4.5	2.9	2.3	1.6	2.0	
32	4.6	2.5	2.1	1.8	2.2	胚有 粃殻付	65	3.4	2.3	1.6	1.5	2.1	表面丸胚有
33	4.8	3.4	2.6	1.4	1.8	粃殻一部 小枝梗	66	4.5	2.6	2.1	1.7	2.1	表面丸胚有

No.	長さ	幅	厚さ	長/幅	長/厚	備考	No.	長さ	幅	厚さ	長/幅	長/厚	備考
67	5.5	4.6	2.1	1.2	2.6	芒有靱殻付 小枝梗不明	102	4.4	3.2	2.1	1.4	2.1	表面丸胚有 靱殻付梗 小枝梗
68	4.3	2.9	2.1	1.5	2.0	表面丸胚有 靱殻付梗 不明	103	5.7	3.6	2.2	1.6	2.6	芒有靱殻付 小枝梗枝梗 不明
69	4.6	3.9	2.2	1.2	2.1	靱殻突起 不明	104	5.9	3.2	2.6	1.8	2.3	芒有靱殻付 小枝梗枝梗 不明
70	4.5	3.2	2.1	1.4	2.1	靱殻突起 不明	105	4.7	3.6	2.8	1.3	1.7	芒有靱殻付 小枝梗枝梗 不明
71	5.3	3.2	2.2	1.7	2.4	芒有靱殻付 小枝梗枝梗 不明	106	4.3	3.0	2.2	1.4	2.0	表面丸胚有 表面丸胚有 芒無靱殻付 小枝梗不明
72	3.9	2.7	2.3	1.4	1.7	靱殻突起 不明	107	5.2	2.6	2.1	2.0	2.5	表面丸胚有 表面丸胚有 芒無靱殻付 小枝梗不明
73	4.2	3.1	2.4	1.4	1.8	靱殻突起 不明	108	3.6	2.6	1.9	1.4	1.9	表面丸胚有 靱殻突起
74	4.9	3.1	2.5	1.6	2.0	靱殻一部胚有	109	4.2	3.1	1.9	1.4	2.2	靱殻一部
75	4.2	3.8	2.4	1.1	1.8	靱殻突起 不明	110	5.7	3.2	2.1	1.8	2.7	靱殻一部
76	3.7	3.2	2.2	1.2	1.7	靱殻突起 不明	111	6.3	3.4	3.1	1.9	2.0	芒有靱殻付 小枝梗枝梗 不明
77	4.4	2.6	2.1	1.8	2.1	靱殻突起 不明	112	6.8	3.9	2.6	1.7	2.6	芒有靱殻付 小枝梗枝梗 不明
78	4.7	2.7	2.6	1.7	1.8	靱殻一部	113	4.9	3.2	2.5	1.5	2.0	靱殻突起 不明
79	6.6	3.9	2.2	1.7	3.0	芒無靱殻付 小枝梗枝梗 不明	114	5.5	3.4	2.2	1.6	2.5	靱殻付梗 小枝梗
80	4.6	2.6	2.5	1.8	1.8	靱殻突起 不明	115	6.9	3.8	2.4	1.8	2.9	芒有靱殻付 小枝梗枝梗 不明
81	4.6	3.2	2.4	1.4	1.9	靱殻突起 不明	116	5.6	3.3	2.1	1.7	2.7	芒有靱殻付 小枝梗枝梗 不明
82	4.5	3.4	2.2	1.3	2.0	靱殻突起 不明	117	5.1	2.9	2.4	1.8	2.1	芒無靱殻付 小枝梗枝梗 不明
83	4.6	3.0	2.0	1.5	2.3	靱殻突起 不明	118	4.8	2.7	2.3	1.8	2.1	靱殻突起 不明
84	4.5	2.9	2.2	1.6	2.0	靱殻突起 不明	119	4.9	3.5	2.6	1.4	1.9	表面丸胚有 胚有靱殻一部 靱殻突起
85	4.4	3.7	2.8	1.2	1.6	靱殻突起 不明	120	4.6	2.7	2.1	1.7	2.2	表面丸胚有 胚有靱殻一部 靱殻突起
86	6.1	3.4	2.5	1.8	2.4	芒無靱殻付 小枝梗枝梗 不明	121	3.2	1.9	1.5	1.7	2.1	表面丸胚有 胚有靱殻一部 靱殻突起
87	4.1	2.9	2.4	1.4	1.7	靱殻突起 不明	122	4.9	3.1	2.5	1.6	2.0	表面丸胚有 胚有靱殻一部 靱殻突起
88	6.0	3.2	2.6	1.9	2.2	芒有靱殻付	123	4.6	2.4	2.2	1.9	2.1	表面丸胚有 胚有靱殻一部 靱殻突起
89	5.5	3.6	3.2	1.5	1.7	芒有靱殻付 小枝梗枝梗 不明	124	5.1	2.7	2.2	1.9	2.3	表面丸胚有 胚有靱殻一部 靱殻突起
90	6.3	3.2	2.4	2.0	2.6	芒有靱殻付 小枝梗枝梗 不明	125	4.2	3.0	2.0	1.4	2.1	靱殻突起 不明
91	3.9	3.1	2.1	1.3	1.9	胚有靱殻一部 靱殻突起	126	4.8	3.1	2.1	1.5	2.3	靱殻付梗 小枝梗
92	5.5	2.9	2.4	1.9	2.3	靱殻付梗 小枝梗	127	4.4	3.7	2.3	1.2	1.9	靱殻突起 不明
93	5.0	2.9	2.3	1.7	2.2	靱殻付梗 小枝梗	128	4.5	2.6	2.2	1.7	2.0	靱殻一部胚有 靱殻突起
94	4.2	2.9	2.0	1.4	2.1	靱殻突起 不明	129	4.6	3.1	2.2	1.5	2.1	靱殻突起 不明
95	4.6	3.2	2.4	1.4	1.9	靱殻突起 不明	130	4.4	2.9	2.3	1.5	1.9	靱殻突起 不明
96	4.2	3.4	2.2	1.2	1.9	靱殻突起 不明	131	4.3	3.0	2.2	1.4	2.0	靱殻突起 不明
97	4.4	2.6	2.2	1.7	2.0	靱殻突起 不明	132	4.6	3.1	2.1	1.5	2.2	胚有靱殻一部 靱殻突起
98	3.9	2.6	2.1	1.5	1.9	靱殻突起 不明	133	3.9	2.7	2.4	1.4	1.6	表面丸胚有
99	6.2	3.6	2.2	1.7	2.8	芒有靱殻付 小枝梗枝梗 不明	134	4.2	3.9	2.2	1.1	1.9	表面丸胚有
100	4.9	2.8	2.1	1.8	2.3	靱殻突起	135	4.4	3.9	2.1	1.1	2.1	表面丸胚有
101	4.7	3.4	2.1	1.4	2.2	靱殻突起 不明	136	4.1	2.6	2.1	1.6	2.0	表面丸胚有

No.	長さ	幅	厚さ	長/幅	長/厚	備考	No.	長さ	幅	厚さ	長/幅	長/厚	備考
137	4.8	3.1	1.8	1.5	2.7	竜骨突起有	172	4.6	2.9	2.7	1.6	1.7	表面丸胚有
138	4.3	3.4	2.5	1.3	1.7	靱殻一部有	173	5.4	3.1	2.4	1.7	2.3	靱殻小枝付
139	4.4	2.7	2.0	1.6	2.2	竜骨突起有	174	4.2	3.2	2.3	1.3	1.8	竜骨突起有
140	4.2	3.1	2.3	1.4	1.8	竜胚突起有	175	4.7	2.6	2.1	1.8	2.2	表面丸胚有
141	4.4	3.1	2.7	1.4	1.6	竜骨突起有	176	4.5	3.2	2.3	1.4	2.0	表面丸胚有
142	4.1	3.2	2.2	1.3	1.9	竜骨突起有	177	4.5	3.2	2.5	1.4	1.8	竜骨突起有
143	5.1	3.3	2.4	1.5	2.1	芒不明靱殻付	178	5.6	2.9	2.1	1.9	2.7	靱殻付
144	5.2	3.6	2.4	1.4	2.2	靱殻小枝付	179	4.2	2.7	2.3	1.6	1.8	竜骨突起有
145	5.2	2.3	2.4	2.3	2.2	靱殻小枝付	180	5.2	3.8	2.0	1.4	2.6	表面丸胚有
146	5.1	3.1	2.4	1.6	2.1	靱殻一部有	181	5.2	2.8	2.4	1.9	2.2	竜骨突起有
147	5.6	2.8	2.3	2.0	2.4	靱殻小枝付	182	6.1	3.1	2.2	2.0	2.8	芒無靱殻付
148	6.5	3.2	2.7	2.0	2.4	芒有靱殻付	183	4.7	3.2	2.2	1.5	2.1	竜骨突起有
149	4.6	2.7	2.0	1.7	2.3	表面丸胚有	184	5.2	3.6	2.5	1.4	2.1	芒不明靱殻付
150	5.4	3.6	1.8	1.5	3.0	芒有靱殻付	185	5.2	3.2	2.3	1.6	2.3	芒無靱殻付
151	4.3	2.7	2.3	1.6	1.9	表面丸胚有	186	4.7	3.2	2.2	1.5	2.1	竜骨突起有
152	4.1	3.6	2.4	1.1	1.7	竜骨突起有	187	5.8	3.1	2.2	1.9	2.6	靱殻小枝有
153	4.6	2.6	2.2	1.8	2.1	竜骨突起有	188	4.1	2.4	2.3	1.7	1.8	表面丸胚有
154	4.1	3.3	2.7	1.2	1.5	表面丸胚有	189	4.2	2.7	2.0	1.6	2.1	竜骨突起有
155	6.4	2.6	3.2	2.5	2.0	芒有靱殻付	190	3.9	3.2	2.3	1.2	1.7	竜骨突起有
156	3.6	2.6	2.1	1.4	1.7	丸胚有	191	4.1	3.2	2.1	1.3	2.0	竜骨突起有
157	5.7	3.6	2.4	1.6	2.4	芒有靱殻付	192	5.1	3.2	2.2	1.6	2.3	芒不明靱殻付
158	5.1	3.2	1.7	1.6	3.0	竜骨突起有	193	4.0	2.8	2.1	1.4	1.9	表面丸胚有
159	4.2	3.6	2.8	1.2	1.5	竜骨突起有	194	4.1	2.3	2.1	1.8	2.0	胚有
160	5.2	3.0	2.7	1.7	1.9	芒有靱殻付	195	4.6	2.7	2.0	1.7	2.3	竜骨突起有
161	5.8	3.6	2.8	1.6	2.1	芒有靱殻付	196	4.3	3.2	2.2	1.3	1.9	竜骨突起有
162	6.6	3.0	2.6	2.2	2.4	芒有靱殻付	197	4.3	3.4	2.4	1.3	1.8	表面丸胚有
163	4.9	2.6	2.1	1.9	2.3	靱殻一部有	198	4.6	3.1	2.5	1.5	1.8	胚有
164	4.6	2.8	2.3	1.6	2.0	竜骨突起有	199	4.6	2.6	2.3	1.8	2.0	表面丸胚無
165	4.7	3.1	2.3	1.5	2.0	竜骨突起有	200	3.9	2.7	1.9	1.4	2.1	表面丸胚無
166	5.1	3.2	2.9	1.6	1.8	竜骨突起有							胚有
167	4.7	3.9	2.7	1.2	1.7	竜骨突起有	平均值	5.0	3.1	2.3	1.6	2.1	
168	4.3	3.1	2.1	1.4	2.0	竜骨突起有							
169	5.4	3.9	2.1	1.4	2.6	表面丸胚有							
170	4.9	3.0	2.2	1.6	2.2	表面丸胚有							
171	4.7	2.6	3.1	1.8	1.5	竜骨突起有							

IV 越道・平出山の神遺跡

1 平出地籍遺跡の考古学的意義

伊那谷と諏訪盆地とをへだてる伊那山脈は、守屋山以北においてその高さを減じてはいるがそれでも最高所は1100m台を数えている。この山脈は諏訪盆地に向っては急峻であるが、伊那谷に面しては緩やかで幾条かの河川が谷を開析しそれに伴って交通路と集落を発達させている。その交通路の一つに諏訪市豊田の有賀から有賀峠を越え、上野を通り辰野町平出へ出る県道諏訪-辰野線が上野川の流れに沿って通じている。辰野町の樋口から荒神山をぬけ辰野町東縁を通る中央道は、平出地籍で県道諏訪-辰野線を交叉する。そのために同処に存在する越道・平出山の神の2遺跡が急拠発掘調査される運びとなった。

このように平出地籍の2遺跡は伊那と諏訪を結ぶ交通路にかかる遺跡であるので、やや冗漫の気味はあるもこの地域の交通路の消長に付き概略を記しておきたい。

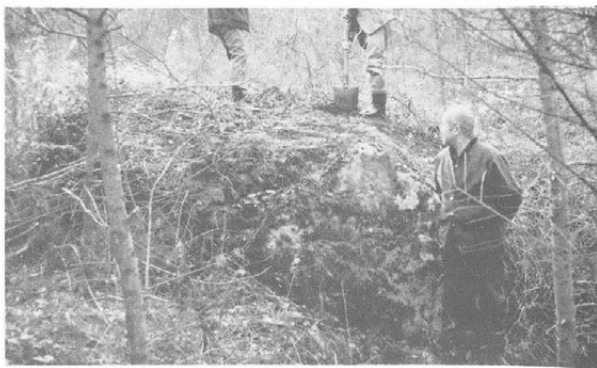
辰野地区から諏訪へ越す峠路は北より神塚峠・矢垂峠（小坂峠）・有賀峠・馬越峠・北峠（唐松峠）・中峠・真志野峠で、このうち先が合わさって諏訪湖盆の沖積地に降りているのが小坂峠・有賀峠・真志野峠である。この三つの山道のうち守屋山に近づくほど標高は高くなり従って峻路となっている。（第69図）。



第69図 有賀峠及び周辺鞍部位置図



第70図 有賀峠頂上積石塚



第71図 有賀峠畳石

これらの峠のうち、交通の古代よりみられた事が文献にあらわれているものは、有賀峠で、文献記載は中世だが、当然に古代に遡る諏訪神社上社の大御立座神事において、神使が外県の地へ巡行に出かけて行く際に用いられている。また、その南に走る北峠と中峠は諏訪側で一本にまとまり、北真志野へおりが、このうち中峠は沢底川を遡り、青木沢を経て峠を越えている。沢底について、「朝日村史」によれば「佐瀬子」「さちこ」「さえこ」「させ子」などと説明され、或は「諏訪底ではないかとの説も記載されている。この地が中世を通じて小坂城や花岡城に拠っていた小坂氏の所領であったとすれば、この峠も早くから開けていたと考えてよい。次にとりあげられる資料は信濃御牧中に記載のある平井亘（平出）牧である。「吾妻鑑」に見えている28牧中には諏訪社領内として、宮所・立野と共に記されているので、その詳細地域はさておき、諏訪に接した天竜川以東の地であることは確実にその中でも有賀峠で結ばれる平出地籍あたりに焦点が当てられてしまう。既に知られている考古学資料について、まず、鳥居竜蔵博士著「先史及び原史時代の上伊那」の遺跡発見地名表で祝部（弥生・土師器・須恵器を含む）出土遺跡を拾うと、有賀峠口の上野川、そして沢底川の出口、つまり平出の地域のみに限られてしまい、考えさせられるものがある。山の神・丸山・越道・宮ノ前・堀ノ内・和合などの遺跡がそれである。現在、三村兼清氏の作成された遺跡分布地図(第10図)によっても平出地籍には異常とも言える多くの遺跡が記されている。

時代をやや遡らせて古墳の様相はどうだろう。辰野町竜東地域にあって古墳は、平出地籍以外には築かれていない。御陵塚と御射宮司古墳と呼ばれる2基の横穴式石室内蔵円墳で、御射宮司古墳からは後期古墳通有の遺物に混って頭椎柄頭の太刀が発見されている。頭椎太刀は、6・7世紀代の東日本の古墳から多く発見される儀刀的な太刀で、それも大和朝廷と密接な伴造氏族と関係があるらしい。したがって、いささか想像を逞ましゅうすれば7世紀代に、古墳を築き得るほどの豪族は平出地籍にしか存在せず、その豪族は、大和朝廷の伴造的氏族であった。そして諏訪側における、諏訪神社上社周辺古墳に同時期のものが多く、更に、頭椎太刀が数点も出土していることを考えれば、御射宮司古墳や御陵塚を築いた氏族は、諏訪側の氏族と共通する性格をそなえていたと言うことになり、その間に政治、経済、文化の回廊があったことが思われる。そして、その通路には、辰野側からはのぼりやすい有賀峠越えの、現在の県道、諏訪－辰野線が当てられる。

では、この古路の古代からの利用を物語る直接的な資料はないものだろうか。その第1の証拠として有賀峠の頂上南方には大きな塚が築かれている（第70図）

かつて、ピットをあけて調査したところ拳大から人頭大までの石塊がつまっていた。斯様な石塚は、下伊那郡阿智村の神坂峠にも、北佐久郡立科町の雨境峠、同軽井沢町入山峠にも築かれ、宋銭の出土が知られている。宋銭と言えば有賀峠においても、頂上から100m北方に離れた仙妙院塚で古銭が出土した。諏訪市豊田の笠原楚雪氏の言によると道路拡張の折、積石塚中より何貫匁というほどの多量の銅銭が出たとのことである。「穴あき銭」ということだけで、宋銭か、明銭か、或いは寛永通宝かは判らないが、注意すべきことである。

次に、諏訪側を下っては急坂な道の傍に信仰と伝承のある峠路石がある。七石信仰とは頂上まで3kmの間にある七石を巡拝するもので、つい近年まで行われていた。麓の方からあげていくと、江音寺の上手の小川の中に「のぼり鮒」と「くだり鮒」がある。これは諏訪湖中の巨魚が或はのぼり或は下る様をあらわしているといわれる。次に500mのぼったところに「夜泣石」があった。以前に石材として破碎されてし

まったが、その石屋はその故か変死をとげた。この夜泣石は、梅雨時などにはシクシクと泣き、気味が悪く、その為迂回して通った旅人があったとも伝えられている。次は「女陰石」、現在は半欠になっている。大正時代まで、諏訪の花柳界では、これにお詣りをせねば売れっ子になれないと言われていた由で、諏訪藩一村限村地図（江戸中期）には変体仮名文字でこの石名が書かれているがよく読めない。

諏訪側から見て左方にある守屋山は修験道で有名であるが、そこへ通ずる権現道路の横に「信玄駒留石」があった。4 mもある巨石で、信玄の突いた槍先の痕が歴然であったという。これも割られて20ヶの建置石になってしまった。

6番目の石である「畳石」（第71図）は磐座で、「行者石」とも呼ばれ、出羽三山より御神符を仰ぐとき、必ずこの石に鎮座させてから、お山へ祭祀したのだという。

最後の石は「イボ石」で、今では脇道になっている旧道の土手にある。イボやアバタの集塊岩で、子供のイボ取り石として信仰を集めた。「イボ、イボ一本橋渡れ」と唱えてイボをこの石に触れさせたと言う。

このように、七石には、あまりにも卑俗的な伝承しかまとわりついておらず「畳石」をのぞいて神の憑り代（岩座）的な色彩はさして認められない。この石の付近より土師器、須恵器などの遺物は拾得されていないが、とも角、七つの石が、最近まで、意識されていたと言う事だけは注意しなければならない。雨境峠付近にも、鍵引石、鳴石などの伝承をこめた巨石があるので、同様に取りあつかっていかなければならない。

最後に、有賀峠の諏訪側の入口である諏訪市豊田の有賀区支所に保管されている剣形石製模造品と有孔玉器について、有賀区には女躰垣外（女帝垣外）または女帝塚とよばれ、昔より神聖視されてきたアジュール地域があるが、その東方の「十二の後」から採集された。

これらの石器は、東日本では、祭祀遺跡より出土し、長野県内にあつては、峠神祭祀の場に多い。

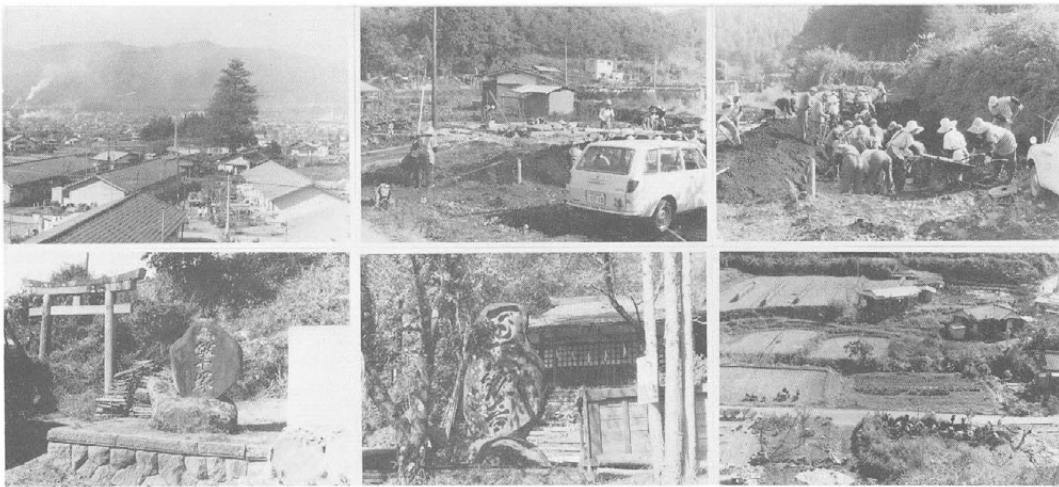
以上の諸点から、有賀峠越しの利用は文献では大きく古代まで、考古学からは、古墳時代中期頃まで遡らせることができた。ただし辰野側においては目下のところ古墳などの傍証的な資料しかない。それだけに、峠ののぼり口である、平出地籍の二遺跡の調査は特に重視されたのである。

2 越道遺跡

越道遺跡と平出山の神遺跡は平出地籍も東方の有賀峠にかかる谷口に當まれている遺跡で、越道遺跡は、谷に向って右側の、越道山の山麓にある。具体的に言うならば、県道諏訪－辰野線と越道隧道をぬけて沢底へ通ずる道路との分岐点に越道団地があるが遺跡はその真東の高処にある。遺跡の存在は早くから知られ、鳥居竜蔵博士の「先史及び原史時代の上伊那」にとりあげられ、以後、昭和30年の「信濃考古総覧」にも、また「朝日村史」にも記載されている。遺跡の主体は越道山南麓の緩傾斜面で、中央道通過地点はやや中心よりはずれている。発掘前の状態はここに西沢立次氏の住宅があった。同氏が住宅を建てられたのは、8年ほど以前のことで、それまでは水田であった。発掘はこの西沢氏住宅跡に、巾3 m長さ20 mのトレンチを設定した（第72図B地点）。山際であり且つ水田を潰しての宅地造成をしたところなので、地層は攪乱していて、地表下1 mを越えてようやく地山に達した（第73図）。この間遺構の検出はなく、僅かに第74図に掲げた数点の遺物を得たにとどまった。1は径4.5 cmの石製円盤、厚さは0.7 cmを計る。



第72図 越道・平出山の神遺跡地形図 (1:2500) A-平出山の神・B-越道遺跡



第73図 越道・平出山の神遺跡景観

2は縄文押捺ある前期に属する土器片、3・4は弥生後期の櫛描波状文ある小破片である。

3 平出山の神遺跡

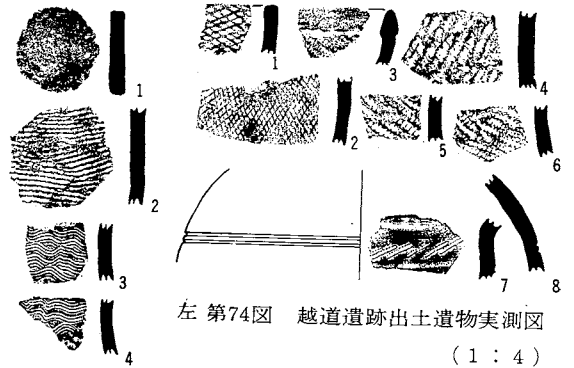
平出山の神は、越道遺跡と上野川を界して対する谷の北側にある。県道に沿ったせまいテラスで、北側にはすぐ山がせまり、しかも岩層が露呈して絶壁をなしている。これらの山頂には、山の神、秋葉様などがまつられており遺跡の東には御嶽様の祠がある。この山麓はもと区有地で、壁土取などで開鑿され、その際に遺物の出土があった。このため、早くから遺跡として知られ「先史及び原史時代の上伊那」には朝

日村山の神遺物の埋没地として記述されている。

「この地は上野川の谷の北壁、急傾斜地に生じた崖地で到底住居址と考えることはできない。しかも、埋没状態には層序なく、点々散在し、深度も一定しない。これに加うるに、発見土器は殆んど小破片である。これら種々なる事情を総合して考えるに、埋没地の上方に住居地があったのが、天変地異に遭遇して下方に滑り落ちたるか、流水のため押流されて来てこの地点に堆積したるか、いずれかで、とにかく、自然の作用で遺跡が移動したるものと推考される。」

また、中央道用地内埋蔵文化財包蔵地カードには「原田遺跡の東にあたり第六保育園を上野川に沿って50m登ると山の神社がある。その入口の鳥居の左側で標高750mの地籍である。古墳の形は無い。場所も確かでない葺石が散乱していると思われるところはある。過去鳥居博士に発見されたという直刀二本、轡二組、直刀破片、須恵器破片はどこにあるか不明である。」と記されてある。

発掘箇所はすでに転居された、2住宅の跡であったが、造成時の鋤平が甚しく、結局、県道に臨んだところに1本トレンチを設定したとこどまった。(第72図A)このトレンチの層序は長芋の栽培がされていたこともあって耕土は深く、ところどころにローム塊が混在するなど攪乱しており、地山であるローム面も凹凸が甚しく、遺構の存在は見られなかった。出土遺物は第75図にのせた8点で、1・2は縄文早期の格子目状押型文で、胎土、焼成は良い。3～6は縄文前期におかれる縄文、7は青白色を呈する胎土良好な須恵器片、8は中世に下る四耳壺の肩部破片である。



左 第74図 越道遺跡出土遺物実測図
(1:4)

右 第75図 平出山の神遺跡出土遺物実測図
(1:4)

V 結 語

伊那谷の北口に位置し、中信・南信の接点となる辰野町地区は両地域文化が錯綜して、ことに竜東地区は伊那山脈・天竜川を介して諏訪地方とも交渉があり、信濃の古代文化考究上注意しなければならない所である。中央道はこの竜東地区の真中を突き切って岡谷・諏訪方面へ向う。このため用地内の埋蔵文化財調査として、本年は樋口と平出の3遺跡が発掘されたが、これらの遺跡は上記の問題点解明の鍵ともなるべき意義、価値のあるものであり、その結果は報文に記す成果となってあらわれた。今後は遺跡、遺構、遺物についての研究が進められてこととなるが、とりあえず発掘に携わってきた者たちがいただいた問題の1・2点を揚げ、本報告の小括としたい。

樋口五反田遺跡からは、縄文中期住居址・晩期配石址、弥生後期住居址及び方形周溝墓と時期を異にする遺構の露呈があった。

縄文中期の住居址はすでに上面を破壊され、床面も明瞭に検出することはできなかったが6号・14号・18号址にみられた炉の形状は中期中葉を下るものではなかった。土器では中期初頭の単一型式が10号址に発見され、諏訪の踊場や梨久保遺跡のものに匹敵する。15号址の土器様相もまた興味深い。炉に用いられていた土器とその横に直立して埋められていた土器との関係はどう解釈したらよいのだろうか。埋襲の土器形と下胴部をめぐる隆帯は八ヶ岳山麓の土器に似ているが、口縁と下胴部をうめている沈線文様は中部山岳地方ではみられない。

石器については、8ヶも住居址が露呈した割には僅少でそれも打製石斧と凹石が大部分を占めている。石匙が一点、石鏃は見られないという現象は中期初頭から中葉にかけての土器が主体を占めている本遺跡の場合問題が残る。

縄文晩期の配石址は16ヶを数えたが、この数値も長野県内にあつては多い方で、木曾・大桑村の大明神遺跡でもこれほどの発見はなかった。配石址は、内側に凹みを持っていて人一人を仰臥屈葬させるに足る規模を持っている。しかし、中から発見された骨片は人骨ではなく火熱を受けた鹿角であったことは予想外であった。鹿角は赤味を帯びていて、おそらくは赤土の上で焼かれたものだろうとは直良博士の御教示であったが、この凹みの中からは焼土・木炭の出土はなく、床面に火熱の痕跡はなかった。また、1・2の凹み内から石鏃が出たのみで土器片の出土も僅少であった。この配石址の性格はどう考えたらよいのだろうか。墓壙とすべきか、供犠の場とすべきか。周辺から出た土器について、上伊那郡内で2プレートにわたる晩期土器資料はこの遺跡がはじめてである。出土のありかたからほぼ単一型式として取り扱ってよろしいかと思われる。

弥生後期の住居址がかくも多く露呈した所は上伊那郡内ではさほど多くない。古くは駒ヶ根・狐久保、本年に入って箕輪・北城、伊那・和手遺跡そしてこの辰野樋口五反田遺跡程度であろう。プランに特異な点はみられぬが、大きな規模のものが幾つかあった。また、半ば以上の竪穴が改築・増築されていたことも興味深い。炉は伊那谷特有の埋襲炉であったが、その位置について2個以上の炉址が検出される場合、

同一箇所にて設けられる例と、90° 変えて築かれている場合とがあり、家の主軸方向の時期によって変化したことがうかがわれた。壁は、深いものが多かった。このような場合に入り口部は容易にわかるものと期待していたが、1例も確認できなかった。また、火災による住居址の幾つか見られたことは限られた時期における同時性を示すものとしてありがたかった。

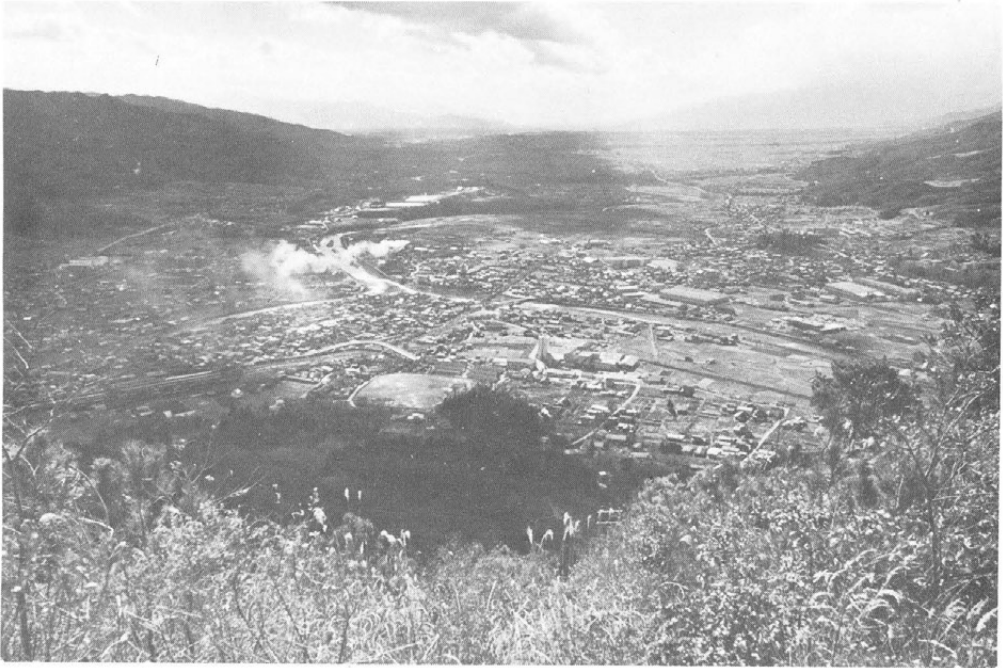
出土土器については伊那谷の様相3に対して伊那谷以外の様相7といったところだろうか。伊那谷の編年では後期前半に来るらしいが、2型式ほどの細別ができそうだ。セットについて中島式など甕が主でわずかに壺が加わる程度であったが、ここでは相当に高坏が出土している。形態は箱清水式で赤色塗彩されている。

出土遺物の中で重要なものに本遺跡の場合自然遺物があげられる。火災に会った住居址や幾つかの炉址内から資料が得られたが、16号址出土の炭化米は良好な遺存状態を示して出土のあり方とともに関係者を驚喜させた。動物ではシカ・イノシシは当然と考えられたがカモシカの存在は意外であり改めて後期弥生人の食生活につき考えさせられた。

まだ研究の歴史が浅い方形周溝墓について現在はまだ資料の増加を待っている段階にある。伊那谷に限って言うならば飯田・石子原で3、同・滝沢井尻1、同・権現堂1、同・きつみ1、高森・出原西部1、同・角田原2、松川・的場2、喬木・埴牛原2と下伊那だけで13基が発見されているが、上伊那では本遺跡の2基が最初で本遺跡での発掘が契機となって今後上伊那地区でも発見例は増加するものと思われる。

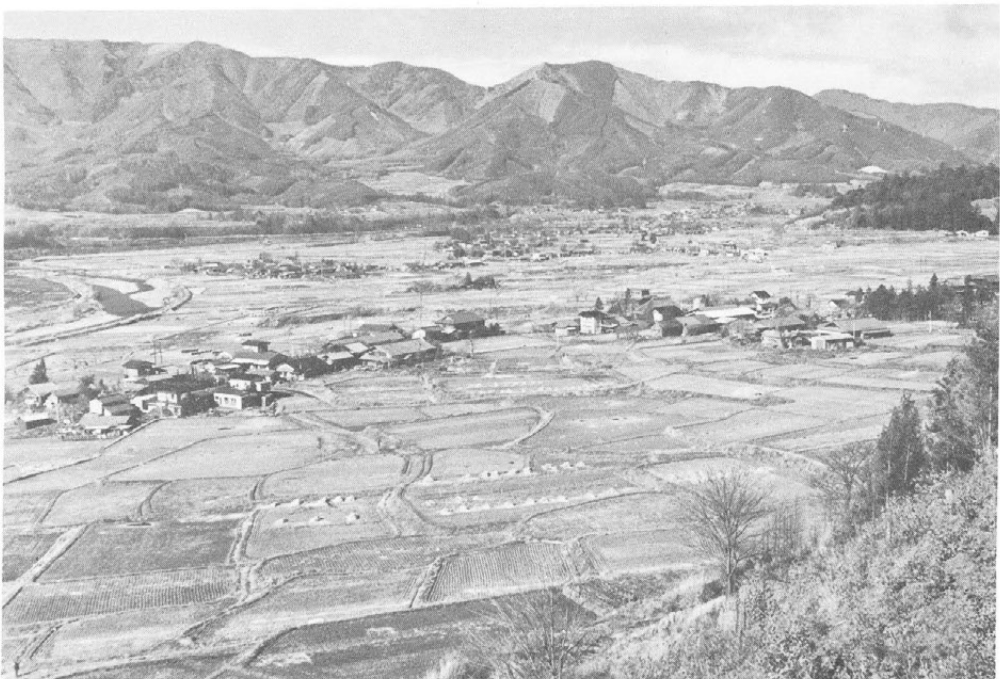
この弥生後期住居址よりも後出する方形周溝墓は溝の切り合い関係から2号址が1号址に先行する。このことは溝内発見の土器様相からも裏付けできた。第2周溝墓周溝内土器は溝底より若干浮いた状態で発見された。このことは溝が若干埋ってから置かれたと解せざるを得ない。しかし、時間的距離についてはさほど幅広く考えなくてもよいであろう。

また、この周溝墓の存在は八ヶの弥生住居の編年・出土土器の型式編年の樹立にプラスとなっている。



上. 北方より伊那谷を望む

下. 東方より樋口五反田遺跡配石址



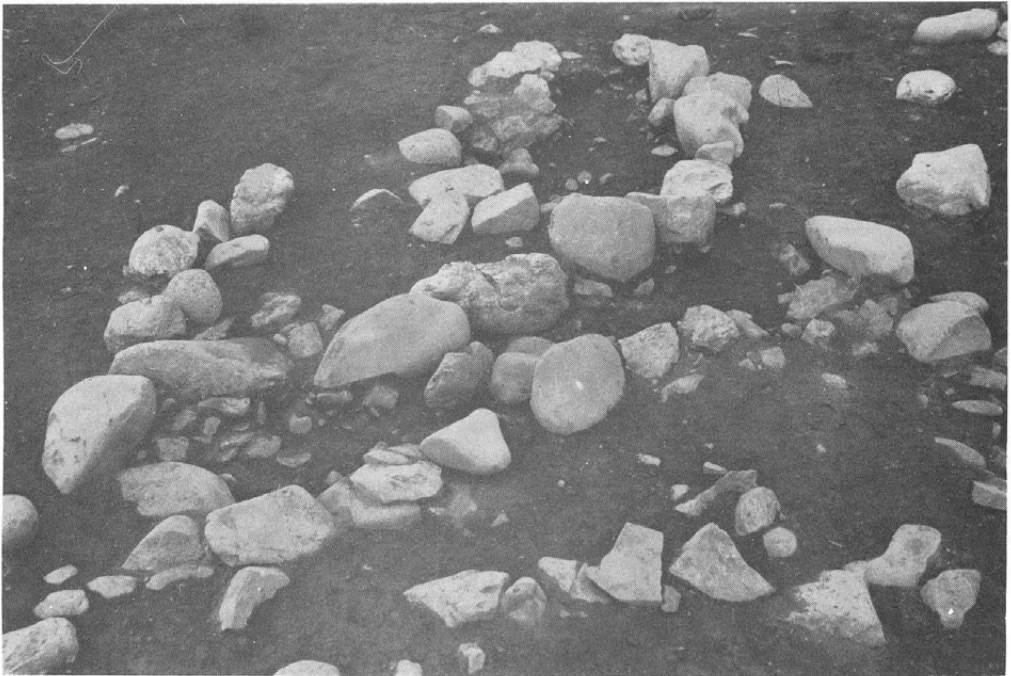
図版第2図 樋口五反田遺跡（北方より望む）



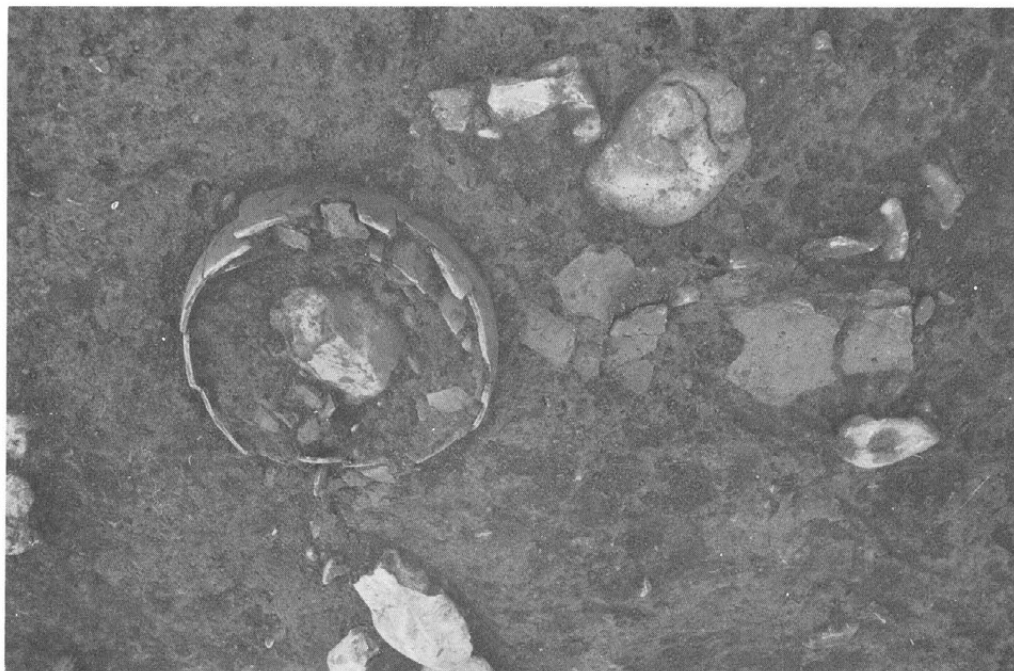


上. 全 景

下. 5号址・6号址

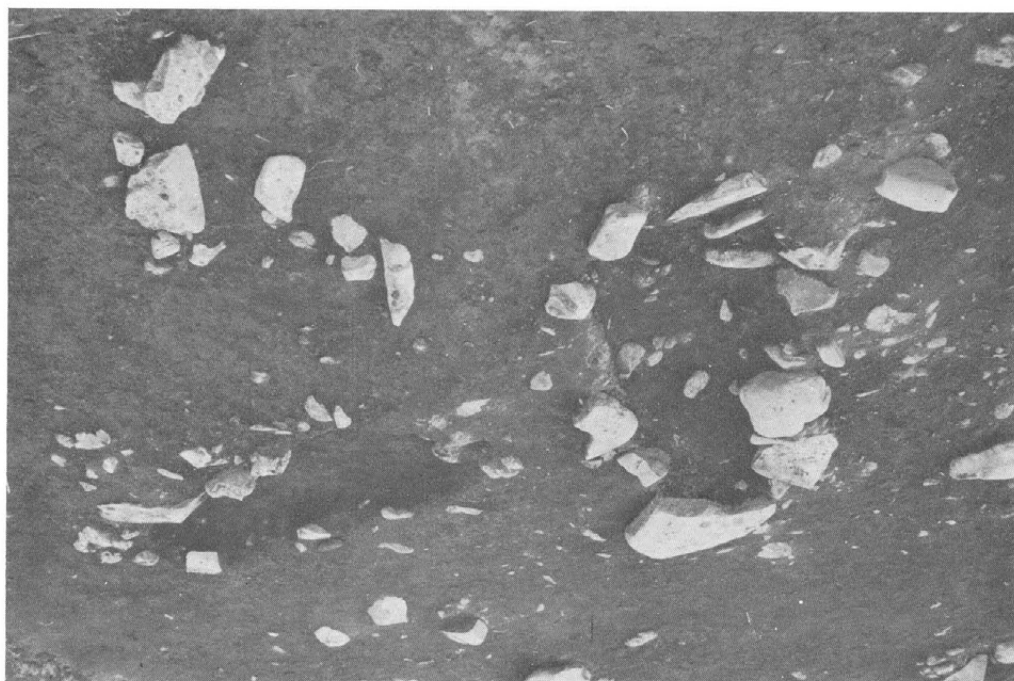


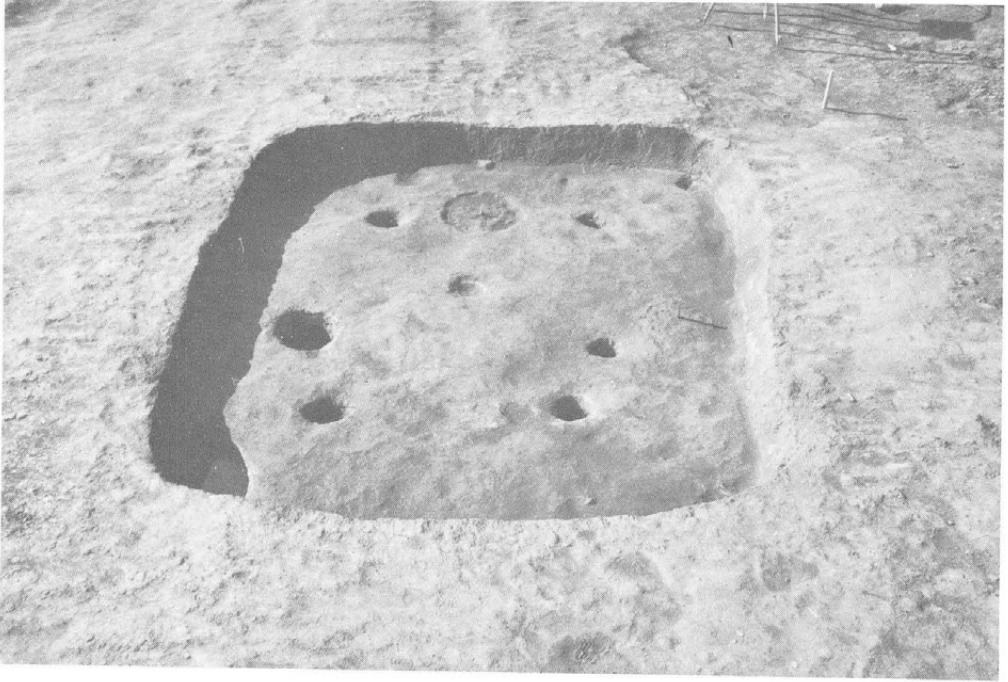
図版第4図
樋口五反田遺跡配石址
(2)



上. 2号址・11号址

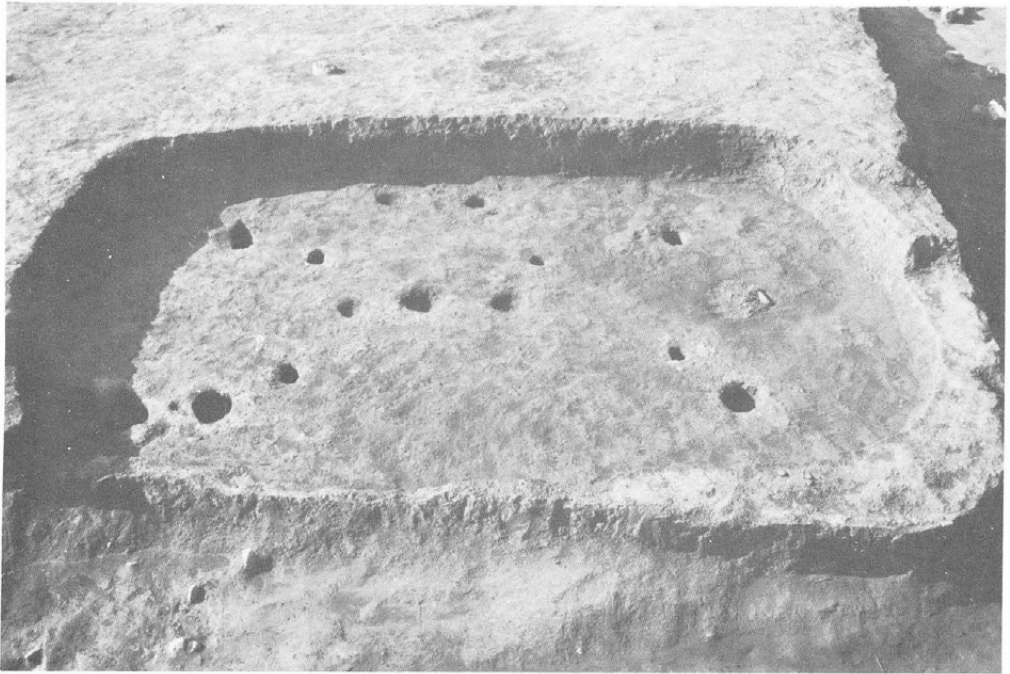
下. 16号址

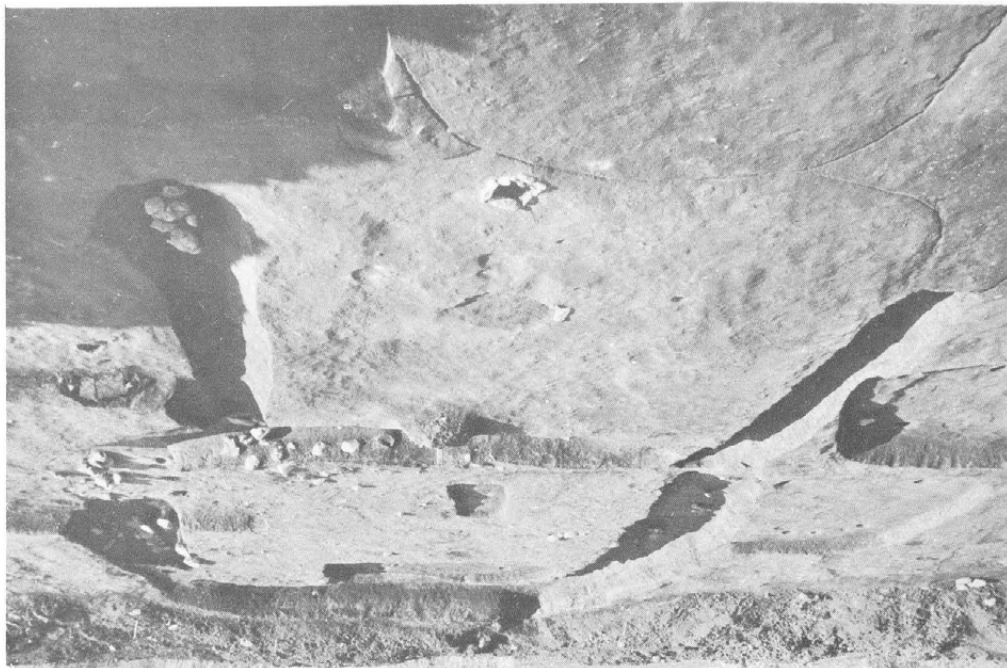




上. 8号址

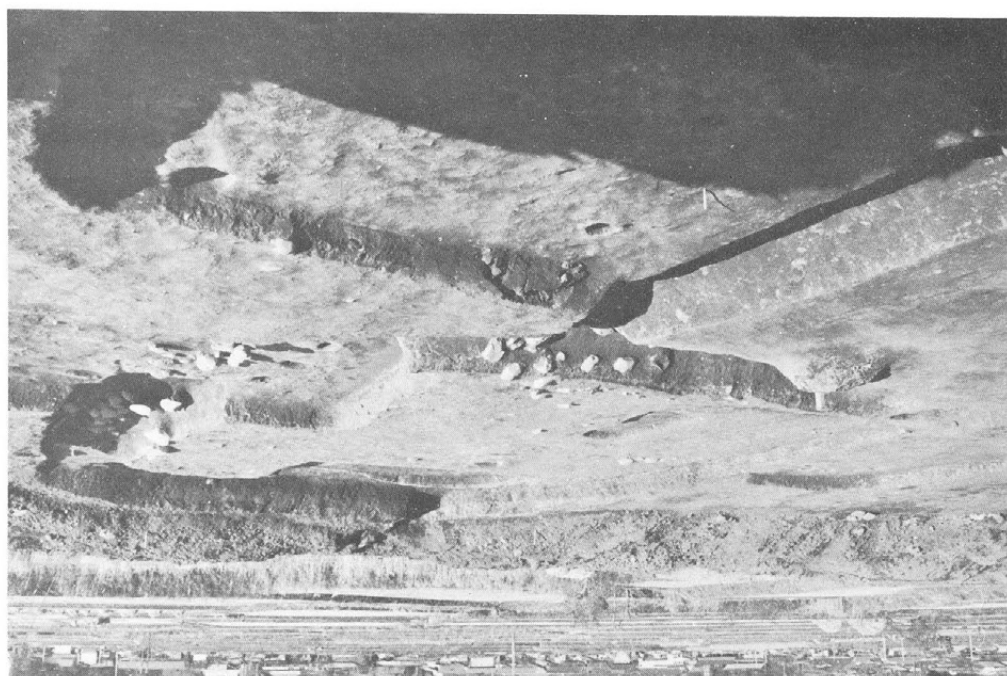
下. 9号址





上. 西方より1号址を望む

下. 2号址(手前)・1号址



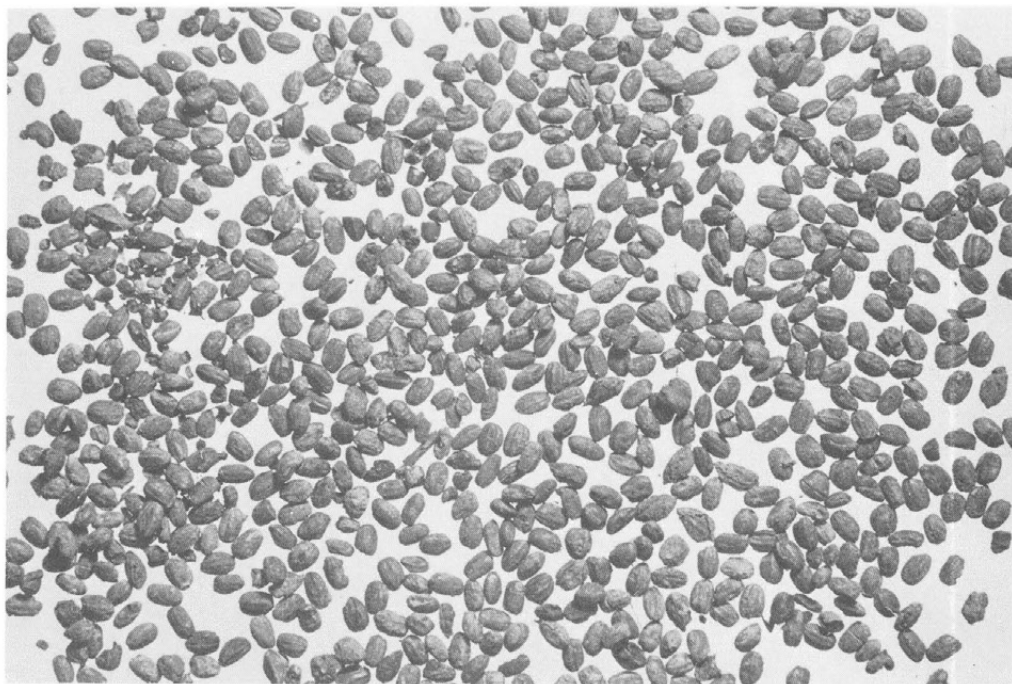


上. 16号址

下. 9号址



図版第8図 樋口五反田遺跡第16号住居址出土炭化米



長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

— 上伊那郡辰野町その1 —

昭和47年度

昭和48年2月20日印刷

昭和48年2月28日発行

発行者 日本道路公団名古屋支社

長野県教育委員会

印刷所 松本市元町2丁目4番10号

こまくさ写植印刷

〔非売品〕

